

人を放なくて助置せ給ふ事のうらめしきよ今は淵川へも身をなげ死んこそなど歎きける故則刑部卿を御使として内藤正兵衛へ仰合られけるとなんさても羽を並んと契りし采女はことあらんひるより頃日假イ制奈川に品川に置る母のもとへ罷り下りて居たりけるが神ならぬ身の哀さは右京がかゝる事ありとは露しらす海上を遙に望て孤帆一片日邊來と李白がいひけん又光源氏の慄慄し給ひし須磨の浦わの遠き事までも思ひくらぶるにも右京の事のみなつかしく誠に一日不見思千秋といひしもことほりにこそとおもひてうつら／＼とまどろみけるに夢ともなくうつ／＼ともなく足音高うして門の戸あら／＼かに敲きて文をもて來るを見ればしるべせし志賀左馬助より今宵しかくの事にて主膳は右京が手にかゝりその身は少しも手負すためしなき働き掟にまかせられ明日淺草の慶養寺にて切腹仰付られ候筈に候まゝ此旨申入候貴殿の胸中察入候

淺草の草葉にむすふ露の身を

とは、問る、消はてぬ間に

采女は見るより胸つぶれ硯引よせ書とはすれど鼻つ

まり筆のあゆみもはかどらず暫く時ぞ移りける誠にやくもしらせ給ふ事淺からず生者必滅會者定離の折らひ今にはじめず誰か百年の榮をなさむや惜まるの返歌もこそとおもへども事急なれば頓てまかで申さんとて歸し扱母へ對面し明日は殿日光山へ君の御使に立せ給ふよし我等も御供に召くわへられんとのよし告來り侍るされば又久し／＼うちむかふ事もあるまじければ首途に御盃を賜らんとて母の盃三度いだきくみかはしける其後母盃を扣へそもじあひかまへて道すがらよく／＼ものし給へ馬上に居眠りして身をそこなふな常よりも心をかたうもちて昔より恩の死はなけれども情の死はあるぞかし常にはげしく詞あら／＼かなる所にはいかなる鬼神も住がたし鴨は水に住ものなれどたぎりて落る早き川にはおりのすしてよどみに浮ぶものぞかし人間は猶かくのごとしされば古き人の歌にも

みよし野の菜つみの川の河淀に

鴨を鳴なる山蔭にして

是皆世の中にありふれし事なれば子を思ふ親の心の

やるせなくいとをしければよきがうへにもよかれかしと斯申ぞとはかなき諫の言葉にさすが思ひきりたる心ながらもすゝむ涙をせきかねておそふる袖をかきあはせ何事も畏り待るといふて立ければ母は門の邊まで立出でやがてめでたく來る身ぞと祝ふを老の力草影見ゆるまで延上り果は泪に淵瀬川神ならぬ身の哀れさはけふを限りのわかれとは後にぞ思ひしられける采女はかねて用意の馬にすゝろにかくあてかの淺草慶養寺へ只ひと飛に駈附見れば東雲しらしらと山門のあく間おそしとかたはらにたいすみしばし息をぞつきにけるはや人聲も聞ゆるに見法師等も集りてとり／＼に沙汰し侍るをきけば容顏いと美しき若衆の來りて腹をこそ切とかやさぞかし親たる人の歎き給はんあないとおしなど聞けばいと胸塞がり打しほれ居たりけるに誰いひ傳ふともなく物見たけくも人々集りける中にもし我を見知りたる人もやあらんとかたほとりに立しのぶ心の中おもひやるさへあはれにて采女が心しられける羊のあゆみ山門へ駕擔すゆれば右京もけふを一期の死出立白く清らかなる雪のはだへに白無垢著重ね薄紅梅裏綾の小

袖に五色九しきの色系にて朝顔を縫せ人目たつ縞の袴ふみしだきあたりを見れば數々の卒都婆立けるを誰家々の涙なるらんとよみしむかしも思ひ出られいと哀れもいやましけるに寺中のこなたに咲おくれたる山櫻一際咲たるを見やりて縦舊年花殘稍待後春是人心頼みがたきはた人の心とうち恨たるは采女の事にぞあるべきさて時刻もうつれりいざ／＼最後を急んとみどりの黒髪少しきり介錯吉川勸解由にむかひ是は堀川の母のもとへよきたつきの折から永きかたみに見給へと届てたべとたのみ置おくれの髪をかきあげたる所へ和尚欠來り右京にむかひ心のうち晴やらぬは罪深し思ふ事ありなばかならずつゝみ給ふまじなどいひければさもうれしげに顔ふりあげ厚き情のことはよと思ふ事何しにつゝみ申すべき生者必滅のことはりかねて覺悟の事に候へば衰老容色あらたなる時本意を達して自劔の上に臥す事是即心成佛にあらずやと云ふて左の袖より色ねたましき短冊取出し筆を染辭世とおぼしく

春は花秋はもみちとたはふれて

なかめし事も夢のまた夢

和尚泪を流しきてもいさぎよくとれるものかな即
心成佛おもしろし三界一心の外無別法何かうたがひ
のあるべきや未姑息もしらざれども詞のゑんに引れ
つらんと先居士位をあたへんとて

花童院劍切利空居士

俗名伊丹右京^{十六年}

と與へければ右京頭をあげ死出の名聞忝しと拜謝し
てくきやうの太刀をいたいかんとする處へ彼舟川采
女是も練ぬきの袷に袴のそぼ高くとり寺中のかたは
らより走り出右京が太刀にすがりつきてさてもはか
なや舊年の花のかこち言葉や末の露もとの雫と後れ
先立は常のならひとはいひながら御身をさきだて我
ひとり生残りいかでか人間常住の壽をなさんやわか
木の櫻春を失ふもひとへにわがなすひが事よりおこ
れりかねてのあらましの如く後の世までもひとつ臺
にひざならべ侍らむまづ死出の山路の露踏分て三途
の川に待べしといふよりはやく左の脇に突立んとせ
し所を勘解由をはじめ和尚右京誰かれ走り寄り寄て押と
どめこはいかなる事にて侍るぞ御身ひとすじに跡を
したひ空しくなり給はい跡にまします父母へいかな
る御いきどほりのかゝるべしやまのあたりこの人々

へうきめを見せ給はん事返々もしかるべからずとて
太刀をとらんとすれば采女氣色を損じて勘解由をは
たと白服凡名利を先として弓馬の家を護衛するもの
つたなくも約を變ずる事やあるまじくかく老若貴賤
の見る目もいとはずかけ出て腹切らんといふをとい
むるといふ事やあるよし思ひとゞまるにもせよ此事
はやく世上へばつと沙汰ありて重き御たゝりにあふ
て此上に耻をさらさんはいかばかりくちおしきこと
ならずや龍門原上の土に骨は埋とも名を不埋といふ
事をいまだしろしめされずやといかれる眼に泪を流
しよし此上はとにかくにかまへてとゞめ給ふまじと
どめ給し後あらぬ死にあひ候はゞ却てたらちめの顔
を汚し又人言に情なくもとゞめし故と世の人口にか
かり給ふを聞も不快なり只此上は諸共に死なせてた
べとかきくどく心の中ぞたのもしきとゞめし人々今
ははやかくまで淺からぬ志を何しにとゞめまいらす
べき心靜に用意あれと泪をうかべ立退けば右京は采
女にすがり付さても淺からぬ御志のうれしさよ今は
の言葉にいひ盡しがたし兼てのあらまじのごとく後
の世にはことごとく一つ蓮花の上に半座を分て待申

さんと人目も耻すいだきつきたがひに顔を見つ見せ
つしばし詞もなかりけるわりなき中の美しき今は時
刻もうつれりと雪の肌へをおしくつろげ左の脇へ突
こめば采女もとおしはだぬぎ我こそ先に三途の
川の瀬踏をし侍らんとおなじく腹へつきたつる辭世
諸共にいさゝは我もこゆるきの

いそきてゆかん死出の山川

かくいひ置右のかたへ引まはしけるが後はたがひに
さしちがへ打かさなりて臥にける誠に君が一日の情
に妾か百年の齡をあやまるといひしも是ならん惜む
べし悲むべし十六歳と十八歳を一期として寛永の春
の未まださきのこる如月の花のいとしや嵐にさそは
れて短き縁や淺草の露と消にしいたはしき附したが
ひし家の子どもはやてにあひし釣舟の行末いつと定
なき斯てはあらじと慶養寺にて髪をおろし主人の普
提を弔はんとす心の程ぞたのもしきさて不日に二人
の印をならべ辭世を位牌のうらに彫つけ今の世まで
も此寺に朽ぬその名を残しけるさても志賀左馬助は
媒といひまして采女とふかく契りし中なれば追付て
腹切べきに中々その氣色もなく剩花にもみちとたは

むれて死んすけしきも見えざれば若き人々にくみの
のしり後はうちつけにいかなれば御身かくまでおく
れ給ふものかなよく命はおしきものよなど耻し
めけるかくてけふもはや花童院と采女が初願の忌日
也誠に夢まぼろしの世の中やと皆涙を流しおのゝ
詩歌連俳の悼をさゝげしに左馬助人より先へすゝみ
出て

むつましく契りし人を先立て

と書て手向けり側によみ人しれずとして
身をいかにせんとおもはゝ腹をきれ

たれも此世にとむる人なし
など、嘲り侍るよし殿の御耳へも入りしかどいかい
おほしめしけん常に替る事なく召使はれけれども左
馬助おもてぶせにて斯人々に嘲り誹られ殿の御聽に
も達しなばいかなるうきめにやあひて命を失んもは
かりがたし事ひろくならぬうち他の國へ立越身ひと
つをやすく過んとその夜人しづまりて書院のやり戸
の上を引はなしふためきあはて立退んとするを蚊の
はしの落るをも聞付んと心耳をすましとのゑ守りの

人々聞付すはくせものござんれと我をとらじと欠付てひた／＼と抱きとめ見れば志賀左馬助なりければ其儘かくと達しければやがて御聴に達しけるにいそぎ今宵中に害せよと仰出されれば常々人のにくしと思ふ左馬助なれば早速畏り若き人々羽がひじめにく／＼しあげ浅草へつれ行害しけるとなん嗚呼誰か千年の松樹ならぬ世にかく迄一命を惜みて末の世まで名を汚し侍る事は如何ぞや彼茶道松齋が媒せし事も御聴に達し是もしほり首をを刎られけるとぞ最初は只かり初の事なりしかど七日立ざるに四人浅草の露と消にしも過去の因縁とかやいはん勘解由情ぶかきものにて彼紀念の品々とりした／＼め五月初に都堀川へ送りしが母の歎いか計ぞと思ひやるさへ哀れなり後に聞ば加茂川のみくすとなりしとも又もの狂しくなりて其年の仲の秋下の四日朝の露と消失ぬとも聞えける哀れなりける事どもなり返々もわかき人は只君父の高恩を片時も忘るゝ事なく慎の上にも厚く慎むべきは此道ならんと思ふに付て何がしの物がたられしをそのまゝにかきとめゆるものならし

此書は藤原の縣麿が去年の春二月九日慶養寺の檀越なりける升屋某に抄借したるを今春む月廿日あまり八日の日に借侍りたりしかば次の日の旦よりその夜のうちに寫しとりつ原本も倉卒に寫しとめたるよしなれば誤字脱文あまたありさてかの縣麻呂が寫したる原本には天明らけき七年末初冬常陽の人某寫すと與書ありけるよしを記しつかれば慶養寺より直に借抄せしにあらでいづれもく傳寫の本地西鶴が男色大鑑卷の二に載たるにもこの書の文を多くとり用ひたゞ憚ある人名を省けるのみなれば漢唐物語は貞享已前の記録なる事あきらげし文章の拙なきはこゝに論ずべからず是も當時の人氣をしるの一端なれば寫とりてはし書しむづから警め又人を誡るものなり

文化六年己巳春正月下旬

瀧澤解重識

總評

伊丹右京ハ主公ノ男寵ヲ得タルモノ也然ルヲ舟川采女コレヲ眷戀スソノ迷ヒ甚シ亦左馬助ハ采女ガ親友也彼ヲ諫メズシテ強テ其情慾ヲ遂サセントセリコレ亦信義ノ人ニアラズソノ迷ヒイヨ／＼甚シ右京モ又罪アリ君寵ノ忝ヲ忘テ左馬助ニソノカサレ終ニ采女ト臭骸ヲ抱ク是又忠義ノ人ニアラズコノ三人忠ニモアラズ義ニモアラズミナ是聖人ノ大道ヲ知ラザル故ニ尾生ガ橋梁ヲ抱クノ信ヲモテ死テ悔ズ悲イカナ

細野主膳ガ節木松齋ヲ媒トシテ右京ヘ思ヲ運シタルハ亦是采女トソノ罪同ジカタテソノ思ヲ果サザルヲ以テ右京ヲ討ントハカリシハ迷ヒマス／＼究レリ右京此風聞ヲ聽クトイヘドモ未タ其虚實ヲ知ラズ然ルヲ主膳ヲ討テ其過ヲ累タルハ勇餘リアツテ其智タラズ早クコレヲサトラバ自ラコレヲ禦キヤム事ヲ得ズバ何ゾ主膳ガ手下スヲ待テコレヲ撃ザル若シ主膳怒ニ任シテ右京ヲ撃ント罵ルコトアリモ亦思トハマル事アラバ其罪ヒトリ右京ニアリ只人ノカゲ言

ヲ信ジテ事ヲ思ヒ定ルハ淺智ノ所爲也弱年ノアヤマチカ、ルコト多カリ思フベシ慎ムベシ

公右京ヲ寵スルノアマリコレヲ殺スニ忍ビズコレ宋襄ノ仁ニアラズヤ主膳ガ母コレヲ某ノ院ニ愁訴セシモ亦其所ニアラズ内藤生又内意ニ依テ公ヘ異見ヲ加ヘタルモ亦其人ニアラズ是彼ハスベテ私情ヲモテ公道ニオヨボスモノナリ

左馬助松齋又刑ニアフ事果シテ實ナラバ極テ是苛法也只追放シテ可ナラム公男寵ニヨツテ右京ヲ助ントシ却テ左馬助ト松齋ヲ殺セシハ私情ナリ公道ニハアラズ

右京采女ハ不忠不孝至極ノ人也主膳左馬助松齋等ハ不狂人ニシテ狂人ト共ニ走レル人也論ズルニ足ラズ漢唐物語ノ作者只其事ヲ述テ勸懲ノ文少シ文辭ノ鄙俗ナルヲ強テホノメカサントテ綴シカバ文義分明ナラザル事多カリ是ヲ見ル童子等信義ハカ、ル人ノ上ニコソナド思ヒマドフモアラシカトテ蛇足ノ辨ヲ添ルノミ例ノ僻言ニヤシラズ

文化己巳春二月三日校了

馬琴印

夢の浮橋卷上

題詞

富岡神會大江頭岸上連棚岸下舟戰車超乘靈巖島舩服
新裁永代洲
士女喧闐溢九遠虹橋天柱不知危摧頽共委江魚腹歌笑
炎涼變一時
累々遺骸曝路隅水脚秋社輟歡娛如狂一國人皆散橋斷
江天缺月孤

杏花園圖

夢の浮橋發端

第四十六代聖武天皇 次の御門聖武天皇と申き文武
天皇の御子御母不比等の御女皇太后宮の御子なり養
老八年二月四日位につき給ふ御年廿五世をしり給ふ
事廿五年なり年號神龜とかへられにき二年と申し、
にもろこしより柑子のたねをもてきたれりき是より
はじめて此國には出來をめし也三年と申し、七月に
大上天皇れいならずおはしまし、其御祈に御門山
科寺のうちに東金堂をばたて給しなり其年行基菩薩
山崎の橋をつくりて其上に法會をまうけて供養し給
ひしに俄に大水出て流れ死ぬる人多かりき

右水鏡に出

貞和五
今年多くのふしぎ打つやく中に洛中に田樂を翫ぶこ
と法に過たり大樹是を興せらるゝ事又類なし去ば萬
人手足を空にして朝夕是がために煙費す關東亡んと
て高時禪門好み翫びしが先代一流漸滅しぬよからぬ
事なりとぞ申ける同年六月十一日抖擻の沙門有ける
が四條の橋をわたさんとて新座本座の田樂を合せ老

若を分て能くらべをぞせさせける四條河原に棧敷を
打希代の見物成べしとて貴賤の男女こぞる事斜なら
ず公家には攝祿大臣家門跡は當座主梶井二品法親王
武家は大樹是を興せられしかば其以下の人々は申に
及ばず卿相雲客法諸家の侍神社寺堂の神官僧侶に至
るまで我劣らじと棧敷を打五六八九寸の安の郡など
を鑄貫て圍八十三間に三重四重に組上物もおびた
しく要へたり(中略)かゝる所に將軍の御棧敷の邊よ
り巖き女房の練貫の妻高く取けるが扇を以て幕を揚
るとぞみへし大物の五六にて打付たる棧敷傾き立て
あれ、と云程こそあれ上下二百四十九間將基倒し
をするがごとく一度にどうとぞ倒れける若干の人物
共落重りける間打殺さるゝ者其數をしらすかゝるま
ぎれに物取共人の太刀刀を奪て逃るも有見付て切て
留るも有或は腰膝を打折られ手足を打切られ或は己
と扱たる太刀等に此彼を突貫れて血にまみれ或は湧
せる茶の湯に身を燒喚叫只衆合叫喚の罪人もかくや
とぞ見へたりける田樂は鬼の面をきながら裝束を取
て逃る盗人を赤き裾を打振て追て走る人の中間若黨
は主の女房を搔負て逃る者を打物の鞘を外て追懸る

返し合て切合所もあり切られて朱に成る者も有修羅の闘諍獄卒の呵責眼の前にあるが如し梶井宮も御腰を打損せさせ給ひたりと聞えしかば一首の狂歌を四條河原に立たり

釘付にしたる棧敷の倒るゝは

梶井の宮の不覺なりけり

又二條關白殿も御覽じ給ひたりと申ければ

田樂の將基倒しの棧敷には

王計こそこのぼらざりけれ

是徒事に非ずいかさま天狗の所行にこそ有らんと思合て後よく聞けば山門西塔院釋迦堂の長講所用有て下ける道に山伏一人行合て只今四條河原に希代の見物の候御らん候へかすと申ければ長講日已に日中に成候又用意の棧敷など候はで只今より其後に臨候とも中へいかい入候べきと申せば山伏中へ安々入奉るべき様候只我跡に付て歩れ候へとぞ申ける長講實も聞る如くならば希代の見物成べしされば行て見ばやと思ひければ山伏の跡に付て三足計あゆむと思ひたれば覺す四條河原に行至りぬ早中門の口打程に成ぬれば鼠戸の口も塞で入べき方もなし如何して内へ

は入候べきと佗れば山伏我手に取付せ給へ飛越て内へ入候はんと申問實しからずと思ながら手に取付たれば山伏長講を小脇に挟で三重に構たる棧敷を輕々と飛越て將軍の御棧敷の中にぞ入にける長講座席中の人々を見るに皆仁木細川高上杉の人々ならでは交りたる人もなければいかい此座には居るべきと蹲踞したる躰を見て彼の山伏忍びやかに苦かるまじきぞ只それにて見物し給へと申間長講候様ぞ有らんと思て山伏と並で將軍の對座に居たれば種々の献盃様様の美物盃の始るごとに將軍殊に山伏と長講とに色代有て替るゝ始給ふ所に新座の樂屋より猿の面をきて御幣を差上橋の高欄を一飛とんで拍子を踏み蹈んでは御幣を打振て誠に輕げに跳出たり上下の棧敷見物衆是を見て座席にも溜す面白や堪がたや我死るや是助よと喚叫て感ずる聲半時計そのゝめきける此時彼山伏長講が耳に叩けるは餘りに人の物狂しげに見ゆるが憎さに肝潰させて興を醒せんするを騒ぎ給なと云て座より立て或棧敷の柱をゑいやくと推とみへけるが二百餘間の棧敷みな天狗倒しに逢てけり外よりは辻風の吹をとみへける誠に今度棧敷の

義神明御陣を廻されけるにや彼棧敷崩て人多く死ける事は六月十一日なり其次の日終日終夜大雨車軸を降し洪水磐石を流し昨日のかはらの死人汚穢不淨を洗流し十四日の祇園の神幸の路をば清めける天龍八部悉く靈神の威を助て清淨の法雨をそゝぎける有がたかりし様なり

右太平記卷二十七に出

今出川家今川家毛利家北條家南都天正本並云又四條河原に札を立

去年は軍今年は棧敷討死の

所は同じ四條なりけり

右参考太平記ニ出

勸進ノ田樂猿樂棧敷ニ出ル事前々ハ一官一職ニ至ル程ノ人不望其前然ル近代ニ條攝政殿初テ見物セシメ給門跡ニハ梶井門主同ク令出給其後二家ノ輩并諸門跡見物連綿ナリ雖然近衛殿一條殿ハ未ダ出給ハズ門主ニ者御室曾テ不令出給一年田樂棧敷多ク崩レテ見物ノ道俗留命其棧敷ニ二條攝政殿以下公家ノ人々多分令出棧敷之間何者カシタリケン落書ニ
田樂ノ將基ダヲシノ棧敷ニハ

王許コソ登ラザリケレ
同棧敷ニ梶井宮令出給ノ間落書ニ

釘付ニシタル棧敷ノ破ル、ハ

梶井ノ宮ノ不覺ナリケリ

其比ハ如此棧敷ナドヘサリヌベキ人ノ出タルハ不可然事ト諸人思ヘリ仍テ落書ナドモ有ケルニヤ當代ハ只出ザルヲ難トス

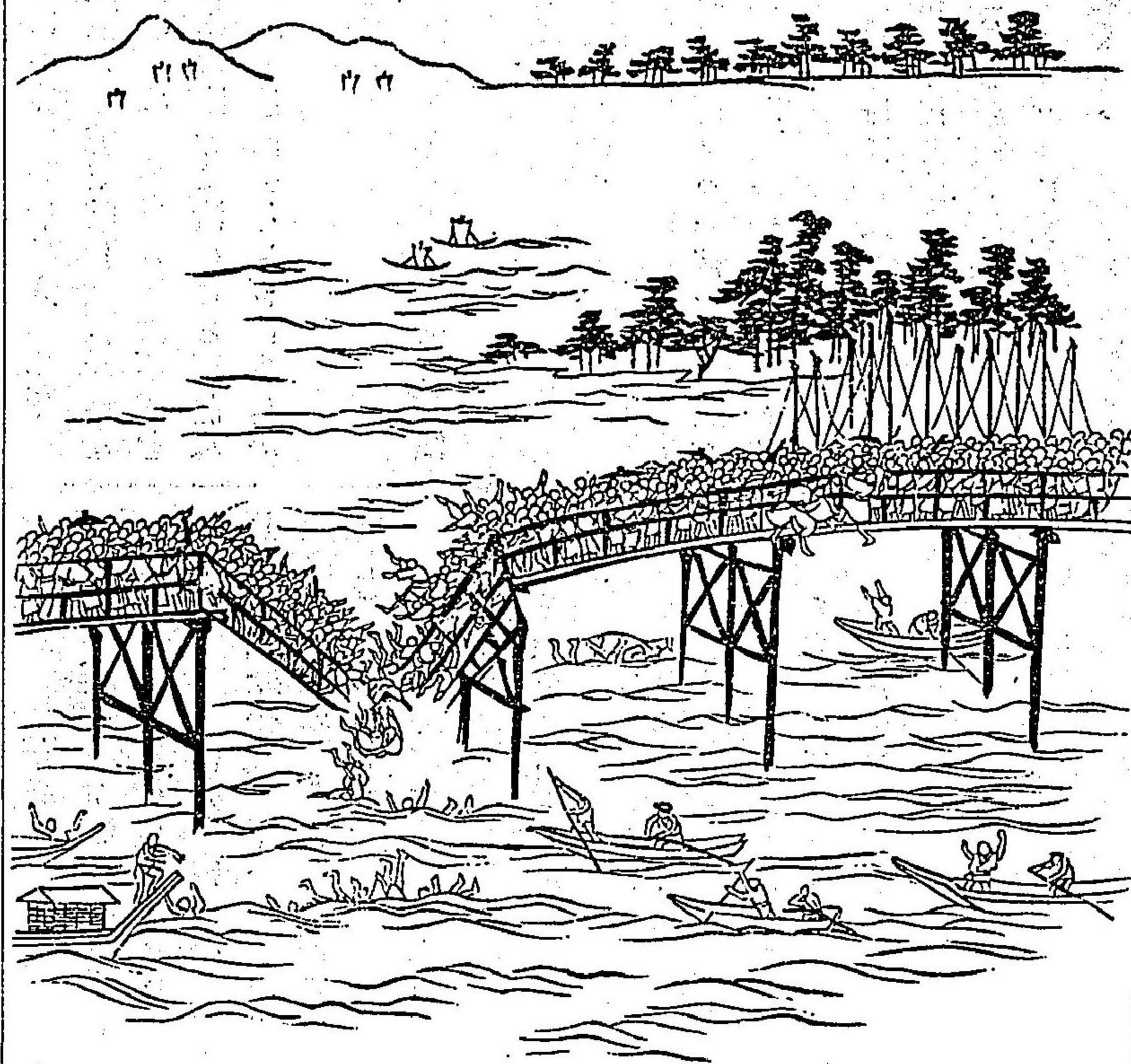
右惠命院内大臣權僧正海人藻屑ニ出

神龜三年丙寅行基菩薩造ニ山崎橋ニ故老相傳云造レ橋畢後菩薩於ニ橋上ニ大設ニ法會ニ洪水俄至橋流人死粗其數云々

右扶桑略記ニ出

屋代弘毅輪池云普通の本缺卷の所なりこれは尾張國大洲の眞福寺に藏する所の古抄本に據てしるすその本をうつせし温故堂にのみあり(山崎橋興廢考)

永代橋破損之圖



富岡八幡宮又河別當大榮山永代寺金剛神院

鎌倉鶴岳同社

左右 伊勢 春日

中興開基周光阿闍梨

神林菅神の御作源賴政是を崇む其後千葉の家に移り足利尊氏へ傳りそれより鎌倉基氏持氏同管領上杉家敬し太田道灌ふかく信すとなり其後寛永元年のころ長感法師靈夢の事ありて永代島に宮所建立し同八年にあたりて巧に成就す同二十年八月十五月初て祭禮行はる慶安四年の頃法務貫首におほせて宮寺となさる同年の秋神前にて流鏑馬をはじめ是鶴岡の法式をうつすとなり

東鑑二卷曰治承五年辛丑五月十三日爲鶴岡若宮營作材木事有共沙汰土肥次郎實平大庭平太景能等爲奉行又曰同年七月八日淺草大工參上之間被始若宮營作

(下畧)

東鑑九卷文治五年四月三日鶴岡祭二品御參宮馬場儀馬長(十騎)流鏑馬(十五騎)競馬(三番)下畧

又礪石集に云和州生駒無動寺の開山寶山和尚正保三年十八歳にして永代寺周光阿闍梨の弟子となり寛文四年臘八の夜寶山和尚靈夢の事あり渡邊大隅守と合

夢の浮橋卷上

跡して不日に社成就す今の富岡八幡宮是なり猶

委き事は其書にゆづりて大意をしるす

萬治三年の夏御室の宮日光御社參御下向にまうで給

ひ天下安全の御祈念ありおりから兩院の御詠

永き代の榮久しきこの島の

恵みたえせぬ神かきの内

立ならふ常磐の松も色そへて

治る御代は永き代の寺

當社四隅鎮守 丑寅 摩利支天社 未申 この四

社境内を離れ五町三町の間にあり

寺院 功德院多門院吉祥院大勝院海岸院愛染院

歌仙櫻 正徳の頃園女と云女の俳諧の宗匠三十六本

の櫻をうゆるよほどはかれて半ばのこれり

海へふけ詣の顔も櫻かせ 常盤潭比

一の鳥居 社より三四町西にあり此所に永代寺の函

丈有この鳥居より門前へ町家茶屋多し鱈、蠣、蛤、當

所の名物なり

以上江戸砂子

以手紙致啓上候秋冷之節彌御安泰奉賀候然者八月十

五日深川八幡三十四年目祭禮にて殊に今年に身延山

尊像同所淨心寺にて開帳有之依之其賑ひいはん方なしさて七月末より祭番付賣歩行く其沙汰には踊子の母衣類十三着其子二十四着又日本一の美女十二ひとへを着し小野小町と號し六歌仙の一人なり又婦人を剃髪させ髮延候まで町内の扶助のよし又業平黒主杯は各装束美成事言語に絶たりとかやあるひは五節句又は十千十二支十二月七福神など思ひ付候由此評判大かたならずしかるに十五日は雨降り十九日に相成當朝神輿三社第一は八幡宮第二は太神宮第三は春日宮となり外の祭禮は跡より神行なり深川は橋の往來群集につき早朝より神輿渡候古例のよしにて既に當朝輿昇百人ほどづゝにて揚候處いか成事にや三社とも動かず輿より水のたるゝ事汗の如しとかや暫く有て漸昇揚候所春日宮の輿は鳴りしとかや彌怪稀の事におもひ定めて大喧嘩こそあらめと評し候となり又靈岸島邊にて神行の節備置候神酒一吸も無之杯申ていよゝ不審に唱しと承候

一十九日四ツ時過群集をなしやれ橋が落るそれ橋が落るといへども人々更に不入開折節本所しゆもく橋邊にて十七八歳の女首を切落され候由にて是へ

參る人に祭の人一ぱいに相成折から橋向へ一番のだしを引出せしをそれ祭が渡ると云程こそあれエイノ聲にて又向にはかさなる人にて鐵棒をふり廻し打はらへば橋の上へ逃上り此方からは押かり候折ふし東の橋詰より一ト間殘し豎十二間程二ツに折て落けるにぞ又跡より押落し候人幾ばくの由やれ橋が落たゝと呼はれども偽とのみ心得しにや却て押もあり又中程が落しと心得東をさしてにぐるもあり又此騒動にこそばくの怪我ありとかや然るに或士橋桁にしがみつき刀をぬき振廻しけるを見て夫喧嘩じややれ抜たはと云程こそあれ人入西をさして逃歸此仁に助られし人々いくばくか知れずとなり誠に即智の働き萬人の命なりとぞ聞へし

一家根船壹艘橋の日影にかゝりけるに此船むざんにくつがへりしとなり

一其邊に居合候舟ども數多の人を助けし人をも疵人多し

一兩御船手よりはや悉く船にて引揚候此働抜群の由有難き事共也

一又自身とあがり候人多しとぞ折節引沙にて揚り場泥深く腰たけぐらゐと承る

一右之所引沙といへども水丈深く尤此程の雨にて甚濁り其上近頃瀬にて向へ廻り橋も折々修覆有之候へども向は古橋とぞ追テ可考アルハシ

人數大積り橋豎十二間幅四間程此坪數四十八坪但二坪老若二十人詰凡九百六十人此目方九千六百貫目程但壹人十貫目平均外に落され候人不知と也

早速川中の船御用船に御引上げ流るゝ人御助ありて怪我人は十が一にも及ばずと是御威光の難有所なりと人々感涙せしとぞ

一十九日四ツ時半時怪我人五十人と聞へし駕籠が一挺日傘は澤山流れしとなり八ツ時半時八十八人夕方百八十八人餘といへり

一廿日朝三百人餘内女八十人餘同日佃島邊にて揚ケ候人七十餘人となりいづれも兩日にて四百人程と申候右之内には全快も多かるべし

一永代橋向へ葭藎を張怪我人を揚げ醫師を懸ケ被下候となり此醫師たち裸にて腰へ印籠をつけまこも

藁杯にてあぶり候よし入口に泥繩五通り張り見物を制し心當り有之もの計入れ候となり

一大橋も既に危きにつき人留め兩國橋にても人を計り候由都て深川本所二面の人にて深更に歸る人多し

一十九日晝九ツ時佃島漁師へ被仰付繩網の地引にて忽百人餘も揚ケ候由同日終夜揚しとなり

一同日夜に入れ共人々歸り無之に付江戸町々より迎の人紙幟に何所誰迎としるし最寄りに詰かけ候人幾万億といふ事を知らず又迎の共迎二番手三番手と追々かさなり江戸中の騒ぎ人命にかゝり候事故警るにもものなし杯申あへり

一鉦大鼓にて尋候ものあり是等は何人歎利害申聞ても此騒にて鳴物の届く所にあらず只挑灯合印を以尋ね可然ととゞめ候よし尤に聞へ候

一入水の内駕籠四挺内壹挺鉦打乗物内に怪我人ありといへり此連男女十三人なりといへり

一賤しからの婦人仕事師の半てんきせかへ介抱のもの有之介抱行届候と也

一小屋の内に老若一人六七歳の女子と手を引合候儘

揚り老女の腹の上に近江屋何某娘と申手紙を乗せ
置候よし又廿四五の士の帯を十歳許の男子右の手
にて握りし其儘引上げ置しとなり
一麻布邊の者近所の子供兩人落し無申譯とて子細を
申置證據とて羽織を殘し入水せしとかや
一ある男實子を助け他人の子一人失ひ申譯無之迎さ
けび候よし然ども子にひかされてや夜もすがら川
邊に泣あかしけると也
一あらめ橋邊に十七八の女子一人泣すくみ候をある
人間ふ答曰わらはは母を水中に落し救ふ事叶はず
年來の高恩むなしく見物いたし候心中を御察し被
下かしといひしとなり
一ある女房水に一子を失ひ亂心いたし候よし
一神田邊の人男子二人同道の人有之といへどもあま
りに歸り遲きに付尋に出殘る母壹人居候處へ表に
て兩人の子供頻りに母を呼び只今歸りしと申聲に
母は大に悦び立出候所に月影のみにて形は見へず
母奇異の思ひをなせしに翌日二人とも揚りしとな
り母愁傷して人事をしらずと聞へし
一神田邊のもの泥まぶれにて橋向を狂ひ歩行しを知

る人間其許は何故狂ひ給ふやと答曰身共は入水し
て死せし也此所は町なるかと申せしとなり
附りうろたへたる時まゝある事なり先年ある士
つなげる船に釣す折節早手來り此船佃島へつく
里人問いづれの人なるやと此人砂に文字をかく
打よつて是を見れば日本と計記しとかや是等の
格なるべし心得べき事なり
一深川高橋邊の土船船頭とかや此者入水しながら水
に巧者なれば女子二人をたすく此兄弟藏前邊にて
伊勢や何某が娘とかや翌日禮物として米金其外車
にて贈りしとかや忠の中にかやうに徳付たる人も
あり是仁心を天の助るやといへり
一或若黨橋落口二間程にて押合の内手早くも衣類を
ぬぎ捨主人二人女子とかや明輩老女一人此三人を
股引に取つかせ御覺悟と申落候所三人すがり候程
に浮く事不能水中をくゞり難なく岸に上り三女を
助候となり忠義の一念不思議の働きといへり此若
黨泥の中をむたひに這上りしと見へて茶わんのか
け又陶のかげの疵なるか胸腹にうす疵數ヶ所みへ
しとなり

一怪我人の小屋の内盗人油断ならざるとなり
一或老女孫三八五更のころ漸歸りしに餘りに歡びし
が氣絶して大病のよし
附り老人には吉凶ともに一概に聞せまじき事と
かやたとへば孫三人は別條なき由申人ありとも
又どこそにて誰逢しなど聞せ凶事も右に準じ
病ちと六ヶ敷又は少し快と申又六ヶ敷と申いく
度も申時は自然と覺悟有て宜ものとかや可心得
の一條なり
一或人落たる人をあげんとして大勢に取付れ人の爲
に引こまれしとなり
附り按るに大井川杯の川越しあやまりて人を流
し候得はさはがすとも流れ旅人の顔へ水をは
ぢきかけ半死半生の折から引上げ助け候といへ
り是ともに引込れまじき覺悟尤とかや可心得も
の也
右の趣荒増申進し候人の罪を記すは聖のいたむ所又
人の凶をあぐるも心なきに似たれども傳承りし中に
は御心得に可成事もあれば夫のみ御取用可被下候爰
元いづれも別條無之候御案事被下間敷候以來共群集

中へ御出御無用に候當家杯はかやうの節は門留めに
候間若き人は本意なくも思ふべけれども實は安心の
事に候在方は門留めもなければ御自分御慎可然候以
上
八月廿六日
存命 三百四十人
溺死 四百四十人
助人数 七百四十五人
助船 百四十四艘
右者町奉行より御老中へ書上之寫
大江廣覽
橋はしら朽にし日こそかなしけれ
世は常なきをわたるものから
北越蒲原産二平復藏の歌なり
文化四年八月十九日富岡八幡宮祭禮怪異
兼日社壇鳴動
一鐘樓堂人なきに連夜おのづから鳴
一朝まだき舟にて永代橋下へ御渡り越大川端町より
御上り八幡伊勢春日と次第にわたし奉る恒例こと

ごとく手筈たがひて三社まち／＼渡御又は行ちが
ひまたははなれ／＼剩八幡の寶形の上のかざり鳥
を御社にとりはずし置後にさし奉る猿田彦の役人
御舟より神輿へ上らせ給ふ時人すくなく常より重
かりければ手傳などするとて鳥兜も面もかたへに
ぬぎ置て素面にて銚をつぎ供奉御さきをほらふ人
の見とがむるによりて鼠のにぐるよふに立かくれ
て其後は供奉せざりしとか神輿還御の後程なく永
代橋落て人多く死す
思ひきや秋の最中の魚ならぬ

人をも水にはなつへしとは

扱此橋杭壹丈三尺地中に入て十餘日を経ていろい
る術をめぐらせども一本もぬけずすべて六本なり
金輪際よりはへ出たるがごとし

後聞九月廿七日風雨の日二本ぬけ同十九日に残
り四本ぬけたりと云

右四條 靈岸島町の住吾友軒の記

深川富岡八幡宮拜殿に張出せし書付之寫

文化四卯年八月十九日 西川權寫

來十五日當社祭禮也輕重服并觸穢輩不入來入

右表石の鳥居のわき傍示杭に書し所なり
祭禮役割

- 柳 清水屋 宇兵衛
- 大鼓 家主 小右衛門
- 大拍子 藤兵衛
- 青箱長持 家主 李右衛門
- 御本社 社役 庄兵衛
- 御手銚 家主 外四人 久兵衛
- 御本社 家主 佐七
- 御本社 社役 久兵衛
- 御本社 近江屋 佐兵衛
- 御本社 家主 外五人
- 御本社 家主 又八
- 御本社 家主 清吉
- 御本社 家主 平次郎
- 御本社 家主 久五郎
- 御本社 三河屋 久兵衛
- 御本社 家主 忠助

太神宮

社役

喜兵衛

御太刀持

家主

彦兵衛

御輿臺

家主

藤右衛門

賽錢箱

八百屋

次郎兵衛

御手銚

豆腐屋

長右衛門

春日宮

仲町家主

善八

御太刀持

家主

源次郎

御輿臺

家主

嘉右衛門

賽錢箱

平野屋

利兵衛

御假屋詰

藤屋

藤五郎

御膳掛

善助

清八

八文字屋

庄左衛門

賽錢箱

社役

久兵衛

賽錢箱

三右衛門

右之通相定候

月 日

一當朝神輿の臺損じ瓶子破れしと云(新材木町住花
屋の話)

一橋は深川の方に近き七間の間ニッ落て斷たる口は
四間ばかり也といふ刻限は四ツ半時頃なるべし

一兩國橋の東に麥飯をかしぎてうりわたれるものあ
たり近き賣卜師を伴ひて靈岸島の祭みんと兩國橋
をわたり落て死せり其身は橋の東にありてことさら

に橋の西にわたりて又東にゆくとして死せし事いか
なる因縁にや有けんかの賣卜師のうらかたもたの
むべからず兩國橋の麥飯邯鄲の粟の飯ともかく

にも夢のうきはし

一牛込御細工町に八十八といふものあり祭見にゆき

て橋のくづれ落たるにあやふくたすかりて家にかへりよろこびしとぞ同月廿六日北御徒町なる星野氏にて古井を埋しが其僕井の中に物を落せしときにて朝五ツ時頃八十八階子に繩を付させ井の中にいりてこれをとらんとするに古き井を塵埃を以て埋めたる氣に感じて井に落ちて死せり人々あはてやう／＼盡つかたにそのからを上たりしかど息絶てかひなしこれより二三日も前の事にやあらん井の中に入ると夢見し事ありなど人にもかたりしかやとにもかくにも水に死すべき命にてもあらんかし

一市ヶ谷左内坂に陶器のやぶれたるを焼繼してかすかに世を渡るものありこれも橋より落んとしてかたへにいとけなき女のわらはの落るをあはれみたすけかへりて其家をとへば芝の鐵物屋なりといふにいざないゆけば其家にては死せる者のよみがへりし心地して悦びあへりかゝる徳にむくひなんには何にても望みのまゝにすべしといふにさせるのぞみもなしといへばしからば二三日経てむかへ申すべし親族をもつどへて祝ひものせんといふ其日

になりて親族よりつとひてこれが禮をのべけふよりにしてはかの娘の伯父のつらに敷へいれて長くよしみをむすび申べしとて酒食を饗しけるとぞ親族はみな富貴にして白木屋などいへる家もありとか女のわらはの齡十四となん

一本郷にすめる麴屋(市人姓名未詳)祭見んとて兩國の橋のこなた米澤町より村松町をゆくに懐にせし紙入の袋を盗人にとられたり袋の中にはこがね二兩二分ばかりもありしかばほむなく祭も見ず家にかへりてふしぬ夕かた人のいふを聞けば永代の橋落て人々あまた死しぬといふにわれはわづかのこかねにて命をひろひたりと心のどけくありしにあくる日つとめておふやけより本郷にすめる何や何おさむべきよしのむねをつたふあやしみて市令の應におもむきてしか／＼の事うつたへしかばその紙入の袋はこれなるべしとてかへし給はれりうれしく袋の中を見ればこがねの數も全くありこれ盗人のとりゆきて懐にしたりる儘にて橋より落しか袋の中に何や何がしといふ名のあるにまかせてお

ほやけよりはめしたる也釋氏のいはゆる現報應といふものなれどあまりにすみやかにむくひし事末の代のよきいましめなるべし

一龜澤町八百屋の娘の死骸をうけとり家にかへりて一夜家内泣かなしみけるが夜明てよく見れば衣類は同じものなれど縋絆も違ひ顔色もかはりたるやうに見ゆれば人たがひなるべしと又々永代橋のもとに行て眞の死骸と取かへて二度かなしみを増けるとなん(窪俊満の話)

右七條 杏花園主人記

一芝口壹丁目の川岸に小西彌兵衛といふ酒家あり頗る福有なる者なり父はとし老かしらおろして何禪門とかや其孫を清次郎と云此清次郎といふ名家の通り名にて重きかたにもし來りければ此孫とし十二三歳なりければ寵愛他にまさりける故我家家譜をつがせ別家のあるじとはなしけりことしの深川祭さき／＼に起過したりといふ沙汰聞て自らはさのみも思はざりけれどかの孫に見せたま計りにて面屋隠居かひつらねてさうぞき出けり此あたり大かた舟がしの家にてゆかはいとたよりよかる

べきを小西一家の掟にていかなる便宜の事にも舟にのるまじき由小もの下男までも誓狀をとらぬばかりにいひわたしていたく舟を恐るゝ家法なりければ今日も老人は駕にて行けるに永代橋を既にわたりはてんとするほどに國ゆすりて出たちたる見物のたゞ一所に集りあいて踏とゝろかす人あしにさばかりの橋杭もたぢろきてけた十間ばかりくづれ落て數百人おぼれ死す此時にかの小西が主従七八人もひとしく落入けるが老人は駕のあとかつぎたる甚藏といふ男に引上られてからき命をいきたれど寵愛の孫を眼の前に失ひて物も覺へずやみふせり居りたゞ諸共にそにて死べかりしを中々に口おしとて樂だに見いれず猶いたましうあやぶげに見ゆるとぞ抑老人の兄にてありし者の清次郎といふ男は明和六年の春佃島の沙千狩の歸るさ船くつがへりて人多く死ける時に乗合せて死ける故拵難舟に乗る事をば此一家には忌嫌ひける清次郎といふも其後中絶したりけるを此たびその名繼せたる主の又川にてうせぬる事はいかなる因縁にや有けん拵甚藏にはこがねあまたとらせければ思は

ぬ徳つきてよろこびけるそれにあはせてさき肩がきたる男はわづかの貨錢にて命を失ひ物だに得ずなりぬるも皆前生の定りたるほうの有けるなるべし

一京橋水谷町に材木商ふ家有此家のあるじ(藤兵衛といふ)を頼より隠し妻をもちて銀座二丁目手拭小裁やうの物を店のはしにかけてそれを商ふやうに思はせてまことはかの女を隠し置けり宿の妻うすく聞しりて目しろを置てことこのやうをさぐるさるほどに此女をいて祭見に行といふ事をききつけて以ての外に腹立ければそれとはいはであはたしう髪かきあげぬきかへなどしていざ祭見に參らんともなひ給へかもしもきたなげなる物をいておはするがうるさくおぼさばひとり留守し給へといひかけて小もの一人具して出行ぬしめてといめば口論になりてはてまからぬ事をもいひあらはすべきつらつきなりければ夫もまけて遣しつ扱女のもとへもゆかれずせんかたなく家に有ほどに永代の橋落て人多く溺れぬときくにさすがに胸おどりて先人をはしらせて見するに小者は助りて

妻は死ぬ亡體を見るに憎かりし事も忘れて哀に覺へける左様に思ひける計にや其夕よりの女のもとに妻の姿あらはれてうらめしげに打まもりおるほど家のうちにもさいめきあたりの人もやういひさわぐほど其七日に當る日の夕つ方京橋の方より蜂いく千ともなく群がり來てかの手拭見世の軒に集りけるを店の者驚き手まどひをして拂ひ出しければ南の方をさしてみな飛行けり是もまた亡妻の靈なりと誰いふともなくおそれあへり

一京橋山下町に龜屋久兵衛とて餅を商ふ者あり此あるじ夫婦が中に子といふ者なかりければ睦敷いひかたらふ人の子を養子にすべき約束をして其子四ツ五ツ計にていとやはらはしく覺へければまたこなたへはもらひとらねどいてゆきて祭見せんと思ひてわざく道のついでにもあらぬ所まで迎に於て脊に負肩車に乗せてなんと道すがら愛しつゝ連行けるがこれも橋落るほどに渡りければ二人共に溺れ死けりされど其子をばかたかきいだきはなたざりければまことの親これを見て悲しき中にも養ひ親のこころさしをよろこびいと泣けると

一京橋銀座壹丁目に三種屋といふ人形みせあり去年の春までは鍛冶町にありて龜甲細工を業としたりしが隠居してかしらをおろし名を觀月とかへて歌を役とよみてすきありきけりこれも爰に落て死けるをあくる廿日の日見出したりしにきよく目をとちうるはしく掌を合せてつゆぐるしみたるさま見へずさばかり多き死骸の中にさるさましたるはまたいくらもあらざりけりさすがに日頃の心がけにてかゝる變に逢ても終りみだれざりし事と此人しりたる限りは譽あひけりとなん

右四條 數寄屋町の住狂歌堂の記

一箱屋町伊勢屋三七といへる大工の弟子に糸八といふ者同町なるやすり師の中屋甚右衛門が弟子市次郎轉正町墨屋吉兵衛が弟子彌三八同家の丁稚金吉と四人連にて祭見に出けるが永代橋落て四人共に川に落入ぬ此うち彌三八は二度まで沈みては浮たりたりけるが三たび目に橋杭の本へ浮上り出けるを上よりとびぐちを出してこれをとらへよといふ此とびぐちにとりつきければ人よりて引あげた

りとぞ扱家にかへりてわれはからくしてたすかりぬつれの者の事はいかに成けんかいらすといひてふたゝび着ものを着かへてかしくへゆきぬ大工三七聞て驚き兩國橋を渡りてかしくへ行ければ人つどへてたやすく行つく事あたはず兎角して行つきけるに死骸ども水のうちにあるさまなればはだかに成て川に入てさくり見るに此三七が弟子糸八は左の手の甲にろ文字をゑりいれずみしておりければそれをしるしに引あげけるにやすり師の弟子市次郎は糸八がすそにとりつきて二人ともに死してあり金吉は見へざりけるがこれふしぎに船にてたすけられ深川の方へあがりて一日深川のうちを迷ひありきて夜に入りて歸りけるとぞ糸八がすめる町は火消の人夫を出す組といふ組にて有ければ扱かろろ文字をば手にえりて置けるとなり大工三七は盡語樓匠と名のりて狂歌をすきてよむ男なりこれが來りて物語りせるをそのまゝに書付置ぬ

一京橋松川町伊勢屋次兵衛が親某といふもの孫と下女とをつれて出てけるがみな川に落入ぬ然るに此翁三河の國の産にて若き頃かづきする事などよく

ならひてありければ此時孫と下女とを左右の手につかみてたちおよぎして岸に付てやどりにかへりけるとぞ

一本石町三丁目十軒店家主丸郎兵衛といふ者子をひきつれて町内の書役某と丁稚をつれてゆきけるが書役と丁稚とは水に溺れて死ぬ丸郎兵衛は橋杭のかすがへにとりつき居けるを橋の上より綱をおろしとりつかせひき上げける此丸郎兵衛常に不動尊を信じければ此時さがれるものは不動尊のはらの蠅にてやあらんとあたりの人はいひけるとぞ

一赤坂一ツ木鞘師某がうらに仙哥といふ盲人あり其妻鞘師にいざなはれて出行けるに鞘師親子は水に入て死す仙哥が妻は助け船にのせられて危き命ひろひて家へかへり来りしかへおそろしきめをみつとて聲ふるはしつゝ語り居けるに鞘師の妻たちはしり来て我夫はいかに我子はなどいひて聲をたて泣騒ぎければ仙哥が妻俄についとたちて手をひろげてたすけ給へくと呼びけるさるうきめを見てより狂氣しけるとなり仙哥は盲人なれば狂女を扱ふ事叶はずやがて親の元へ遣はし療治させけ

るとぞ

一桶町に足袋を賣る某といふ者隣家の足袋賣家の娘を常にかはゆがりければ祭見にいざなひゆかんとす此隣の家ある侍の妾を預り置けるが是もともにゆかんとて下女をつれてともなひゆきける扱皆水に落ちて死しぬ下女は葛西の者にておさなき時は前の小川に出て水などあびければ少しは水かくすべなどしりたればあなたおよぎけるほど深川よりかへり来る船にとりつき飛びのりける折から糞船を漕通る者あり此者共同じ村の者なりければやがて糞船にのせてゐてゆきけるとか

一四ツ谷某横町に鼈甲屋傳次郎といふ者いづれの祭にも出て屋たいに乗りて笛吹などとりてうちはやす事をなせり此者靈岸島より出るやたいに乗りてありけるがやたいはいまだ永代橋をこなたにありける時かの橋落て人あまた落入ぬと聞てやがてやたいをとびおりはだかに成て水に入およぎめぐりて男女七人までたすけけるその中女一人たすけて橋杭にとりつかせ置けるに此女聲をあげていかに我妹をたすけ給へといふさればいづれが妹なるを

しらす先近きわたりにかびおる女をとらへてそれをもとに引行ければこれが妹にて有ける此女は淺草の者なりとぞ

一これは名を忘れたり湊橋の近所にすめる者もあるじの母家に召仕ひけるわらはの男に成たるをつれて出けるがかの川に落ちていぬ此男常にあたりなる川にひたりておよぐ事に練んじたりければ此時かのうばをさしあげながら岸につきて宿りへともなひ歸りぬうば我命は汝がたまものよといふ家の者どもこそりて此男をほめければこの男いひけるはおさなき時より川に入ておよぎておればよからぬ事すとてたひくと刀自のせつかんをくわへてうちしかり給ひき今より後我川にかびてあそびなんにはそのたびごとにとじの岸にたち給ひて聲を上てほめて給へとぞいひける此男のさまいかにもしたり顔なりけん

一八月廿日西郊なる武井某川狩に出けるに子供二人連たる男舟に乗りて来りけるが綱うつかたはらに舟をよせてしばし物語りして云けるはおのれは芝にすめる者にて候ひききのふ此子供を連て永代橋

にかゝりてなかば近く渡りて候に思はず足に物のかゝりて候得ばとりあげて見て候へば財布にて候ひきひらき見れば南鍔金ひとついれてありこれはさきにゆきたる人のおとせるならんと此欄干にくくりて置かましと申たればこどもが申候はかゝるたちこみたる人の中にていかでもとのぬしの来りて取候べきこれはひろひて所得にし給へと申て候げにさもしてんとてかの財布に銀をおさめなどしておるほど俄に人さはぎて橋落たりと呼ぶに驚きて子供を兩脇にかゝへて橋を下りてもとの道へかへり候ひぬこの銀をひろはざらましかばほとほと水におち入て死なましをひとへに八幡宮のたすけさせ給へるなりとぞんじて候得ばけふことさらによりこび申しにまうで候なりとかたりけるこれは武井氏の母なる人おのれにかたられき

右八條 四ツ谷内藤新宿の住六樹園の記
一私に芝七曲りといへる所によし澤や善助といへるは狂名島の畦成といふものゝ父にして齡七旬餘りなるが七歳計りの孫を負ひて橋の半を打過るころ孫しきりになきわめきてうしろへそりかへり老翁

すこしもすゝむる事を得ず善助これかれとなぐさめたれどもついにやまずしてせんかたなく家路に趣かんとすれば橋は落たりといへり善助日頃法華を信せしかば日蓮の利益なるべし

一芝片門前壹丁目唐紙師石田喜八なる者七歳の男子兩親相伴ひて行きけるに橋の上込合てはからず一子を見失ひたり夫婦もろともにはがし求めども尋えず辛うじて橋をわたりて今やくるやとかしらをめぐらして待合けるうち橋落ぬとてどよみ渡りければ手をむなしくしてなくく家に歸りぬ翌廿一日なきがらを求めて葬りしとなん

一芝金杉一向宗安樂寺の新發意溺死となん

右三條 芝の住山陽堂の記

一十軒店邊にても二人ばかり怪我有と云
一堺町葺屋町新吉原ばかりは二人も死亡せしものな
一芝金杉一向宗安樂寺の新發意溺死となん
一芝の住山陽堂の記
一十軒店邊にても二人の子を奉公に出し置しがけふの祭見せんとて父母共にやうく主人に一日の暇を乞ひてまつりをみせしに橋より落ちて死せしかば父母の歎き大かたならずと云(金吹町にて聞し)

しと聞

右三條 鶯谷記

一 小川町猪飼何某兄弟いひあはせてしもべ壹人つれて祭見んとて永代橋を通りけるにすさまじき音して橋くづれて落んとす猪飼の兄弟はあはてゝとく前の方へ飛ける此時橋くづれて落ちてしもべは水に入ぬ兄弟はからき命をひろひて宿にかへりてしもべが宿の男を呼てかくくの事ありてかれが命失ひぬ不便の事也といへば宿の男もおどろき且歎てかへりける其夜亥の刻過る頃門をたたく者ありあけて内に入れ見ればかの下部なり身はぬれびたりたるまゝにて聲ふるはしてからきめをみたれど人にたすけられて歸り來りつといふ扱ふところに物の見ゆれば何ぞとへば是は落入ける時人の死骸のうへにありたればひろひてもちて歸りつといふを見れば紙入といふもの二つ錢四百文有けるとなりさるあやうきめを見ながら物とりてかへりけるこそふくづけき男なれとわらふものゝ有けるとぞ

右一條 楊柳亭の記

なし

一傳通院前表町大門より西の方檜屋平吉召仕丁稚十五歳橋より落て漸々と橋杭へいだきつきあがらんとせしを溺れし人々足へつかまり彼是せしをやうやうにふりはなしけるに腰に單羽織をつけて居候にこれをもつかまへければ早く羽織を捨て辛うじて上へはひ上りたすかり宿へ歸る

一 下富坂町佐野屋半兵衛手間取一人溺死(わたうちなり)一説には此半兵衛方へ其日上州より旅人來り荷をば半兵衛方へ置て直に道中のまゝ祭見物に行橋にて溺死

一 下富坂町建具屋亭主は助り歸り弟子一人死弟子の宿は柳町なり

一 下富坂町糸屋又七春日町の角大のそばまで行しが跡へ残せし里子(六歳)ありけるが又七出際に此子跡を追けるゆへ角大のそばより取てかへし里子をいだき連行二人共に溺死しけるは遅速のたがひいたまし一説に又七出際に南鐐二枚錢四百文ありしを南鐐二枚を宿に残し二朱と四百文を財布にいれ首にかけ死此又七いつも財布に錢南鐐を入てあるくよし(九月八日白木屋十兵衛白木屋賣子也)のは

一傳通院前邊を廻る松右衛門しげ藏とて手下に淺草の小屋にしげ八と云非人水へ落たり此者水練達者なりけるにしげ八があたまへ十二三許の童つかまりたすけて下されとわめく故しげ八かの童へよくつかまりてよといふ所へ又七ツ許の子かの童にとりつきたり彼しげ八童をあたまへとりつかせおさな子は童に取つかせしに兎角大勢しげ八が足へとりつきければ己もあやうしと漸々はらひのけつつかくは叶はじと水上へおよぎけるにかの七ツ許りのおさな子水へ落たりやうくとしてつらまへこわきにかひこみて片手にて水をかき岸へつきかの子ども二人をなげ上て助たるはあやふしかくて其晩かの非人小屋へ歸りいねしに大熱なり醫師に見せければこれとてまたすからじ水にて心をもみきりければいかんとも薬も及ばじ哀なるかな其夜死せし彼子供親共尋行しに死せしよしを聞てほいなく思ひかの非人の施主になりてあつく供養せしとぞ

一芝邊のものなりしが夫婦に子供下女一人水に落た

りしに此下女夫婦子供をつゝがなくすくひたすけ
けり此下女房州にて海邊のかせぎあまをなんせし
故かく有しとなん

一鎌倉町岸にかつば庄助とて俠者あり此者水練よく
せしゆへあだ名をかつば庄助とよぶ大勢水へ落し
時折節通りかゝりければ其まゝ衣類をぬぎすて水
をくゞり手にあたるをとらへてたすけんせしに
水の中あまたわめきさけぶ盤手に足にすがりてさ
すがの庄助もひるみければ都合九度水を出入して
九人すくひたすけたりと聞へし

一大勢おしかゝり將棊倒しよりも安く大勢水へ落け
る時ある侍刀をぬいて高く上へひらめかしければ
是を見て跡の者押かけす引ける故餘程水を遁れし
ものを數ふべからず

一是はある歴々の御女中奥方とも覺しき用人は手前
の子供召連しが残らず水へ落たり彼用人すこし水
の心得有故まつ先に女らうをすくひ奥方をも御た
すけ申せしがその内我子はしれずして死せし也
一説に此奥方織田家の怪我除の守りをもたせられ
候よしにてつゝがなしと云ふ

はゆるされて下され候へと主人へ願ひけれども主
人にしかられ無據供に出て溺死せしとぞ

以上は鐵炮町名主某直談なり

一祭前川手前町の町々相談して永代橋は橋造りも甚
ざつとして祭の折から大勢群集其上車等わたるに
危からんしからば橋板の上へ通して竹の箆をわた
さばたとへ橋やぶれたりとも人に怪我有べからず
とて入用つもらせければ金四十兩失墜のよししか
らば川手前町々金二十兩川向深川にて金二十兩と
此よし深川へ相談に及けるに金二十兩の費金出來
兼て破談となりしははいなき事ならずや

一水道町濱松屋隣三河屋(本店牛込揚場三河屋なり)
の若ひ者利兵衛といふ者と本郷小野寺といふ紙屋
の賣子と二人連にて水へ落たり小野寺のは溺死せ
しが三河屋の若いものはいかゞしてか助り歸る
(水道町肴屋又左衛門の談)

これを小野寺の番頭と評せしが番頭にはあら
ず

一傳通院前辰巳や翁靈岸島まつりに神子にて出しが
橋をわたり仕廻ふと橋くづれたりいと危しく

一何れの田舎人か金子三百兩もちて溺死是は其朝問
屋にて仕切金を受取てもちけるよし

一人形町茶漬茶屋の向ふにやたい見世にて油のてん
ぶらを商ふ者あり毎日六七貫ぐらゐ又は人のさか
りける時は十四五貫文も取るしかるに此伴廿歳を
かしらとして二十三なると都合男の子ども三人
溺死せし親のこゝろはいか許かなしかりけん(九
月十八日白木や十兵衛の談此てんぶらやは金剛寺
坂孫兵衛伴住吉町伊勢屋半兵衛と云ものゝ向にみ
世を出しけるよし)

一後日房州の浦邊へ上りし溺死の屍二十ほどいづれ
も女にて男は一人ならではなしといふ
一佃島にても屍八十人ほどあがりし内男は二十ほど
のよし

一神田蠟燭町名主平田千五郎室町名主加藤三郎兵衛
品川町名主竹口庄左衛門雉子町名主齋藤助左衛門
(供は番太郎)田町一丁目名主川津十兵衛新草屋町
名主木村定次郎以上六人名主は不殘落すして供の
者わづか晝間ばかりはなれて供六人ながら不殘溺
死品川町名主竹口庄左衛門供之者は前夜明日の供

一八丁堀五丁目にも一人水へ落たりしが水功者故
たすかり歸りしと後日名を聞へし(八丁堀川島庄
兵衛途中の談)

一箕輪關龜之助様御隣家敷の中間一人水へ落たりし
が漸々と橋杭へつかまり居たりしが其下に同じ家
中の妻一人水へ落居たるが中間にたすけくれよと
わめきあしへつかまりけれど中間も命からんゝに
て橋杭はすべりてせんかたなし中間は是を氣の毒
におもへどおまへをたすけるとわたくしも水へ落
ればいたしかたなしと心づよくもつかまりたる足
をふりはなしとやかくせしうちたすけ船來りけれ
ばよふやく中間は舟へとびのりたすかりける其夜
中間屋敷へ歸りいねけると忽大熱發し彼女口ばし
り中間に取つきけるとなんかの中間いかなりけ
んそのゝち不聞(八重川勾當の談)

一武州八王子旅人四人八王子近村稻村の者二人同は
へ村といふ所の者二人所澤の者二人都合溺死十人
の由聞し

一江戸真砂六十帖之内余按るに永代橋懸る元は今
の橋の下にて渡しあり憲廟台命にて橋出來す請負人

其頃定小屋小買物方請合松屋十太郎紀伊國屋吉兵衛なり其節上野中堂御建立最中故右兩人請合金高は知れ不申中堂の殘木をつかひて思ひの外元金入不申橋出來して兩人の利分壹萬二千兩宛取候よし我もその祝ひの振舞に九ツ時行ぬ今は跡かたもなし

請負人 金吹町 紀伊國吉兵衛 龜井町 松屋十太郎
端本計余藏せしゆへ誰人かしれず文中我とさせしはいかなるものか

右二十一條 小石川白壁町の住西川權の記

一余君に供奉して箱崎の邸にあり橋くづれんとする時橋上にむらがりし人東西へわかると見へしスツといふ音してズシリと地ひききするとワットさけびし聲聞としのびず小船に乗て橋下にいたりて見せられたり東岸より橋杭二間残りて間數十二間落いりたり東のかたはなだれにて西の方は橋板一間ほどきれて見ゆといひしとぞ

一八月十九日深川富岡八幡宮のまつり見るもの群集おびたし永代橋落て溺死多しといふ愛宕下亭よりの歸路かしこに廻りて是をのぞみ見るに破壊の

一橋廣さ四間の所長さ十二間ほど落れば凡人數千人餘入水せしなるべし

右二條 深川柳川町の住鈴木氏の記

一荻野董長が曰下谷長者町ます床といへる髮結の妻七歳の男子と三四歳の女子をつれて祭見に出永代橋をわたる七歳の子いふ様此橋今に落べしわたるまじといふ此あまたの人々のわたり給ふに何かあやふきことのあるべきもしはからざるに落入なば親子三人一所にてともかくもならまじとてしわてわたるむらがる人におされて覺へず東岸近くなりいま橋杭はなれざるほどに橋落たりと聞しは嗚呼なるわざかな

一三宅直年が曰紀伊殿の侍醫服部養安といふが其日舟にて橋より下をわたらんとするに水色殊の外あやしこの橋に變災有べしいなわたるまじといふ船子は何事か候べきといふ賃は約のまゝにあたふべしとく漕もどせとてかへりしがほどなく橋おち人死せしといふ

一或侯の藩士某橋上を行に人のおしあふ事よのつねならず橋ことの外のゆらめきすこしくぼみなどする

ところは東岸より四五間の橋杭よりくぼみ落たり橋邊の市塵に入て其様子をとふ老夫あり答て云今朝四ツ時する頃北新堀のねりもの舟につみくる橋をわたり終るにより我が町のねり子供をわたさんと橋に皆のぞまんとする時落入たりゆへに南北新堀新川靈岸島の者別條なしといふ溺死の數をとふに舟にて救ひもとめたる數男女百十七人今町役人より書上たり其餘汐につれ流れて知れざるものいくばくかあらんと語るゆくゆく市中の様子親子兄弟親族朋友互に其安否をとひ彼はいかに是非はにかに杯ひて東西南北に奔走する有さまこゝろならぬ様也(山本正邦の話)

右二條 田安藩中中村氏の記

一翌廿日町の名所を紙のほりに書て地引綱をひく船四十艘計も見ゆ東岸提灯建し所にはや桶あまたならべ有り所の者に聞に武士の十四五歳なるを侍のいだきながら死し居るもあり島ちりめんの衣服を着たる女のむねさけてはらわた出たるもあり中間の橋杭に取つきて若旦那二人まで入水せしと泣居たるも有しと

様におぼゆればもしくは此はし今や絶なんわれは水練あればことゆへなく水にだにおちなばたすかるべしとおもひて衣のすそからげんとするにかいむ事叶はざるほどおしすくめられたり手を前に下してつまぐりくすそひきあげしり高くからげ刀の下緒ときて大小を帯によくくゆひつけ手拭をうしろよりむねにまはしてふところを結かためいままや落ると待ほどに我ならず五六間も行ぬいかなる事にや有けん今はよも落じとおもふ時ふと落たり人より先に落入ぬ水の深さ十間ばかりも落ぬと覺へしいでやおよがんとおもふに泥に足を深くふみ入て游がれす足をぬかんとするにあたりにたよるべきものなしあとりむらがり落入る人雨のごとしわが前に落たる人をおしふせこれを力にぬかんとするにぬけず又落又おちする人の三人かさなれるを力にしてからうじて足をぬき遊き出んとするに左右の足に二人すがりつきて游がれずわきざしをさや共にぬきてなぐりはなしやうく浮あがり屋根船の屋根の流るゝに取つき陸にあがりてそのあたりの人家に入て衣類をほして歸りぬあく

る日人のもとに來てかたりしがその夜より發熱して我ために人五人さへころしぬといふ事のみいひてもものくはずと華陽土子の物語なり

一芝のあたりにすめるおの子橋より落ながら欄干のなだれにとりつきていまだ水に落ざる間に女の子をいだきたるがおちきて袂にすがりたり身ひとつをだにいかにかにいかにもまどふ折からなればころたけくふりはなす女親子つぶりと落入ぬおの子は欄干をつたひて家に歸り夜に入ていねんとするにまぼろしの様に子をいだきたる女の枕上に居てうらめしげなるおもさしなりいとたへがたしといひけるをこれも同じ土子物語なり

一神田下駄新道にすめるさかなや妻子をつれて出けるが妻はとみの事にて途中より歸りぬ某は子をいだき橋より落たれどもでにとりつきぬきに尻かたげていまだ水にいたらず老翁一人水中より手を出して足をとらへてたすけよといふ我身ひとつならばともかくもせまじ此子さへあればそこをばなせよと云へば翁うれひなげきてはなさず足の力をきはめてふりはなす翁水中にしづみぬさて舟にた

すけのせられて家にかへりわれゆへに翁をころせしとのしりてくるひありきしとぞ神田仲町青木氏の話也

一本所石原にすめる孫三郎といふ者母にまつり見せばやとて永代橋の北のたもとの髪結の家をかりて川にのぞめる所に居て見しとぞこのおの子がいふを聞けば橋のくづれしをしらで跡よりおし落されしと人々のいふはあやまりなり先橋くえんとする前に橋の上に人のむらがりしゆへは東岸はねり物にて人をとめければ西岸よりわたる人はみな爰にあつまりぬさればくづれし所より西は人のおしあふことはなかりしなりさてやう／＼とくぼみ入て忽にくづれしにあらざればけつくそのきはに立たるものも立退きてのがれしが多かりし也板のあはひのすきたる所に足をふみ入てひしがれひちを折り袖ちぎれなどして溺死より前に身をやぶり血あへぬる人多かりし女のふさやかなる髪のためさ欄干に残りて身は落入しなどもありしさて大にくぼみ入てむらがり落し事はみな人の見る所の如しといひき橋の落る時白刃をふりて人をよけさせし

といふが見しやととひければ知らずといひき

一雨宮檢校のしたしき友の三人まで水のあはときえしその内一人は笛の友にてきのふしもとひきて譜うたひなどせしをけふはむなしき人と聞て其弔にたんざくに書せて川にながせしうた
橋はよし中たえぬともみつせ川

わたらんのりのみふねやはなき

一何がし候の留守居某妻子僕従をとまなひて祭見に出て永代橋を渡りしが某は十間餘り先にすゝみ妻子はおくれてあゆみし其あひだくづれ落たり互にめぐりあはざる程安き心もなかりしが時過てあひあひてよろこぶ事かぎりなしあくる日酒肴まうけてことぶきし時ゆきあはせしといふ人の物語りなり

右八條 神田の住輪池老漁の記

一番町の人何がしが家の舎人關といふ俠氣ありて客を好めり其客坂田清二郎といふさむらひ八月十九日永代のあたりへ尋る人ありて訪ひけるがけふは深川八幡の祭りなりとて人々の見に行を見て彼も道のついでよければ橋を渡りけるに橋たちろぎて

落入けりたゞ坂などのやうにて折たる所は水にひつる計なれば跡へもどらんとするに大勢のならひにて跡よりはひたものおしければ心ならずも既に踏はづしてかた足は水にひたりけり遊るに手だてなくて帯たる短刀を拔出して橋板にぐすつきたてこれを力におどり上りければそのかたへの人々はかの短刀を見ておそれて道をひらきければかうじて助りて息つぎあへずかたりしともし食客がかりし

一水道町に三河屋といふあきうどの手代利兵衛といふものまつり見にひとりして行けるが是も水に落入て夢の如くたゞ鼻にも口にも水のいりてあまりのくるしさに水に泳ぐわがも知らざりしがひたもの兩手にて水をかきければひとたび水の面にうかび出たり嬉しとおもふうちに兩足に大勢取つかれて又水の中に没したりしにこたびは橋杭のわきするうちに又うき出たりしにこたびは橋杭のわきへ出れば力をきはめて抱つき居たりその間に船來りてたすけられたりと利兵衛が語るを聞し
一飯倉町にすめる翁夫婦有り常は三縁山の裏門前に

出て山の芋など取ひろげてすぎわひとしとほしき暮しなりひとりの娘をば或武家にみやづかへせしめけるに君の寵愛淺からずして時めきければ翁も限りなく悦びけり此頃懐妊にて有けるに彼が父母のいやしければ其事をかくして親の元に預けられよきに養へとてこがねなど賜りけり彼翁娘とも祭見に出けるにふたりとも死しけるをとなりなる人きゝて人を雇ひて屍を負ひ來りけるが老母かなしみなん事をおそれかくし置て彼に告ていふやう橋落て死したる人夥しその家よりも行給へどもいまだ歸り給はねば生死の程もおぼつかなしわれ行て尋んと思へどももしよろしからぬ事ありてそのかへらぬ事なげき給ふ時は我はからひも詮なかるべしといひければいかでさる事有んとてよくうけひきけりよりて屍をかきいれてあたへければ其儘夫が屍に取つきうちたゝきなどしていかにわが娘をころしつるこがねのつるたちたるなど言のゝしりてやまずとなりの男されば始に我言たる事なるをなどかゝるふるまひをばし給ふとてといむれどもえきかず物くるひのよふにのゝし

りてやまずとなん

右三條 小日向の住白水子の記

夢の浮橋巻下

一 靈巖島長崎町二丁目小八店多葉粉屋忠兵衛なる者あり其妻の内心はいざしらず三十ばかりにて日蓮宗の信者にて堀の内へもかならず月毎に詣る様をもみたり此者の妹なるもの人の妻となりて谷中に有けるが此日深川にまかり祭見んその所のたよりよしなど兼ていひものしてありしが此朝氣心うきたち髪かたも十分にとのへありけるに金六町にてしれるもの、妻小童とめのわらはとをぐして是も深川へまかるとていざ給へと催されて心せかるゝまゝ妹の事も打わすれともなひ行暫時にして妹來りて家にあらざればなぞかくつれなきふまひはせさせ給ふとうらみのゝしりてあとをとめゆくほどなく永代橋落たりとてかめのわらははゝしりもどりおのれは人々におしへだてられて刀自にはなれまいらせつるに橋の落さふらへば欄干によりてからうじて命をたすかりまいらせつれども跡より落る人のためにあまた所疵をかうぶりたりさ

て家刀自およびわらはをみす心ならずかへり参りたりとて泣くさらばとて人走らせてすくひの船により三たりのなきからもとめえたり妹はおくれて橋のこなたに有て事なく姉はすゝみて死せりしかながら約にそむき妹をあはれまざるに似たり一 東みなど町金右衛門店市五郎なるあり淨心寺に身延の祖師の開帳のあり候て庭にて茶店をまうけ朝とく行てあり其母晝餉をもて行あともより十一なりける弟の富藏といふもの母のあとをしたひ行にかしこくも行過て橋の落かゝりたる先の方にて橋板に手をかけて落かゝりたる人の羽織の裾に取付て今にも落べきさまなるを其人眼をいらゝげそこはなせと叱するにぞいともおそろしくてそこをばなせばするゝと落て行桁にとまる母はこなたの欄干の外に身をかはして取付て半身水につかりたれども手をはなさず跡より落來る七ツ計りの女のわらははひる餉の包にかゝりて命たすかり親子所をこゝにして恙なし

一 鹽町の與市は二人の子をつれて其身も祭りの警固ねり子に出たりはじめ深川にわたりてねりものゝ

遅滞の事をいかり家にもどりて休足せんとて立歸るとして三人共に死せり祭禮がりにて出て死するものは此三人計也そも、興市は行状よからぬよし常に青物商賣なるがさきに人のぬすみたる黒鐵を買ひ事顯らはれ詮義の時青物屋にて鉄を買のみならず殊に格別下直不届也と糺の時何かはしらす菰に包たれば牛蒡かと存たりと申せしぐらゐの横道もの也然れ共祭禮練子八幡の罪したまふには有べからず一度は事なく橋もわたりたり五逆の罪人も生涯やすかりしもなきにはあらず微運のなす所なるべし

右三條 靈巖島町の住吾友軒の記

一四ッ谷鹽町三丁目佐兵衛店伊助なる者あり二八ばかりの娘一人をつれ十八日の祭の揃見んとて深川へ行けり又翌日本祭見んとてかの娘をつれ行んとす娘いふわれはきのふの草臥にていまだ足いたきゆへ留守いたさん伊助いふしからば我ひとり見て來らん留守せよといそぎ出行けるが橋より落ちて死しぬ翌廿日なきがらをひきとりけるとなり彼娘かねて神佛にたすけられしときこゆしかし行す

して父をうしなひしも又不便の事と人々いひあへり(四ッ谷鹽町の住羽鳥氏の話)

一芝切通しに芋をあきなふ者あり(市人姓名未詳)一人の娘をつれ祭見に出けるが橋より落ちて死しぬ妻一人家に有けるがやがて市令の廳より彼兩人のなきがらをおさむべきよしむねをつたふるを聞て狂氣のごとくなきかなしみけるさて家主申けるはかの妻常々狂氣のごとき者なればなきがらを引取なんにおいては又々自ら命を失ひしやうの事もはかられずとてかの妻を先連れ來りよく申けるさてそのもとの夫并娘とも永代橋より落ちて死しぬかへらぬ死なれば引取候てもとともよみがへるべき様なしよくあきらむべしといへば妻申けるは死せる者いかにともいたしかたもなけれどとく引取てあつく葬らんといふしからばなきがらをひきとり申べしとて家主ども出ゆきてつれ來りかの者の家にゆけばはやかの妻死骸を見て狂氣のごとくになり夫の死骸にいだきつきさては一人の娘をかく不意の横死をさせたる事ゆるされず今生しかへさるべしとのしりながら夫の股にくらひ付ん

とすれば家主共こらへ兼彼妻をしぼりけるとなん跡はいかに成けん其後不聞(麴町の住杉浦氏の話)

右二條 四ッ谷伊賀町の住甘願齋の記

一八月十九日早朝に小童一人永代橋を渡りながら此橋後に落るぞといひつゝ二三べん往來しける故橋番人立出て不吉なる事をいふものなりとて棒もて追はらひたるにいづちへ行けん行方を見うしなひしとぞ

一本郷一丁目伊勢屋嘉兵衛といふ者姑娘子供と四人にて祭見に出永代橋にてのこらす水中に落たりしがいかなる幸によつてか四人ともいさゝか怪我だにもなく立歸りしはめづらしく日頃神佛を信せし人とぞ思はれける

一今川橋山吹といへる水茶屋の亭主常に來れる淨玄といふ齋坊主にかたりけるはきのふ永代橋にて六七歳計なる女子大なる竹笠にすがりて流れ行をたすけ遣したるがいづこの者なるかあやうき事なりしとかたりきさて又小傳馬町足袋屋(名はわすれたり)何がしも齋且那なれば淨玄此たびやへも見廻ける時亭主のかたりけるは此方の娘も水に落た

れど大なる竹笠にすがりて流るゝ折から人有てたすけられたる故からき命を拾ひたり其人はいづこの人なるか謝したくおもへどもあはてたる折からなれば名も所も聞ざりしと語るを聞てそれは今川橋山吹といふ水茶屋の亭主なりとおしへしかばいとよるこびていそぎ山吹にいたりて救命の恩を謝しけると淨玄坊かたりしよし予がしれる人の物がりなり

一芝口小西隠居の駕かきたる前棒の男は水中へ落入て即死あつと棒の者は駕の落る所をとめ隠居をもたすけ歸りし褒美として金子多くもらひしよし即死したるさき棒の妻これを聞て小娘を引つれ小西方へ行ていふやうはあと棒の者へ金子をつかはされたるよし何とぞ我等親子にも下され候へあと棒の者は命に恙なければ此末相かはらず妻をも養ふべし我等は今より誰あつて養ひくれ候ものもなし我夫はわづかなる賃にてけふこなたさまへ雇はれたるゆへ命を失ふたれば是非ともに我等親子をはぐみ給はれと打なげきしと聞しが後はいかに成けん

一四日市千魚屋尾屋清右衛門といふ人橋より落る時南無さん落たりと覺悟をして身をちいめ水中へ落し時水底へ足のつまさきつきたるに一はねはねたればすらりと水上へ出たる節手にあたりし竹に取つきたれば其竹を引上て我をたすけたる人を見れば日頃より口にしれる船頭なりしと清右衛門直の物語りなるよし予が懇意の人の語りき

一 大川端筑前屋新五兵衛方にて早速たすけ船を出して京橋家根屋の娘一人を助け又六歳計になる男子一人をたすく男の子引上る時いかさま此子をおおひ居たるものと見えてぶく／＼としづみたる者あり此男子はいづ方の者成やと所を聞けば櫻田といひける故御屋敷は何といふぞと聞ばしらすおとさまの名は何ととへば九助といひおか／＼さまはときけば佐倉より来りしといふ武鑑を出して見せ此中にて殿様の御紋はいづれぞととへば段々にひらき見て是が殿様の御紋なりといふを見れば丸の内堅もつかうなればさては佐倉侯ならんと推量しかやば町石橋彌兵衛は右の御屋敷へ御出入なればしるゝ事も有べしと急ぎ彌兵衛方へ申遣したれば

手代長兵衛といへる者早速来りてかの男子を見て(苗字はわすれたり)九助様の御子息にて堀田侯の御家中に相違なければ我等へ御引渡被下べしとてこれを引取櫻田の御屋敷え送り届しとなり

一 阿波守様御家來にて輕き役勤むる者夏頃より病氣にて甚大病なりけるによつて此人の親父案事わびて國元より病氣見廻に來り遠國より來りし父に久々に逢て嬉しと思ひしにや程なく全快なしたれば親子共是をよるこび父はもはや阿波へ立歸らんとせしに此節深川の祭見て歸り給へと此若者父にすゝめ十九日に永代橋を渡りし時橋落て即死す是を聞て若者大に驚き我すゝめて父を祭見物に出しかく不意の横死をとげ給ひしこそかなしけれとて狂氣のごとくなげきたるあまりにや俄に病氣再發して此若者も死せしとぞいとあはれなる事なりかし

一 十九日朝神輿へ神酒を備ふる時代僧の鼻より血おびたしく出しとぞ

一 深川永代寺湯島圓満寺は御室の末なるより此秋御室法親王かくれさせ給ひて十九日は御四七日に當

りしにかゝるつゝしみもなく祭禮を行ひし故今日の凶事も出来たりし歎とある人かたりき

一 何町の祭りに出たるねりものにや龍神ばやしにて笠の上に鯉の付たるをかぶりたるまゝ水中へ落ておよぎつゝ岸の方へ行たるよしはりのぬきの鯉水上へはしりゆくやうに見へてかゝる時節ならずばさぞかし一興なるべきにと是を見たる人の語りたるよしつみなくて配所の月さも有べし

一 永代橋兩岸に一間四面の焼香場相建晝夜とも八宗の僧俗打交り讀經念佛或は船にて川施餓鬼等所々より講中ありてこれを營み又は志しある者は強飯或はぼた餅あるは握り飯など夥敷持來り施すものあまたありて兩岸卒塔婆おびたくしく建たり九月廿日頃右卒塔婆不殘取拂候様仰渡されしとなん

右十條 文寶亭の記

一 御觸書之寫

當月十九日深川八幡祭禮之節永代橋損所出来參り掛候もの多人數水中え落入怪我又は相果候者多有之由右ニ付輕き町家の者共引取又は取片付共致難儀存命にて引取候分も療治手當不行届難儀之者も

有之候は、町役人共無油斷相糺會所へ可申出候糺之上御手當可被申候

右之趣御沙汰ニ候間早々可相觸候以上

卯八月

一 可稼當人水死いたし候得は 鳥目拾五貫文

家族之内水死いたし候得は 鳥目三貫文

但貳人以上は壹人ニ付三貫文ツ、相増候積り

可稼當人怪我いたし候得は 鳥目三貫文

家族之内怪我いたし候得は 鳥目壹貫文

但貳人以上は壹人ニ付五百文ツ、相増候積り

八月十九日永代橋損所出来落水死又は怪我いたし候者之内困窮難儀之者共へ町會所より御手當被

下候分左之通り

錢三百六拾四貫五百文

此金五拾四兩貳分銀貳匁三分壹厘九毛

但金壹兩ニ付錢六貫八百八十文かへ

人數五十六人 口數三十六口

内

可稼當人水死 拾八人

同 怪我 五人

家族之内水死 貳拾參人
同 怪我 拾人

右之通御座候
一永代橋損落候節水死いたし引取人え引渡候もの并
引取歸り候後に相果候姓名

松平薩摩守中間 卯三十五才 金八
尾張殿同心 卯四十四才 松原利右衛門
紀伊殿中間 卯二十三才 水野茂兵衛
佐竹右京大夫家來 卯二十三才 要助
同 家來 卯二十三才 早川八五郎
南部左衛門尉家來 卯二十八才 官太
松平政千代家來 卯二十九才 遠藤助左衛門
同 家來 卯三十九才 佐藤見藏
松平阿波守中間 卯五十六才 宇兵衛
本多下總守家來 卯二十九才 吉岡一也

松平永之進家來 中村文左
衛門妻

松平右京亮家來

九鬼式部少輔中間

寄合 長谷川乙之丞家來

小笠原佐渡守家來

松平丹波守家來

同 中間

岡部美濃守家來

太田原山城守家來

市ヶ谷臨月寺所化

芝金杉町安樂寺納所

小松町伊助店 町醫

淺草花川戸町 傳兵衛店文
藏方二居候

下總國郡不知國分村 百姓宮右
衛門娘

卯五十五才 いさ
卯三十一才 山中專藏
卯四十二才 久助
卯二十八才 平四郎
卯五十五才 生田清兵衛
卯五十五才 加藤源藏
卯五十五才 酒井象右衛門
卯二十三才 友右衛門
卯四十五才 三田喜兵衛
卯三十八才 松平源助
卯六十五才 鐵作
卯十九才 隆道
卯十九才 養元
卯四十二才 小吉
卯三十才 とみ
卯二十七才

桶町壹丁目

同町

西久保大養寺門前

桶町一丁目

本所入江町

淺草諏訪町

芝口壹丁目西側

南八丁堀壹丁目

小石川戸崎町

麻布本村町

水谷町二丁目

本銀町壹丁目

新石町壹丁目

赤坂新町三丁目

善兵衛店清 卯九才 久次郎
右衛門侍 卯九才 德太郎
家主熊市 卯三十五才 長次郎
方二居候 卯五十三才 吉五郎
茂兵衛店 卯十六才 榮吉
右衛門召仕 卯十四才 仁三郎
伊助孫 卯三十一才 和助
清兵衛店 卯二十五才 忠藏
源左衛門店 卯三十一才 富五郎
彌兵衛召仕 卯三十二才 平右衛門
新組人宿 卯五十一才 平右衛門
和助寄子 卯五十九才 友八
忠七店 卯三十四才 金藏
忠藏店 卯二十四才 仙十郎
新五郎店 卯三十一才 友吉
清兵衛店八番組 卯三十四才 友吉
人宿大次郎寄子

住吉町裏川岸

通油町

鐵炮洲十軒町

本小田原町二丁目

神田明神下西町

南小田原町二丁目

伊勢町

麻布本村町

同町

山本町

南鍛冶町三丁目

下總龍泉寺町

新材木町

芝新門前町

傳兵衛店 卯五十五才 清助
八右衛門店 卯五十五才 清五郎
茂兵衛召仕 卯二十七才 勝次郎
家主牛兵衛 卯六十才 新右衛門
藤次郎店 卯五十才 半藏
千助店 卯五十才 庄藏
文七方二居候 卯三十二才 喜右衛門
家主清七方二居候 卯三十二才 忠助
家主金五郎方二居候 卯三十二才 三吉
六兵衛店 卯五十五才 久兵衛
同人粹 卯三十六才 政吉
鐵五郎店平藏方 卯七十二才 觀月
二居候同人男 卯二十九才 伊之助
又兵衛店忠次 卯二十九才 武右衛門
久兵衛店 卯六十二才 友吉
忠兵衛娘 卯二十三才 友吉

小傳馬上町 與右衛門店 次郎兵衛娘 卯十五才
 淺草淨念寺門前 與三郎娘 仁兵衛店 卯十八才
 永澤町 金藏娘 卯十才
 本八丁堀二丁目 武右衛門店 卯五十三才
 京橋水谷町 勘兵衛妻 卯二十七才
 同人召仕 卯二十七才
 芝西應寺町代地 平七店平次郎方 卯五十七才
 靈岸嶋鹽町 次郎右衛門店 卯二十六才
 雉子町抱非人 卯四十七才
 南傳馬町三丁目 次右衛門店八兵衛 卯十八才
 住宅二付店支那人 卯十八才
 藤七召仕 卯十五才
 淺草西仲町 傳八店 卯三十六才
 兵部弟子 卯三十八才
 揚屋町 庄兵衛子 卯三十八才
 三七弟子 卯三十八才
 品川町裏河岸 藤兵衛店 卯二十八才
 直吉弟 卯二十八才

上槇町 安兵衛店 卯七之助
 神田久右衛門町一丁目 安兵衛店 卯十六才
 助妻之弟 卯二十四才
 同所松下町壹丁目 家主新八 卯二十六才
 方二居候 卯二十六才
 本石町十軒店 家主久兵衛弟 卯十六才
 西河岸町 平左衛門店 卯十四才
 久兵衛召仕 卯十五才
 麻布田島町 金兵衛店 卯十五才
 守山町 重藏店 卯十五才
 下槇町 平兵衛店 卯十五才
 同人妻 卯十五才
 麻布御簞筒町 家主 卯十五才
 同人店 卯十五才
 南小田原町一丁目 富五郎店 卯十五才
 市兵衛召仕 卯十五才
 靈岸嶋鹽町 長右衛門店 卯十五才
 赤坂裏傳馬町一丁目 千五郎店 卯十五才
 卯九才

麻布谷町 家主 卯十才
 南小田原町壹丁目 家主傳兵 卯三十一才
 衛召仕 卯三十一才
 芝片門前町壹丁目 家主傳藏 卯四十六才
 召仕 卯四十六才
 龜島町 仁兵衛店 卯六十四才
 本材木町四丁目 大助店 卯六十四才
 虎右衛門弟子 卯六十四才
 北島町 勘三郎弟 卯三十三才
 兼二郎弟 卯三十三才
 家主 卯三十三才
 横山町壹丁目 久右衛門店 卯四十五才
 兼藏店 卯四十五才
 皆川町二丁目 林兵衛召仕 卯二十三才
 勘十三丁目 伊兵衛店 卯二十三才
 深川下大島町 太郎兵衛店 卯六十七才
 新乘物町 茂七店 卯二十五才
 彦助伴 卯二十五才
 右彦助召仕 卯二十五才
 上總國天羽郡讚岐町百姓 卯二十八才

岡島町 卯兵衛店源次 卯善次郎
 卯方二居候 卯二十九才
 神田富山町二丁目 喜兵衛店政次 卯二十才
 卯方二居候 卯二十才
 源兵衛店 卯三十七才
 傳左衛門弟 卯三十七才
 同人伴 卯四十四才
 元岩井町 孫八店 卯長兵衛
 善兵衛兄 卯四十二才
 坂本町二丁目 傳左衛門店 卯定五郎
 新五郎召仕 卯十五才
 安兵衛店 卯十五才
 住吉町 卯作次郎
 卯二十才
 卯安五郎
 卯十六才
 卯榮次郎
 卯八才
 卯清吉
 卯三十五才
 卯久藏
 卯二十七才
 卯伊助
 卯五十才
 卯惣助
 卯二十一才
 卯勝五郎
 卯四十七才

新雨替町三丁目 藤左衛門店 卯 米吉 十二才
 備後國郡不知藤江村 幸左衛門 卯 平八 七才
 箱屋町 喜兵衛店 卯 新太郎 十七才
 武州足立郡千住宿三丁目 牛兵衛店 卯 市次郎 十九才
 伊助弟 卯 仙藏 二十五才
 同州荏原郡東大森村 卯 三郎兵衛 四十七才
 卯 四十七才
 弓町 清十郎店 卯 市五郎 二十才
 安五郎兄 卯 茂兵衛 四十六才
 小石川下富坂町 善五郎召仕 卯 榮次 十七才
 同店 卯 半平 六十才
 牛兵衛方二居候 卯 又七 四十才
 同人娘 卯 よし 五才
 非人頭善七手下 小傳馬町一丁目 卯 利兵衛 三十一才
 河岸小屋頭七兵衛 卯 三十一才
 引取歸り候後相果候者 右人數高百參拾人

靈岸島鹽町 又右衛門店 卯 いし 六才
 佐七娘 卯 かう 三才
 通三丁目 五人組持店 卯 五郎兵衛 四十才
 卯 四才
 飯倉片町 家主清吉娘 卯 みな 十三才
 卯 十三才
 木挽町五丁目 新兵衛店 卯 辨之助 五十二才
 吉兵衛孫 卯 五十二才
 源吉店 卯 松五郎 十三才
 長次郎伴 卯 十三才
 神田小泉町 家主嘉兵衛方二止宿いだし候 卯 與兵衛 三十六才
 甲州郡留郡郡内領三谷村 卯 又兵衛 二十六才
 堀江町二丁目 卯 庄左衛門店 卯 又兵衛 二十六才
 長兵衛伴 卯 又兵衛 二十六才
 南嶺町 清藏娘 卯 かつ 五才
 藤兵衛店 卯 かつ 五才
 長右衛門店 卯 平次郎 六才
 與市伴 卯 吉六 四才
 靈岸島鹽町 卯 忠兵衛 五十五才
 芝北新門前町 久兵衛店 卯 忠兵衛 五十五才

常磐町

右人數高拾五人 新兵衛店 熊次郎 卯 十二才
 安兵衛伴 卯 十二才
 右之人數は町方檢使を受候分なり十九日夜八時までは檢使なくして番付にて引取候者に渡し候由夜に入て盜賊ども偽名を以て引取衣類等を奪ひ候やうなる風説有之無據檢使にて姓名を改候よし依之人數の風説まち／＼にして一同ならず傳聞の儘に記する處左の如し
 一十九日夕永代橋際にて死骸に札付候番付を見しに百九十四番と有之
 一 存命 三百四十人
 一 溺死 四百四十人
 一 助ヶ船 百四十四艘
 一 助人數 七百四十五人
 一 右町奉行より御老中へ御届の寫と有之未詳
 一 永代橋水死人七百三十二人
 一 内
 一 武士 八十六人 町人 四百二十四人
 一 女 百五人 子供男女 七十六人

半死半生之者 二百人
 死骸引取人無之者 十一人
 腰物取殘し 二百三十六腰
 一 九百四十七人 外凡百三十人程死骸無之分
 一 八月廿日晝時町奉行の御届書を見しといふ書付には
 一 三百九十一人
 一 八月十九日より六日目の御届五百二人
 一 一説に即死二百十九人
 一 八月廿日朝檢使請候分
 一 百三十人
 一 八月十九日引取候分
 一 八十九人
 一 此外佃嶋にて引上しも少からず二三日過て羽田沖
 一 又は角田川油堀邊よりも死骸浮上りし由
 一 深川分初番 靈岸島 靈巖寺門前町
 一 龍宮貝鯛の出し 海邊大工町
 一 神功皇后の出し 清住町
 一 船に大工道具の引物
 一 鹿嶋かなめ石の出し
 一 鳥万度の引物 佐賀町
 一 佐々木四郎の出し

頼朝公の引物 千羽鶴の引物

佐賀町附祭り

壹組

一日除踊臺

草摺引

一戸隠人形の出し

相川町

一花に雞の引物

一岩ニ大鯛蛭子の出し

熊井町

一蓬萊山の出し

富よし町

三方盃の引物

一武藏野に牡丹櫻の出し

諸町

一立櫻に御車の出し

大嶋町

臺に大鯛の引物櫻の揃雛の姿

一はやし方五人

一天津繪辨慶の出し

中嶋町

一福祿壽の頭を剃る引物

一虎に和唐内出し

北川町

一武内宿禰の出し

黒船町

一神功皇后花籠の引物

一龍神の出し

蛤町

船かつば鮪の引物

一けやきの出し

木場町

大神樂

平野町

一馬乘人形の出し

万歳町一丁目

大牛の引物 草苺子供の勢

同二丁目

一武内宿禰の出し

富久町

一松竹梅造物

元木場

一松に上り兜小出し

北新堀町

一菊に岩組小出し

箱崎町一丁目

一神功皇后小出し

同二丁目

一龍神造物

大川端町

一岩に鶏出し

銀町一丁目

一梅に神鏡小出し

同二丁目

一東帯人形造物

四日市町

一鳥居に頼朝の出し

鳥籠鶴造物

一仁田四郎出し

鹽町

一岩組猪造物

一梶原源太出し

濱町

一梅兜造物

一七の岩戸隠し人形出し

南新堀一丁目

一兜鏡鶏造物

一幣に鈴小出し

同二丁目

一八に頼義出し

長崎町一丁目

一鶴ヶ岡の景小出し

同二丁目

一鏡兜小出し

靈岸島町

一熊坂長範出し

東湊町二丁目

一松二月造物

東湊町一丁目

一舟に鯨出し

川口町

一松梅に千兩箱出し

靈岸嶋より惣町より出候附祭

一寶造物

壹組

一紅葉狩

紅葉狩

踊子二人

はやし方十三人

靈岸嶋鹽町

文右衛門店

俗醫

佐七妻

まき申口

まき申上候兩人の娘致水死候ニ付御檢使之上子細御尋御座候昨十九日晝四ツ時過六歳に相成候いと申娘召連三歳に相成候かうと申娘をいたき深川八幡宮祭禮見物に罷越可申と永代橋を渡り候節大勢群集致し右橋崩れ候ニ付混雜の砌り後ろより被押倒抱き候娘を投出し兩人共見失ひ候ニ付周章宿へ立歸り右之趣申聞夫并相店之者共一同右川中搜候得は兩人共見出し候ニ付連歸り佐七儀鍼治等致し候得とも不相届相果申候前書申上候通り全怪我にて相果候上は外に可申上義無御座候間此上御慈悲に死骸片付遣し度奉願候以上

水死人

いし 卯六才 かう 卯三才

加藤太左衛門
三井半左衛門

靈岸嶋鹽町

長右衛門店
八百屋與市妻

すて申口

私伴平次郎吉六と申幼年者水死いたし候ニ付御檢使之上始末御尋御座候昨十九日深川八幡宮祭禮有之右氏子ニ付町内よりも口并猿之造物等差出兩人之子供右繩曳に差出候間夫與市儀は付添ニ參り私義は宿に罷在候處同日晝九時前永代橋崩落候段承及候ニ付相店之者杯相頼安否承りに遣し候節町内より助舟差出し候ニ付早速私兄にて店請人神田九軒町代家主佐左衛門方えも爲相知申候然る處同日晝九時過佐左衛門儀平次郎を抱き參り永代橋崩れ三人共水中へ落候と申捨置引返し罷出又々吉六を抱き參り候節は最早相果療治可届牀には無御座候併佐左衛門抱き參り候御は少々温り有之候由ニ付種々致介抱灸治手當等いたし候得共醫師は懸不申候此上兩人死骸片付遣し度奉願候以上

文化四丁卯年八月廿日

水死人

與市
卯三十七才

平次郎
卯六才

吉六
卯四才

檢使
渡邊小右衛門
山崎大一郎

文化丁卯秋八月十九日永代橋下溺死精靈慈濟塔

關口氏先祖代々親族諸精靈等

文化丁卯秋八月十九日此日也深川八幡宮神事儀容服飾美麗可觀云都人士女舉群趣之永代橋上陔隘閘溢屏摩領接人各爭先歛尔橋壞中斷十間餘禍出不意無地以可避後者愈進前者欲退不得一群墜隨大河漂流浮沈溺死不少此日何日乎災害何暴耶縑素日臨修佛事行法施慈濟惟勤或人請予目之所視生靈非命何以堪之惻怛之情實不得止應建塔以福幽魂予諾之可謂下善種子寶地蟠根永年于茲焚香持念懇祈永代橋下溺水諸靈魂等出苦海同歸樂邦法界平等皆資法潤

昔文化四丁卯年九月 國豐山現住梵敬謹誌

設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺

南無阿彌陀佛

石塔造立主

日本橋本船町

野田屋平三郎

ゆめのうきはしは杏花園のおきな例の筆まめなるすさみなるべしいでやかけまくもかしこき天の神のみことのりばかりあやしきことはあらじたとへば永代橋はじめてわたされてより百とせにもおほくあまりぬらんを水のいきほひにおしくづされたることはありとも人のいきほひにおしくづされたることはいまだあらじかの山崎のはしのむかしも水ゆへにこそあれそのほかありとある橋のかゝるうきめ見しことやあるもしいまのよにも郡康節ゐたらましかば文化二年八月十九日此はしおちい

るべしとしるしをかまし心をひそめてこれをおもへば橋はしらたてぬる折に土の俵みそぢばかりつみて三日ばかりゆりうごかせば入べきほどいりてとやまるをうへをきりほぞつくりてけたなどわたすことはみな人のしるところなりしかるにこの度柱六本がうへに大千餘人のぼりてをしあひたればかの土俵のおもさの十倍にもこえぬべしさればこそ柱根一丈あまりおちいりて橋げたくづれしなり橋の神ますものならば人をうらめしとやおぼすらんされば水におちし人おほかるなかにあるは水をのれとたすかりあるは人にたすけられあるは水をいでてもいのちいけぬもありかくさまにうきめ見しはあはれなることながら是みなかの天のかみのみことのりなりすでに橋あやうければすのこかかばやといひあへる人もあるをかたへはいなむ人ありてこそかゝるうきことは聞つれよきはかりごとありても用る人なければあだことなりなにごとも人の力らにてさゝゆるることのかなはざるをば此さはぎにもおもひしるべしあなのおそろしやおそろしやくいふはしのばすの池にとしへぬる態なり

追加

一 深川永代寺門前仲町にて尾花屋梅本の二軒は大きな倡家なり此日尾花屋の客千八百人梅本の客千二百人二軒ばかりにても三千人の客なり家内の人數はこの限りにあらず尾花屋にてもその日二階の棧敷落たりしがそのみ怪我人はなかりしとなん橋のおちたるさわぎにまぎれてその沙汰だになかりき

一 龜島町の裏店にすめる祐益といへる老醫あり祭見にゆきしが日くれて袖もしとに水にひたり泥にそみてかへるとその妻目にみへしがしばらくして見うしなひぬあやしとおもふうちにあたりの人來りて夫は橋より落て死せしがなきからを得たりと告しとぞさきにかへり來しと見しはなき玉の一念わがやにかへりしなるべし

右二條 蜀山人の記

一 近きあたりの事也夜毎に天獄羅といふもの賣る何がしの妻はきわめておこなるものにてことし深川の祭りのころのつらにこへ侍りぬる世のひいきになせらばこらはしき本上^{性敵}にひときは心もうきた

なくみるにたへてなしまたあかしそへなどしてうちかへしみるにさらに見へずとかくするほどにあかつきの鐘もなりてせんすべなくすむかたにはかへりぬかのそいのかしつれゆかれぬるおやに子に妻なる物はかれがやどりをとりまきでおびたしきかたきのごとくなくいひのしるかのおや子たひひらにふしてともになくより外にすべきよふをしらすしかるにかの男子あるかぎり引つれ心よげにさへづりてかへりぬはじめのほどはなきたまの來りぬるにやと見る人まづなけれけるがしかあらざればたゞそのいふをきくに永代おちぬときくものからけふのまつりはむとくなりそもくあやふきいのちをひろひつる此よろこびせんとかの吉原の俄てふものまだみぬ人もあるまゝにかしこへゆきて酒のみものくひてよなかあかつきまでうち興じ樂みつとひいらきぬてかゝるまたきたるぬきのやうにてりかゝやくもうとましようあさましくとかこみあける人々あきれたる計りかれがいふかぎりをしづまりきつとなんこのさがなものこのはていかになりけんかしらす

ちてけふをはれとうちぞうぞきそこのおさなきもの三四人おのがあそびがたき例のはやりかなる女子五六人そいのかしいぎなひつゝ出行けり掛橋やぶれおびたしう人のなくなりぬとくに其男なるものあるにもあらず手まどひしていかにせんくとなきけるかの男の父なるものいふをきけば水に入て死なんこそかれが行衛にはいとめやすけれとよさりもわづかなるあらがひに年まかりよりたるものをおさな子のやうにもものげなく扱ひひくのはてにはおぞましき眼みひらきつきとばしぬるなどすべて年比日比かれがていたらく世にうとましきもの也けふもいつのひまにおのればかりかこゝかしこの人までもかりあつめ出侍る事よとかしらふりくいふ男もこれをきくにさわぎたつこゝるも心ならずさはれ人の女この行えいかでかくはと思ふに家主のもとへ行てとかくかたりあひ家主もゆるぎ出つゝ軒をならぶるもの三四人はしり出行きぬかの所に至りてそのよしを申ければ矢來のうちに入て尋ね侍るべきよしおごそかなりうやまひつゝかの多くの死にかばねをのこり

麻布にたれと申ける町ありこゝに陰陽師早川東馬といへるが娘十七になりぬとかいとかはよくすがた心ざまもうるはしくそのさとのわかきものこのをとめに懸想だちいひよらざるはなし東馬なかなか思ひあがりてなみくの連に世中しらせんもいとくちおしうてかれが伯母なるもの、赤阪の何がしの御館にみやづかへしければ去年の秋そのかたへ部子といふよしにて遣はしけりかゝる折からに宿下りに麻布の親のもとに一二夜のいとま給はりて來りぬいかにぞやしきりに祭見にいべきよしをいふさばかりうるはしたちし東馬もさすがに娘の心もどきかたう隣なる人の妻に五十ばかりなるものに心得ある男一人具してかのいそぐ心も思ひやられさきたちて例の髪よくゆひはなやかにそうぞき出行ぬおのれはれいのあまつうらなひの事おこなひはてゝ出侍る也晝過るころかのひいきここに聞へてさはきたつ事いふもさら也さてもおとめがゆくえおぼつかなう先此時の人のことばにはなりぬ小夜ふけて東馬むなしと歸ると聞てあるかぎりいよゝなかなぬはなし親ひとり子ひとりのも

の、かゝるなげきかゝりていかでかくてあるべし
や東馬髪をおろし何がしのひじりのもとに心つよ
うおこなひすまじけり露けき秋もたちて十夜のご
ろかのみ寺にて人のさゝやきものいふをきけばか
のむすめなるもの、行衛也もとの家ちかきわたり
に名をわすれぬ何がしの守殿の御内に重きことつ
かさどりぬる遠藤彌次右衛門といへるひとり子に
舎人といふ廿四五にもなりけるあり此おとこ守の
殿よりものうらなひ侍るべき事ありて早川が家に
いたる其うらなひよしとてつねに舎人來れりいか
なるすげせ有けんかのむすめと心かよひて二とせ
になりける事東馬はさらにしらす此たび宿下りに
は舎人かならずさそふべきあらまはしはかりごとよ
くなり侍りてとなりのをうなかの翁もろともに舎
人がためにはからひつとなん永代ばしはやううち
わたりて洲崎の里にいたりて酒うる家の涼しげな
るいとおくまりたる方にて静なる海づらながめや
りて實や切利天上にあがる喜見城にのほりえした
のしみも是にはおとるまじうかたみに年比戀なづ
かしき事うち語るに秋風のすだれをうごかしつゝ

おどつるゝさへなまめかじうおかしとぞかの具せ
るうばとおきな物がたり也

ためしなき事とて永き代かたりに

きく袖までも浪やかゝらん

清候

右三條 卓率亭の記

此書は杏花園大人の編集し給ひしを借りまゐらせ
ていとなみのひまなくうつしおき侍るになん見る
人回向し給へや念佛申給へや 文寶亭

江戸節根元記

目録

大薩摩	小薩摩	外記節	式部節
土佐節	語齋節	永閑節	肥前節
半太郎節	河東節		
附			
加太夫節	儀太夫節	一中節	三中節
國太夫節	文彌節	園八節	新内節
井上節	豊後節	隆達節	古今節
道念節	桐山節	説經節	長唄

小源太入道して 虎屋永閑 弟子 喜源 古今名人下 世二知ル 竹之助 後小源太夫

長門太夫弟子 肥前掾 弟子 初太夫 子半之丞事 肥前太夫 吉太夫

肥前太夫弟子 江戸半太夫 入道して 梁雲木出坂下 同 半次郎後半太夫 半之丞 世ニスコナル 同 半三郎後東雲 後江東 同 初太夫 同 文次郎

半之丞弟子 江戸河東 弟子 意教後序大治ト改 忠左衛門 同 河丈後河東 同 夕丈 同 蘭州 同 葛島屋庄次郎事

右三人同門にておとらぬ上手にて語りし河東は小田原町に住し天満屋と云魚販の子にて本苗阿部藤十郎と云ゆへに河藤と呼しを堺町に住風と云者ありて藤といふ字を改東と云てより河東となる

半太夫操座興行之節流物

- 一 源氏十二段 二段目小六檢見物語 同四季の調 四段目すがたみの段 同御座うつり
- 一 一生賛 三段子道行 五段目きやうげの段
- 一 櫻狩 三段子道行
- 一 歌枕 三段子道行
- 一 弓場意恨 三段子道行 五段目道行
- 一 和泉城 二段目調伏 三段子起調文 同勝負分々 五段目山入の段并 教化のたん
- 一 日蓮記 初段雪大寶 三段子道行 同馬かたの段 五段目おせん道行并同物狂ひ
- 一 丹波興作 三段子道行
- 一 淺草帷子黒小袖 四段目さらし寶

一夜目遠目笠の内

- 一 女庭訓 四段目大和之助道行 同大和物がたり
- 一 本朝勇士鏡 四段目秋の前道行 五段目忍びはせな
- 一 參會會我 三段子花鏡 初段結成角力物語 三段子髪梳 五段子虎少將道行 初段温泉捕 三段子道行附鱈の段 四段子對面之段并 裝束の段かつこ小歌同亂事
- 一 湯名の意恨 四段目法正覺道行 五段目十界の圖物語 四段目草花葺附天皇忍の段 六段子傳教新同みさほの前道行 五段子清支祈 四段子櫻姫道行 後に替り名代花の投置と出す二段目 四季の舞
- 一 出世盛久 四段目景清道行 五段子清半破 初段子輪のたん 三段子進坂山附ひわの段
- 一 平安城都定 初段金輪の段 三段子信田道行内釣狐 四段子清貫道行同釘打の段附小ひちりの段笠のたん鐘の段
- 一 全盛櫻狩 後に替り名代 怒と情は衛士のかかり火 仇と恨は三ツの鐵輪火 蟬丸紅葉傘
- 一 景清雷問答 三段子十二段並前首の段鐘桶 六段子女郎名前さいもん
- 一 聖代時津風
- 一 神刀小鍛冶初午參
- 一 會合源氏色安宅

禁中綱引合

- 一 愛着鳴神上人 二段目鬼捕 四段目壺の前道行 三段子七夕祭 五段子父母道行
- 一 古今七人男 三段子木曾の花子 四段子巴山吹道行 二段子黒木賣 三段子牛若丸千鳥前道行 柱屏の事也六段子金山物かたり
- 一 忠臣京土産 三段子花軍五段子露の前道行六段子 小問物賣
- 一 一虎があした 二段子數盡三段子元服帯引五段子瀧師 少將がまし櫛嫁入五人會我 坊談儀
- 一 西行は昔江口の傾城旅衣 三段子五百姫道行江口の道行 三段子傾城請狀 五段子虎少將扇賣 初段子織紋盡三段子 女髪結同かみすき 四段子老女對面の段同梶原軍附矢切 いくさ
- 一 貞任責 節事なし 伊達姫道行 三段子清見八景 五段子稻荷勸請
- 一 好色與之助 此節より虎屋庄太夫ノキを勧る 三段子かつらき房下り
- 一 名古屋

一 山階右大將色遊三段目右大將忍の段

同主従道行

五段目殿上の闘打の段

一 和國美人歌謡三段目小袖模様

五段目天狗抄

一 かうきでん

三段目上は成り打の段

五段目主上の道行

六段目清明祈

一 井の頭ふたり女三段目自家の段

鍋かむり日しん行平須磨へ流罪の事

右之外焼失の分三流

傳受事の部下り葉置鼓相方

一 初段檀折天皇三重

一 二段目切合三重相方

一 登り三重

一 愁 三重 四季の調 櫻姫 蟬丸 日蓮記

一 別れ三重

一 習ひ事笛の段

一 四季の調 一 姿見の段 一 教化の段 一 和泉か城

一定元道行 一 蟬丸 一 新談議 一 清明道行

三絃相續山緒

一 源彌盲人 同 源彌弟子

一 喜齋 一天下一平左衛門

一 庄左衛門弟子 庄左衛門弟子 平左衛門弟子

一 一杉田平五郎 一 甚左衛門

甚左衛門弟子

一 八郎兵衛

又八弟子

一 村上源四郎

後二山彦ト改

八郎兵衛弟

一 山崎源左衛門

肥前水閣半

一 木村又八

夫相方也

異名なり

源左衛門弟子

ふつかふりと云

丹波和泉太夫の相方三絃權左衛門と云者山彦銘有三

絃所持して居たりしに老年に成し後源四郎數年懇望

せしが漸心得て悦の餘り本苗村上改扇八景の淨瑠璃

并竹馬を彈たりし節より山彦と改名す元來は源四

郎事半太夫座の操合の狂言の唄を彈居たりしゆへ木

村又八弟子と成て半太夫節も荒増は覺居元祖河東

松の内を語りし時より初て相手には成たり河東手品

節手品市左衛門式部節(土佐太夫弟子萬太郎後式部

太夫と改)を好半太夫節の内へ彼兩節を加へ新淨

るりは(松の内以後のじやうるり也)節付せし也源四

郎も式部節を覺居たりしゆへ新淨瑠璃手付に式部節

の手配り多くありさるに依て半太夫節とは少々語

り方彈方も違ふ様にもきこゆれども古代の段物節事

等一體違ひなししかるに近世の藝半太夫節の一體を

不知して違ふ様覺へしは違にあらす本體を不知也予

度々河東と引合しに道行等段物少も違なかりし源

四郎前に云又八弟子にて半太夫座を勤り居たりしゆ

へ半太夫古代の淨瑠璃は不殘覺居たりしゆへ源四

郎に得と出會なく不習して源四郎彈方は一流の様に

覺しは歎かは敷也淨瑠璃は何流によらず操を體とす

操は能太夫の能にして節事ははやし小謠の如し恭盤

なを同じ然るに近世操を勤し太夫三絃人形の妙手な

くて少し計りの節事のみ要とするは能太夫の能を不

知小謠のみ唄ふごとしかなしむべし元祖半太夫肥前

太夫弟子にて肥前節を和らげて語りたるものなり去

るによつて肥前永閑の相方篤と不知して半太夫節彈

とは云がたし又河東一流も半太夫節を和らげ式部節

の心を以て語りたるものなれば半太夫節を能不知し

ては河東節彈とは云がたし予山崎源左衛門にたより

て肥前永閑半太夫節の流物を習つて操の一體を覺へ

人形の妙手へんろく六兵衛小山兵三門三清助等に至

る迄出會古半太夫意教薩摩左内など相手として其外

覺へて心身を盡すといへども元來不勝にして其器に

當らず六十四近く老年益成就難成事を謀り元文辰辰

年八月十五日夜所持せし三絃弟子高木序遊へ讓遣し

殘る三絃淨瑠璃唄の本手覺せし書面等迄一時に焼捨

其後無聲の靜かなるを樂とせしに我が數年此道に勞

せしを痛みてやあなたこなた(京大坂長崎)其外諸

所より人々一章一句を送らるゝ其志難捨置梓にもち

ばめしは世にしろ處嗚呼古代達人人形の妙手迄殘ら

ずして如斯は大慶また江戸操の正しき格式を知る者

なき世ぞ歎てもあまりあり犀は角に死し虎は皮に

死し熊は膽に死し孔雀は尾に死す我は三絃に死せし

甲斐もなく一藝ともならずで止ぬるぞ毛ものにもお

とりたる身は因果とやいはむ命とや云べき

世の口すさみに藝は身を助くともいふ事

あれば

藝は身を助すしかも好で下手

身はたてもせで浮名のみたつ

かく認めて去るかたへ送りしを如何してや市村羽左

衛門尾上菊五郎傳へ聞自分の行にする事ならねば珍

敷古術なれば寫し給はれとやかう懇望するも藝道

に深切なるを感じて叶はぬ筆をうごかしぬ此書物他

見成がたきものゆへ自分つたなき筆を染るもます

ます耻を重るなれと予は朝露夕陽しばしの身なれば誰をか耻ぢ誰をか恐れん跡のかたみにもと思ふのみ

かきおくも おり

と あとの

も かた 忍ぶ

見 みと るにし

よ なる

柴の

寅の冬十二月認めいけの端勝原氏より能味富曉へ送り夫より後に富曉事十寸見藤十郎と改名同人門弟にて此道至て懇望ゆへ譲り受るなり

可柳

信長公の侍女小野のおつうは秀才の女也後に秀吉公の籾中に仕ふ參州矢矧長淨瑠理姫が事を作る峰の樂師瑠理光如來の申子ゆへ淨瑠理御前と名を付し也十二神をかたどり十二段とし淨瑠理物語と云平家物語は信濃前司行長が作にて生佛と云琵琶法師節を付て淨瑠理といへり其後瀧野澤角兩檢校三絃に合せて曲節を語る又六字南無右衛門と云女太夫四條河

原に芝居を建る慶長のころ人形に合て度々觀覽に及しより淨瑠理太夫の受領を戴く事になれり京大坂江戸に淨瑠理太夫多くなりて伊勢島山本角太夫岡本文彌江戸油屋茂兵衛四郎與吉鳥屋次郎吉大薩摩小薩摩各々様々流儀有加太夫節紀州和歌山宇治と云所のもの也伊勢島宮内に習ひ宇治加太夫と云此道名譽の者も受領を戴き加賀椽好流といへり諷も能名人の部に入たり大坂井上節井上市郎兵衛と云者也道に達し京大坂に鳴り渡りしもの也受領して井上播磨椽藤原要榮と名乗る大坂義太夫節天王寺邊の民にて初は天王寺五郎兵衛と云西京加太夫がワキを語り天姓此道に妙を得て近世の名人と云後大坂にて竹本義太夫と改芝居す受領して竹本筑後椽藤原轉教といへり今もつて此を世上に翫ぶなり
江戸淨雲節正保の頃薩摩太夫次郎右衛門と云江戸淨瑠理の祖なり法林して淨雲といふ子を又薩摩太夫次郎右衛門と云
淨雲弟子丹後太夫長門太夫丹後太夫源太夫四人あり是は其頃四天王の太夫と云今の淨瑠理淨雲に初る江戸語齋節を近江太夫と云丹後が弟子也

江戸肥前節長門太夫が弟子なり

江戸外記節下り薩摩と云二代目薩摩次郎右衛門の弟子なり

江戸土佐節虎之助と云二代目薩摩が弟子なり

江戸永閑節源太夫が弟子なり

江戸半太夫節幼名半之丞と云修験者何院とかやの子也初めは説經祭文の名人なり肥前はを聞江戸節を進めて門に入後に一流を語り出し肥前が弟子なり塚原市左衛門といへるもの半太夫座の作者なり半太夫は剃髮して坂本梁雲と云東武近世の名人也今以流義不捨なり

江戸河東節小田原町御納屋天満屋藤左衛門伴藤十郎半太夫門弟なりしが此者近世の名人にて一流語り出し藤十郎世となり御納屋も外へ譲り母の里御藏前にて河部氏と申かたに同居して居たりしゆへ河部の河の字に藤十郎の藤を取り河藤と呼びしなり前文にも東と文字を書替し事出し有り河東弟子河丈是は吉原町大門外に下駄屋庄右衛門といへる者也二代目河東となり二番弟子夕丈事二代目藤十郎と改名す此時一流二つに別れ藤十郎かたへは三絃山彦源四郎附き

し也河東方へは三絃十寸見東古附く此頃双方共賑々敷相互に脚合繁昌也藤十郎後に法林して榮軒と改む鳥越邊の御屋敷へ三十人扶持にて醫師格に被召抱相勤る伴事は塗師御用達相勤ける堆米源藏といへる者なり

半太夫弟子

天満屋藤十郎

同弟子庄右衛門

同弟子半次

元祖河東

二代目河東

三代目河東

同弟子半次男傳之助半次弟子半四郎

四代目河東

五代目河東

六代目河東

本郷元町眞木屋也

十二歳の時より半次方に同居なり

忠次郎養子傳藏

七代目河東

後剃髮して東雲となる

元祖河東弟子夕丈 榮軒弟子

二代目藤十郎

三代目藤十郎

後榮軒と改名

出生品川也後に根津茶屋次郎右衛門といへる者也三代目半次死去の後河東と及破談東作といへる名相返し能味富曉と名乗る榮軒より藤十郎といふ名を貰居る此者至極の名人なり

同 宇平次弟子 又四郎弟子 三代目蘭洲

初代蘭洲 二代目蘭洲 池の端仲丁龍岡と
新吉原江戸町二丁目 剃髪して志明と改本
名佐倉屋又四郎寛政 といふ者の伴又次郎
十一申年八十三歳死 爾と云夫より蘭洲
と改め夫より剃髪 して俳諧師と成名
はきそふと云

三絃木村又八弟子
元祖源四郎

山彦といへる三絃所持なり

弟子三河町

同三田

秀彌

同小田原町

和蝶後藤十郎相方

同孫四郎伴

長藏後源四郎

同池の端松坂屋伴

二朝此者八郎と云三絃所持なり

宇右衛門伴

宇之助後宇右衛門

同新吉原

宇右衛門伴

同新吉原

秀次郎後源四郎

弟子

文次郎吉原大門内

桐屋伊助事

同虎少將道行

同夜目遠目笠の内

同好色與之助

同京わらべ

同三名劔の巻

同忠臣京土産

同牛若丸道行

同千鳥前道行

同柱磨之事

同全盛樓舞

同四季の舞

同初瀬前道行

同平安城都定

同傳教祈

同三段目逢坂山

同琵琶の段

同四段目清貫道行

同同物狂ひ

同景清道行

同景清雷問答

同草花盡

同天皇忍之段

同初段金輪

同聖代時津風

同同虎少將道行

同夜目遠目笠の内

同好色與之助

同京わらべ

同三名劔の巻

同忠臣京土産

同牛若丸道行

同千鳥前道行

同柱磨之事

同全盛樓舞

同四季の舞

同初瀬前道行

同平安城都定

同傳教祈

同三段目逢坂山

同淺草 同神田明神下
新九郎 天明の頃千住
彦と名主役又山 長藏 池の端仲町
同吉原 衛門事
文四郎
同人伴
二代目源四郎 寛政年中柳橋河内屋半次郎方にて名弘の興行
源四郎弟子
初代河良
弟子明神の内
良波後河良 此者闇といへる三絃所持な
り天明年中故人後小源次方
へ娘遺す右之三絃持参なり
明神社内
二代目河良
弟子本郷日蔭町
良波後河良 同赤城明神前
同淺草平右衛門町
小源次丸の内御屋敷へ上る
兩國藥研堀
二代目河良
弟子淺草巨勢部
良波 享和三亥八 池の端
月死去 良波
おきせ弟子
秀波 此者山彦といふ長卒三絃所持外に二聲
と云ふ三絃あり

浄瑠璃番附

釘打の段 小ひちりの段

後に替り名代 戀と情は衛士のかかり火蟬丸紅葉傘

安宅鎧踊 嫁入五人曾我

五段目 傾城旅衣 三日月元服

眞任責 江口道行 傾城請狀

伊達姫道行 即心猫股 和國美人

三段目小袖模様 五段目天狗揃

日蓮記五段目 挑灯紋盡

山椒大夫小栗の段 元祿の頃山村長太夫座にて江戸半太夫語る

十郎髪梳 有馬筆 幕紋盡

ひとへ帯 みつのあさ 袖留曾我

百遊しん日の 春の空 美つのつばめ

かいとり 小もん盡 笠物狂ひ

甲子 鶴のあゆみ

東の雲	同	初音響	同	まつ宵	同
袖鏡	同	しら玉の道行	同	女髪結	同
道中双六	同	形見送り	同	袖きてふ	同
せいし曾我	同	封し文	同	二人禿	同
浦島道行	同	風呂屋曾我	同	巴山吹道行	同
露前道行	同	明因の道行	同	繪双紙賣	同
おちよ宵庚申	同	運性道行	同	葛蒲草	同
牛兵衛宵庚申	同	明鳥口舌の花	同	湯名の巻筆	同
高砂	同	笠物狂ひ	同	縁のはご板	同
里言葉	同	桔梗原道行	同	蓬萊	同
三輪の山	同	二輪の山	同	蓬萊	同
放下俯三段目	同	蓬萊道行	同	罽のたん小歌	同
温泉揃	同	竹馬の鞭	同	礎	同
かつこ	同				

元祖河東	同	松の内	同	松の後	同	扇八景	同
松の内	同	江のしま	同	丹前里神樂	同		
禿万歳	同	雛の出遣	同	狂女草枕	同		
新世帯	同	隅田川船の内	同	水楊蝶羽番	同		
隅田川船の内	同	鶴の橋小袖	同	神樂獅子	同		
男結帯引	同	酒中花	同	貝盡し	同		
唐團扇	同	竹馬踊	同	虎が文	同		
雛の磯	同	卯月の里	同	さくら盡	同		
しがたまつ	同	ゆきま	同	七種	同		
助六心中道行	同	百夜猫	同	十寸見櫻	同		
櫻の曙	同	初音の高館	同				
花有里	同	助六花街	同				
庄左衛門	同	二葉草	同				
一瀬川	同	御籠蒲團	同				

いはほの燈夜具
灸すへ

水調子竹婦人作	花形見	浮無世
外記大夫	住吉踊	夕丈三絃源四郎
傀儡師	雛の錦	柳の紙雛
不二三重霞	雛の錦	ひすいの柳
筑波	宇平次	男の黒髪
夜の錦	口舌の鶏	濡扇
あみがさ	同三絃東古	由縁の江戸櫻
いの字扇	相の山	
小栗堂妻聲	常盤の聲	
糸採の段	忠次郎	
傳之助	千歳の枝	
廿日の月	常陸帯花棚	
助六麻の	御田	
花かち	露の二葉	
道成寺	元祖源四郎	
志明	十七回思道善	
老の鶯	傳藏	
右者夜半樂紅葉集	卷羽織	
鳥十寸見要集	より拔書	

一まつの内此淨瑠璃半太夫と河東破談に相成初て出
 来る此松のうちの元の起りは新吉原三浦屋何某と
 かいへる女郎享保成年正月元日戌の日なりし時二
 日に中の町へ年禮に出ける時下紐とけ中の町を引
 歩行けり跡よりつき添ふ遣り手若ひもの新造禿に
 至まで氣の毒に思ひながらもおいらんへ雜言いひ
 がたく茶屋へ腰を懸し時しらせ引あげさすべしと
 皆々おもひけるに漸何とかいへる茶屋の前にて彼
 緋縮緬のいもじ落し時かの女郎打掛三つ重ね着せ
 しがうちかけともに下帯の上へおとししらぬ顔に
 て行過ける跡にて遣り手打掛にて下帯を包み取り
 上て其茶屋へ呉れ遣しけるとかや其氣前皆感じ
 竹婦人も是を七種迄の文に作り松の内と名づけて
 大にはやりし也どこの女郎の下紐とは此事なり
 其春狂言に芝居にて興行有り誠に貴賤群集して棧
 敷も落し程の大入也節付は元祖河東三絃は梅都と
 申盲人手付なりと云ふ夫より源四郎前彈付けしな
 り是より河東相方となる

一住吉祭傀儡師此二段の淨瑠璃は元祖半太夫門弟の

頃習ひ覺へしゆへ外記節なれども面白き節事成しゆへ今に不捨語りし也

一水調子の淨瑠璃は新吉原角万字屋に玉菊といへる女郎あり禿しげみしのおといふ此玉菊事きりやう十人に勝れ情深く高き卑きの高下もなく諸事行届きよき心底の生れ付なり誰あしくいふものなく茶屋裏の文使のよふなるものまでも情をかけし也客は勿論心實深く振といふ事もなく慾がましき心も無く勤し也此玉菊事二十歳の時病氣付けるが神社佛閣へ千度百度祈禱祈念所々への代參上を下へとかへし名ある醫師どもをかけ少しも手透もなく療治を盡しければ漸く病氣平愈ありける夫より四花くわんもんのお灸治致すべしと醫師申けるに玉菊申には灸事のうち半太夫河東兩人の淨瑠璃を聞ながらすへ度よし此由を内證へも咄候へば承知の旨にて日限を極め摺物を出せしなり此時家内の女郎惣仕舞仕切くも不殘うちぬきける淨瑠璃聞に來る人々へは吸物酒肴本膳等までも出し馳走有しなり誠に貴賤群集して賑々敷事言語にも盡しがたく夫より後二十五歳の時また病氣にて終には

草葉の露と消うせけり此時こそ歎かざりし者はなく皆々袖をしぼりける扱其年七月も近く玉菊の新盆になり恩を受しものみな恩送りに提灯または切子灯籠を出し玉菊追善の賑々敷事貴賤群集せし頃は享保年中也是より吉原燈籠初りしなり一此淨瑠璃小田原町に貝屋五郎兵衛といふ者ありて箱根へ入湯に行ける時湯廻りに出ける山中の谷合に淋敷ひとつ家あり貝五此處へ立寄見れば賤の女一人居ければ彼女の側へ近づき尋けるは此山中に只一人淋敷しからんといとやさしく問ければ賤の女答て扱々やさしくも尋給ふよ私夫事は當春旅の仕事に行けるが便りもなく明暮あんずるに際なく寸志もわするゝ事なくむなしく月日を送り最早四五十日程にも成けれ共歸ざるは不思議なり是迄二三日の留守は少しも淋しとおもひし事なく心ぼそきは夜ふけに谷山の間よりいづこともなくかすかに碓の音のみ聞へるばかり夫のおとづればなく夜の目も合すおもひあかし枕のちりの積るのみと物語しけるを貝五感じて作する也此文のうちけふのはそ布といふことは陸奥のけふの

はそ布ほどせばみむねあいがたき戀もする哉せきばくは寂寞也淋敷なり

一忠臣京土産四段目牛若丸千鳥前道行是は柱曆といふ六段目金山物語是は秀衡牛若丸へ謀叛を進め金の出る所を物語なり

一神樂獅子此淨瑠璃は市川海老藏柏庭作也元祖河東節付ワキ河丈夕丈三絃山彦源四郎手付中村座にて興行有此淨瑠璃の序文は周の成王の時世の中富貴にして國家盛んなる事誠に米粟澤山にして民も祝ひし時節也委敷事は文選に有り今の平安城を奉敬の引事也狂言は本苗曾我也大坂の淀屋辰五郎が事を作申せし也此文のうちには小がらな男山八幡さかぬ色好みと云は柏庭が事なり芝居大當りにて鼠木戸も押破し程の大入今に云傳へしなりやぶしわかねば未だ考へずいそのかみとは古くといふ枕言葉なりかのきんこうがからごろも唐土蜀の國にて錦を製す所謂蜀紅の錦也其織人を錦工といへり華陽國志に見えたりこわねかなは聲音なり一竹馬の鞭此淨瑠璃享保年中の頃京橋邊に柏木屋敷と云所ありしに甚助と云美男奴世にも勝れし生れ

付人體骨柄申分無き者成しが市村羽左衛門と至て心易くせしに芝居にて羽左衛門雛奴の狂言を致度風と此由を竹婦人に咄けるに彼仁作して春芝居に右の狂言せし所也節付元祖河東ワキ河丈夕丈三絃手附山彦源四郎芝居大當り也文の内に雛奴といふは甚助なり桃色といへるは脇指朱鞘の事也

一扇八景竹馬の鞭山彦の三絃手に入し時源四郎苗字を山彦と改めし弘めに此淨瑠璃二段興行あり享保年中の事なり一小袖模様は和國美人歌あらそひといふ淨瑠璃の内なり奥州秀衡と結城七郎合戦の時秀衡方へとりことなり居るを七郎一人の娘歎きかなしみ處々尋さまよひて奥州仙臺へ行漸く尋まわりけるに此所之牢に入置しを娘聞て父に逢んと神佛へ祈願し半番の者へ近付我父七郎に逢せたまはるべしと願へども中々聞入す何とぞして逢させ給ふならば面白う舞を舞ふて見せ申さん是非と進めければ番人うなづき白拍子を面白ふ舞ふならば逢はせ申べしと云ふ夫より仙臺の大松屋といへる吳服屋へ行き

て面白き模様見せ給へと申ければ亭主色々成模様取出し先一番に武藏野に一村すゝき穂に出て亂れ逢たる染模様夫より段々に見せければ亂れあひたるといふ模様吉相成とて夫を今日中に仕立給はるべしと頼みける其衣裳を身にぞまとひ彼處へ行て番人へ白拍子初めんと云ければ番人ども兼て望し事なれば早々舞を初むべしと答へけり扇おつとり舞けるを番人見とれうとく居眠ける彼女此時ぞと牢の錠をねちきり扉押明て父七郎を伴ひ何國ともなく行去ける今に仙臺に大和屋といふ呉服屋榮えあるとなり

一江の島淨瑠理は享保年中元祖河東江の島由來記を寫し取一夜の内に節をつけワキ河丈夕丈三絃源四郎手を付し也此淨瑠理の起りは元祖蘭洲事是ぞ知らざる淨瑠理なく何がなこまらせんと工みて竹婦人に少し直させ作らせし也吉原にて翌日淨瑠理催しける時蘭洲は河東脇に座り河丈夕丈を下へおき是を語り出しける蘭洲肝を消し其席を立退しと傳へしなり序文に紙半枚ほども法答といへる文有けるをいつの比よりか絶判しける也今はさして

湖路と語り出る也宇平次河東の比迄はなんぞかうきうなからんと語りしが今はかうきうあらんと語るなり○時に淨瑠理終りて蘭洲申様はこの淨瑠理いつ比作りしやと河東へ尋ければ是は半太夫に習し由語る蘭洲答へて半太夫節には葛西節に承らざる由を答へ神樂獅子より外になき節也手をこまらせんと工せし淨瑠理なりと見えたりといふ蘭洲も只ならぬもの也と噂せしよし云傳ふ

一瀬川此淨瑠理元祖河東一回忌追善兩國橋川上にて屋形船にて興行あり河丈夕丈兩人にて三絃山彦源四郎手付此時貴賤群集して夥敷事言葉にのべがたし其比大川通船も難成程の事なりと三回忌追善は花形見の淨瑠理是も同所にて興行あり賑々敷事同様なり七回忌追善は浮無瀬の淨瑠理是は池の端茶屋にて興行有夥敷大入にて二階も落る計なり一瀬川の淨瑠理に百夜も同じ丸寐してとは千載集におもひきやしらののはしがきかきつめて百夜も同じ丸寐せんとは花形見の内甘泉殿は漢の時の殿の名なり松樹千年終是朽槿花一日自爲榮とありま

つ永きも朝顔のみじかきも終には枯るゝをいへり

一三番更此淨瑠理は半太夫と河東破談に及びし時半太夫方にて早速作りし也門弟の中に能太夫有て興行之節七日めの植女の三番を作り語りしを承り出來宜く面白き故河東方にて浦山敷門弟寄合この淨瑠理をとらんと工風有けるに服部坂與力七郎右衛門と申仁河東方は破門なりと偽りて半太夫方へ弟子入して習ひ覺へける又源四郎弟子にて半込邊の者甚右衛門といふ者有りしが又八方へ入門して二三段も稽古して其上にて三番更習ひ覺え兩人共に河東方へ立歸りける宇平次河東へ語り聞せける時宇平次三度迄語り直し漸極りける也三絃は原富五郎渡邊庄八へ寫し夫より源四郎手を付直し弾けり近頃迄をよやれいちやと語りしが平四郎河東の比よりそよやりちやと語りけり四座の内にも文字は理の字にてれいちやと諷ふも有跡とあふせ候程に物に心得御身のあとの爲とかたりしが是もいつ比よりかものに心得も抜かたる藤十郎かた蘭洲連にては今に古風の通り語る平四郎河東何れにてか忘

れ語りおとせしを是はぬけるも大事無よしを申今に抜き語る也切に至りこれの御庭よりは文七節也此淨る計は半太夫節のは大に違ふなりととうたうたりの事皆經陀羅尼なりといへり是申樂家の秘事にて淨瑠理の上にては辨へ知りかたき事也

一新世帶元祖河東節附三絃手附初代源四郎盛なる男ふたりのせいしやうや二つ枕の草紙にも過越かたの戀しきは枯たるあをい難遊び清少納言の枕草紙の言葉也せうらの契りは松蘿也蘿は葛也松を葛にたとへ葛を妻にたとへたる詩經にありはきやうの別れ破鏡也夫婦の別れる事を云ふ徐徳玄といふ人兵亂にて夫婦別るゝに鏡を中より割て各一つをもてり後夫をしるしに尋合し事西京雜記に見えたりほどきをたゝく愁とは莊子に妻を失ひし者の矢をたゝきで諷ひしものあり唐も大和も繋がるゝ是は下の煩腦の犬といふにつけたるのみ也おきまどはせるしらぎくや雛を飾る姿をいへるのみ別に意味なし或人云雛の硝子の盃に多く菊の形したるがあるもの也よりておきまどわせる白菊の花と

いふ歌をおもひ出てかくいふにやくひのやちたび
 ふりしきる雨物を後悔するいく度かくりかへし
 思ふゆへ悔の八千度といへり歌にもよめりふりし
 きるは軒の點滴といふを續たり雨だれの事也三
 躰詩にあり聲もおしませぬのら猫の妻乞ふる姿をい
 ふ野等猫とは家に養うして野に住猫をいへり夫木
 集にしきみ原下はいあるくのら猫のとよめりか
 かげの箱は櫛箱を云ふ也ゆするつきはひん水入
 を云ふ近江なるつくまの祭りはづかしやといへ
 るは竹間半内といふ郷士ありしが村中の者に憎れ
 大き成沼へ被打込妻是を殘念におもひ飛込蛇身と
 なつて人を恨み腦しける依之竹間大明神と祭り毎
 年祭禮の折からは村中の女老若共鍋を冠り踊るな
 り夫を一生に一人持たる者は一つ冠り二三人も持
 たる者はいましめに其數程はかむるよつて數をか
 むるを耻とする故にはづかしやといふ也下の巻は
 雛の出遣ひ揚蓋の扉とは雛人形の箱の蓋を門の扉
 に見なしたる也東花門とは東華門と書く拾芥抄に
 見へたりはや參内の沓の音とは官人の大内へ上直
 するを云くわでんに沓を入れず瓜畑に入ざるなり

李下に冠を直さるは李下にて手を上へあげざる
 類なり
 一 駕籠蒲團節附河丈三絃源四郎曾我狂言文の内に六
 つを浮世の内かけとは吉原の日暮て後賑しきをい
 へり後灸すへいはほの晝夜着同人節附三絃同人手
 附此前彈は樂の手なり傳之助河東事仙臺御屋敷へ
 召出されし時駕籠蒲團御好にて語るべしとの御意
 なり畏り奉り語り出しけるに六を浮世のといへる
 所暮を浮世のと語り出せし故に御前にも御悅あり
 て御褒美頂戴有之しよし初代東作申傳へし也ケ様
 之事はいづれの淨瑠璃にもまゝ有事なり常に心得
 べし
 一 反魂香傳之助河東節付三絃源四郎手附木挽町芝居
 にて興行あり中村富十郎所作あり文に三つ葉四つ
 葉の殿づくり古今集序に此殿はむべも富けりさき
 草の三つ葉四つ葉にとのづくりせりおちこちのた
 つきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな
 草葉小袖のひじきもの伊勢物語におもひあらば律
 の宿にねもしなんひしき物には神をしつゝもひし
 き物といふ心なり

一 清見八景此淨瑠璃は世之助物語と云ふもの、内の
 一段なり作り物語なれば世之助事跡他に見へずも
 ちにきへては其夜ふるみな月のもちにきへてはそ
 のよふりつゝもちは望にて十五日也ぎよしうの火
 のかげは唐の杜荷鶴が詩也魚とる船なり其船に
 焚く筈は浪を焼かすつくれる也藤原の忠文といふ
 人將門追討の爲關東へ下る時清見が關にて此詩を
 おもひ出して詠せし事古事談袋草紙などに見へた
 りからうたも詩の字をからうたとよむなり
 一 四季の舞は全盛櫻狩といへるうちの扱たるものな
 り是は初代半太夫章大庚嶺の梅の花大庚嶺とは唐
 の山名なり此嶺梅花多し詩に大庚萬株梅と作る此
 文勢をとれりすべて此四季の遊びは淨瑠璃の文を
 とりて書たる也常樂我峰は極樂の風をいふ山嶽我
 峯とはやまそびへさかしきなりばいたん翁は炭焼
 人なり淨瑠璃に炭焼翁がとしを經て頭の雪を拂兼
 おのが袂はうすけれど冬を待たるやさしさよと有
 をとれり賣炭翁は白樂天が文集にあり
 一 いの字扇はいの字五十字有ゆへいのじ扇と名付し
 と云事聞及ぶ宇平次河東節付三絃十寸見東古手を

附る文の内一はけくもる男むきと云事夕立のけし
 きの模様は男の持扇に宜しといへる事也五條あた
 りの夜語といへるは源氏夕顔の巻にあり腰にさし
 での磯ならばさしでの磯名所なり腰にさすの縁に
 よれり
 一 天皇忍のだん平安城都定の内也半太夫節付也文の
 内なよ竹しなひてなよとしたる竹を云女竹の
 事なり今も内竹と云此道一つ稻舟の茂上川のほれ
 ば下る稻舟のいなにはあらず此月ばかりいやでは
 ないといふ事なり大和言葉に見へたり
 一 嫁入五人曾我元服草の内半太夫也文に五衰の數な
 らんは天人の死を云五衰之内かざしの花しほむ事
 あり前髪落すを是になぞらへたり
 一 濡扇庄右衛門河東追善也節付宇平次河東三絃東古
 手付也文にたかむしろたゝまくおしきたかむし
 ろは簾也宴の時しくもの也古今におもふどちま
 るせる夜は唐錦たゝまくおしきものにぞありける
 廿日餘りは庭やせて牡丹は廿日草と異名すされば
 廿日餘りにちりたれば庭もやせて淋敷見ゆるとな
 り故に牡丹散にしと有そこな露めは物をいへかく

戀つゝ居るわれをなぐさめてそこには露もものをいへといへるなり知識とは此枕なり我あらばこそさめもせめ我なくば覺る事もあらし悟る事をおしへつる知識は枕なりといへるなり

一千年の枝傳之助河東名弘めの淨瑠理也初代源四郎手を附る文に錦をくゝる裾模様錦を括る也すみて語るべし染るとは鹿の子なりかの子はくゝりて染るゆへ也詩にも黄纈緋林といひ歌にもから紅に水くゝるといへりしづえをあらふ松がねと風ふりほどく若竹と共に風の有様をいへりしづえを洗ふとは松の下枝を浪の打といふなり後拾遺おきつ風吹にけらしな住吉のしづえを洗ふ沖つしら浪

一常陸帯花の柵忠次河東節付三絃二代目源四郎手附天明年中淺草駒形町駿河屋にて興行有り文に潤水たゝへては谷の水なり藍の如しと古詩にあり

一唐團扇元祖河東節付三絃初代源四郎手附文に白樂天の琵琶行の詞をとりて作りたるもの也と見ゆ新吉原の三浦屋高尾が事を引て作れり

一夜の錦元祖河東十三回忌に享保十九寅の秋池の端茶屋にて興行あり宇平次河東章ワキ沙洲蘭洲東作

源四郎ワキ彈河良孫四郎宇右衛門いづれも初代也文に白鷺の歌あり是は四國船の帆柱を引立候時舟乗どもの木遣りなり此時宇平次深川より永代橋へ通りける時彼歌を諷ひ引立るを暫く立留り聞けるに面白き歌かなと感じ此淨瑠理へ入るゝなり此淨瑠理計は外の淨瑠理と違ひ半ユリ本ユリレイセイ三重シヨリなし

一亂髮夜の編笠は元祖助高屋高助作節付は宇平次河東ワキ沙洲蘭洲東作三味線初代源四郎なりワキ彈孫四郎宇右衛門門弟不殘出る森田座にて中村富士郎所作事狂言大當り文に薦く壁に薦かつらといへるは濱町大川端御屋敷に有り白鷺のうたは夜の錦よりとり入るゝ也見れば見渡す竿さしやとくなせに届かぬ我思ひといふ歌はやりしなり是も入るゝなり此時關東洪水猿がまた堤押切本所深川のもののは前表成うたのよし申せしと也頃は寛保二戌年なり

一京童是は夜目遠目笠の内五段目なり古來は文の内振袖の染し模様は月見草九月になれば菊重ねとありいつ比よりかは八月九月の文扱し事知れがたし

三絃引方も近ごろより前彈をひく也千團子の大明神といへるは三井寺觀音堂の下に結構成社有尋れば本體は鬼子母神のよし初代半太夫節付なり

一丹前里神樂元祖河東節付初代源四郎手附中村座にて中村七三郎相勤む後に市村羽左衛門安永年中の頃相勤むるなり此所作事外に狂言いたすものなし

文の内あの山見さいのうたは六拾六部の通り念佛といふもの也面白き節故是を工風して付し也いづれの淨瑠理にもカイドウト云節有是は六部の海道下りといへる念佛よりとりし節也此節は表裏ある節也

一籬の錦柳の紙雛翡翠の柳富士筑波二重霞この四段の淨瑠理は夕丈事藤十郎と改めてよりの節付也源四郎事も藤十郎相方と成河東と破談也ワキ語リ藤九郎脇彈孫四郎宇右衛門右四たんの淨瑠理芝居ものなり

一廿日月宇平次河東七回忌追善なり傳之助河東改名して初めての節付也灸すへまつの内扇八景より節付とりて附る傳之助節付名人なりと云傳ふ

一禿萬歳元祖河東節付三絃初代源四郎文に雪だま

れし風情なり梅の白きをいへり

一信田道行は神刀小鍛冶初午まゐりの内次に狐釣り此信田の原長サ三拾六町横三拾町原中程にかの狐稍荷に祭有之片脇に寺一ヶ所見ゆる原下り口に信田大明神社別當幡松院夫より八町下り信田村西裏に信田の森あな并に葛の葉社あり神主森田九郎兵衛と申也文の内にもすらすら男は獵する人也歌にますらをかたかまの山を責くれば里に落くる棹鹿の聲

一籬の磯元祖河東節付三絃初代源四郎手附文にまだはらかけを巻柱といへる事は其ゆかりむつまじきを云大和言葉に見えたり

一四季の屏風是は忠治河東名弘め淨瑠理也安永年中柳橋河内屋半次郎方にて興行

一一道成寺は忠次河東志明兩章也天明年中淺草駒形町駿河屋にて興行ワキ志明茅場町沙洲三絃二代目源四郎手附ワキ彈百次上調子二朝淨瑠理大出來也と評判能貴賤群集文句其謠の通りなり

一櫻の曉は傳之助河東節付三絃二代目源四郎名弘め淨瑠理なり此例にて三代目源四郎名弘め寛政十年春兩國柳橋河内屋半四郎方にて興行

一露の三葉初代源四郎十七回忌追善淨瑠璃忠次郎河東節付柳橋同方にて興行

一御田は本銀町に高井孫兵衛といふ隠居七十歳の賀に市川白猿に作させ忠治河東節付三絃二代目源四郎手附泉州住吉御田の事を作りし也此孫兵衛と申す仁は信州善光寺邊の人なりしが江戸節と市川團十郎を至て最負におもひし珍敷仁なり寛政年中故人となれり

一巻羽織は傳藏河東名弘めにて寛政十一未年夏兩國河内屋半次郎方にて興行

一隅田川の淨瑠璃に母木々といへるは歌にその原やふせやにおふるはなきのありとは見えてあはぬ君かなそこいたるやうにて見えぬを云大和言葉に見えたり

一放下僧人皇八十八代後深草の御宇下野國那須郡森田の庄といふ所牧野左衛門勝重御臺所肥後國八城將監秋定の娘なりみめ形世に勝れ仁義正敷智慧深き生付分けて夫婦陸門敷中に勝王勝若とて五つと三つの男子ありける或時大將勝重柳田庄司有國眞壁八郎盛次を御共ごともに召れ上州伊香保の湯へ御越なり同

所に松屋平太といへるものゝかたへ旅宿を極め給ひしに大將淋敷思召伊香保中の湯女を呼集べきよし被仰平太奉畏ほどなく湯女共御前へ出ける家來諸共酒宴あり大將には平太に仰有けるは國々温泉あり何れいづれに有るやと御尋なり平太委敷は存不申候由申候得ば湯女の内より尾上といへる女罷出國々温泉を申上る時に相州鎌倉の住人戸根大膳信利身の分限をしらぬ奢りもの遊山ながら家來一式兵藤秀時梅澤藤太前川次郎高津鐵眞など大勢引連れ伊香保の湯へ來り旅宿を極め居りしが餘り淋敷おもひ是も湯女を可出山申ければ勝重殿に不殘召呼ばれ一人も無之由申ければ信利大に怒り世間に人も無様に不届成致方と勝重方へ使者を遣しけれども外へ一人も遣事難成と答へければ信利其分に濟しがたしと勝重方へ踏込相互に聲高になり口論に及びけり是より意恨となり信利家來へ申付或夜風つよく吹けるに權現堂といへる所風上にて此所へ火を放ちける伊香保風下にて上を下へと騒動しける折から勝重旅宿へ踏込攻戦ふ柳田眞壁も勇士なれども不意をうたれ勝重も手負柳田諸方を防な

がら此對手不相叶眞壁は國元へ立歸御臺所へ此旨可申上と云捨柳田は勝重引抱て火の中へ飛入り空敷なる信利は鎌倉さして引取ける眞壁八郎國元へ立歸り御臺所へ申上る夫より御臺所は二人の若君乳母八郎御供にて森田の里を立出けるに八郎は千住の川にて魚の餌食と成むなしくなり残る人々は淺草花川戸宿に旅宿を定め觀音堂へ參詣して祈願をかけ四人日參して其間には並木のもとにて袖乞して日を送り或時旅僧一人相宿せしに二人の若子八歳と六歳なるを彼僧つくく見て扱もけだかき生れ付なりと譽ける夫より心安くなりて相互に國所を名乗り合けるが彼僧妻に後れ捨てたる子なり我等同國那須郡蘆野藏人秀遠なりと語りける法體して同國高田法正寺住僧と成しと物語り有て二人の子を高田の郷へ召連行兄十六歳弟十四歳の時鎌倉へいで立前髪ばかり取後ろの方は亂髪にしてかつこを腰につけ舞を面白く舞ひながら勇み進みて鎌倉へと急ぎ行時に信利大勢引連瀬戸の三島へ參詣しける二人の子は今日こそ願成就すべしと悦勇み跡より付行ける信利はかたはらの濱邊に暮を

帳り沖を詠めて酒宴あり家來の者も賑々敷諷ひつ舞つ興に入しを見て其邊かつこ打ならし行過けるを信利見て面白き踊り是へ呼よせ踊らすべしと申けるほどなくかつこ踊り初り面白く舞ける信利うつゝをぬかして見とれし折から家來諸士居眠て爰かしこに倒臥居ける所を見て二人の子供は父の敵思ひ知りたるかと名乗かけ討てかゝる信利は酒に酔て足腰立兼ね終に討れけりしかる處に信利弟信連かけつけ亂心ものなりとて二人の子を召捕最明寺殿御前へ引出しける段々御詮義有りて兄弟のもの委敷申上る信利不届成致方成とて御願り弟信連は此罪によつて隱岐國へ流罪に仰付られ信利は家斷絶す二人の子供は勝秀重秀と名乗改め先祖よりの領地も元の如く被下置御褒美に信利領地も二人の者へ被下本國へ立かへる委敷事は放下僧段物または謠の富士大鼓の文句なり本據あり一濡浴衣此淨瑠璃は庄右衛門河東節付三絃東古手附也しゆんせんに雨あつては古詩の句なり吉田の少將班女が事を作りし也市村座にて尾上菊五郎嵐新勝所作事大當りなりみてのみやの歌は大和言葉に

見えたり

一由縁の江戸櫻節付は宇平次河東三絃は初代源四郎手附助六は市川團十郎總角は二代目瀬川菊之丞也市村座にて興行有りおちこちは遠近なり稻負せ鳥呼子鳥かほよ鳥は三鳥の傳にて大和言葉にも見えたり

一貝盡元祖河東章三絃は初代源四郎文の内沙頭に印をさざむは絶海の詩に見えたりうきすにすたくは業平の歌にむぐらおいてあれたる宿のうれたくはかりにも鬼のすたくなりけり伊勢物語にあり

一常盤の弊節付宇平次河東三絃初代源四郎此淨瑠理は小栗吾妻聲系操の段の内より扱物也文の内宮樓高く立て風北に廻り北斗の星の前には旅鷹を横たふ南樓の月の下は寒衣をうつてといふ意をとれり隣砧ゆるく急にしては上の詩をとり受て砧の音きこゆるをいふ朗詠に見えたり錦を織にはたものの中は唐土秦川と云所の女夫の他國へ行たる征伐の留守に相思の情の中へおり入て送りし古事なり

一松の後元祖河東章三絃初代源四郎手附也文の内い

ろふくさ故事見えす初空の氣色にたとへたり
一鳴神道行此淨瑠理の文山は鐵城地獄の事をいふ雲のはた手高きは鐵城の中鐵圍山といふて佛經にとけり路頭にさすらひて道にさまよふ也水の見まきは水のよどみを言所の御牧になぞらへしなり

一清貫道行文にあそふづ麻生津は近江也ちぎ片そぎとは神の社の屋根にあり越前の氣比の宮と上の句にいへり正直捨方便は法華經の文也千木もわがまそそぎもそらず正直となり

一黒小袖文に牛の角文字とはいの字を牛の角にたとへし事つれ／＼草に見えたりあないぶかしやあらいぶかしやといふに同じ大和言葉也いやほんにはむりなりしやほんにと語るべし

一伊達姫道行文にいもりの印人もきけとは守宮の印の事漢の代に宮女他のものと姦通する事をしらんと守宮の血を臂にぬるに姦する女は其血消へうせるといへる故事あり
一 大和之助道行文にかとりにつゝむ紅は繻とかいて

白きうすもの也紅を包みたるはかくせど色のもるをいふ日枯ぬるとは遠き詠あきはてたるといふあまのかるも古歌にあまのかる藻にすむ虫の我からにねをこそななめ世をばうらみじとあり海士の刈藻もおきまどはせるは惑也藤式部むらさき式部のはじめの名也風のさゝらやとはさゝらと云ふ事也湖水にそよ／＼風渡るに浪たつを連瀆といふてさゝなみとよむつらおりは九折也山坂を云り

一虎少將道行文の内しつた太子に仕へにししやのくどうじは悉達太子釋迦如來之王子之時之名也車匿童子は太子の馬飼なりしつた太子は九歳にて王宮を出車匿を連れ馬に乗て檀特山に入給ふと大集經に見えたりりんるの花は輪廻にて三世に流轉することなり迷ふて成佛せざるにたとふ伊豆三島の鹽木こるとは山に入て薪をとりて鹽を燒爲になす也かげをけさるゝは鎌倉山の谷々も足高山の高きにかげをけさるゝ也かるもかくは猪の臥さんとして草を押分くる也ふすの床は枕言葉也昔遊旅の體をいふ

一三輪の山文のうち山頭には夜孤輪の月を頂き是山のけしきを云山の頂きに二つの月さし出るをいふ洞口にはあした一片の雲を吐て是洞のけしきを雲の出るを吐くにたとへたり山影門に入て押とも出ず月光地にしいて拂へども又生ずとも月夜のけしき山居の淋敷體なり鳥の聲とこしなへにたえずきこえて人聲なしといふ意也庭の面門はむぐらやとちぬらんむぐらは菴の字にて草の名也しげりて人跡稀なる意なり朗詠文選の詩に見えたり

一日蓮山入の文しんしやうが月を荷ひじやくまくたるそんかうが雲をおふ晋祥は月の光を請て書を讀み孫康は雪の光りにて學文す先賢傳に有り寂奠は淋敷靜なる意なりひめもす一乘論談の終日法華經の義を論じ講談せらるゝといふ義なり
一山椒太夫粟の段文のうち此日の本をぞくさん邊どいふぞかし粟散邊土と日本をたとへ粟をちらせるごとくにたとへ小國といふ事也佛經に説けり秋津洲の内外日の本惣名なり内外の神の恵みぞどは伊勢の内宮外宮の御事なり
一 鶴の貸小袖文に霧は不斷の伽羅を焚き月常住のと

もしび朗詠に聲破ては霧不斷の香を焚き扉落ては
 月常住の燈をかぐぐといへる詩あり
 一 蟬丸三段目文にそうてんに光無く暗夜に灯火かげ
 くらしと蒼天は空にて光りなく闇の心日影も見え
 ぬといふ事はも對句にて月の見えぬ心也よしやざ
 いしやうざんげには無量のがうもはたすとかや罪
 障懺悔すれば無量の業もはたすとは涅槃貝文に委
 敷説けり

一 同道行いつを便りにたはさけん彼遍照がよみし杖
 は僧正遍照が歌に此杖は君のためにとつくなれば
 千年の坂もこへぬべら也

一 同逢坂山かつらばみのる三五の暮是は桂也三五は
 十五夜也しやしん思ひては山ふみの行法にて捨身
 と書也釋迦佛雪山童子の時捨身せんとし給ふ故事
 涅槃經に見えたり

一 同笠の段第一第二の絃はさくくとして秋の風ま
 つを拂ひてそいんのおつ第三第四の宮われ蟬丸が
 しらべも四つの折からなりける時雨かな琴の音に
 たとへたり故絃といふ松風にたとへたり第三第四
 の宮といふべきを返して第三第四の宮と蟬丸の御

身によそへて云四の絃とかかりて折からなりける
 時雨とたとへて下の句をおこせり朗詠に見ゆまさ
 きの桂は青つゝらは是は藤蘿と書いて草つるも也別
 に故事なしかわらぬ色といふにつけたり爰にて
 はくる人も知り給はぬと云にたとへたりばんじき
 をひやうでうにしらべかへ盤渉調水の調冬平調金の
 調秋皆琵琶の調子なり

一 同悟の段文に瑠璃を飾りつゝ垣に金花を立並べ戀
 興飾車の玉衣の透間の風も亦按するに繡綾蜀紗の
 玉衣の此下の章よろしきか飾車是は御所車を云ふ

一 同鐘の段文に哀別離苦の義利一首に三世をあらは
 せり此句蟬丸の歌の體をいふ行もかへるもわかれ
 てはのうた愛別離苦の義理をあらはすといふ
 一 抑此淨瑠璃は師匠の教の通り弟子もよく習ひよく
 うつせばよくうつり悪敷うつせばあしくうつる淨
 瑠璃にて誰が流といふ事なしづれも同じ様也淨
 瑠璃三絃共少しも相違なき節なり誠に十寸鏡の如
 く成ゆへ苗字を十寸見と改る也

一 助六郎の夜櫻手付此淨瑠璃は惣じて語りかた節事
 他事に不寄賢悪男女老若共音にて曲を語り分る依

て音曲と名付るなり角力物語をかたるにもその心
 を用ひ語るべし能音聲のもの向へよく聞かせんと
 俣野を美敷語り真田を憎く語るものありたとへば
 俣野は中村助五郎真田は市川門之助河津は大谷廣
 次此役者の心持を以て語るべし又帶引に會我五郎
 時宗は市川八百藏門之助朝比奈は中村傳九郎中島
 三甫右衛門虎は菊之丞半四郎是も心持同様なり外
 の淨瑠璃と違ひ江戸節は言葉なく音と節也此道に
 入らざれば分りがたき事なり外の淨瑠璃は老若男
 女の言葉を聲色につかひわけしゆへ能わかる也寛
 保年中延享の比迄は江戸操人形も江戸節にて興行
 あり夫より後は上方節となり今土佐と云るは土佐
 節なり肥前といへるは肥前節にて中の芝居は小薩
 摩なり是皆元は江戸節にて興行有りしなり
 一 淨瑠璃語りかたの口傳口明け建言廻し様也鳴神道
 行は心留りて一瀬川はかげも留らで編笠は言出し
 名跡は水にきたる禿万歳はゆづり葉清見は清見寺
 と名附つゝ家櫻は力草天皇忍千歳の枝灯火と酒中
 花にてはいづれの淨瑠璃にても筒様の類多し一か
 さねすいぶん心を附て語るべし

一 扱も其後は語り出しの口傳あり真草行の三つに
 語りわくるなり蟬丸神樂獅子道成寺は真也放下僧
 初午祭り和尚我は草也景清は行也と心得べし同じ
 よふに語るは心得違ひ也さなくとも其後と語る人
 もあり文字合す甚聞苦敷也扱も其後の根元を尋る
 に筑紫善導寺會下法隨和尚といへる僧あり此僧至
 つて音曲好にて上京の折から伏見に生佛琵琶法師
 といへる盲人ありしが心安く彼法師淨瑠璃の序文
 に心を勞し考へ居たる所へ參り合せ法師は何を考
 給ふやと尋ければ如此の仕合なりと咄しける法隨
 和尚暫く考へて真言宗の聲明又は引導のそれおも
 んみればのよふなる聲か成音聲しかるべしと教
 ける法師悦び其節を附し也夫より岩船瀧野澤角へ
 傳へし也兼て淨瑠璃は經文より出たり何淨瑠璃に
 ても初めと切りとは靜に語るべき也
 一 抑淨瑠璃の三絃始りは信長公の御時琉球國より始
 めて渡りし時に誰あつて弾ものなし將軍の仰には
 伏見の盲人琵琶の名人有此ものを召て仰付られ
 て御前にて彈ならし給ふべしと有り彼法師三つの
 糸筋を以琴廿五絃の音色を彈出しけりこの時將軍

大に感じ給ひ三筋の糸ゆへ三線と名付くいつの比よりか味の字を加へしは大なる誤り也とうしんをとうしみと云ふ類也世事談にも見えたり夫より三絃はやりて本調子二上り三下り淨瑠璃歌に合するなり且經文謠淨瑠璃も一體章と唱ふべきを節と唱しもとを尋るに流水破竹の形をもつて作りし也水は陸に流るゝといへども浪も打ち渦も巻く山川にては色々の音色あり又破竹は元よりうら迄節の長短あり又物を打込み二つに割時は色々の節の音有こゝを以て節と名付る也扱また節付の初りは或夜矢矧の長が娘天樂の舞といへる樂をはじめしに笛吹ものなく是非なく笛なしに初めける其夜牛若丸奥州下りの折から矢矧の里に止宿あるに頃は夏の熱き夜やはぎの橋の邊りへ納涼し給ふ折から天樂の音面白く聞えければ近寄給へば琴の爪音世に稀成音色を感じ御腰にさし給ふ蟬折の笛を取出して長が屋敷の垣の外にて天樂の舞に合て吹給ふ長が娘驚き是は天満宮の空にて合給ふらんと暫く琴を止めければ笛も止けりまた彈ば又吹出す垣の外誰かあらんと仰ければ畏み側に

うかへたる冷泉といへる女中月さよ十五夜といへる兩人の女を召れてしをり戸を明けて走り出んとせし所を側に有あふ竹をしをりて牛若丸を隠しけるにいつくの人にてありやと尋れども返答もなく居たりける長が娘御逢被成度山を語りければ牛若丸聞し召長が娘にいざ逢んと三人の女伴ひて内へ入給ふ此時より是をしをり戸と名付冷泉來りし處をセイセイシヨリト云節は是を以て名付る也三人の女おり立ち三重の踏段を下り來る處を三重と言三つ宛三三九ツユリなり又三人にて上り三つ宛九つユリ上り下りを二ツ合せて二九十八ユリを本三重と唱へ夫よりいろ／＼の三重出來る也カイドウと云へる節は六部の海道下りといへる念佛よりどりし節也此節には表裏ありタ、キといへる節は都にて鉢叩と云ふ物賣の唄也是より取りし節也何節といへる事は末に出しあり淨瑠璃と唱へ來りしは長が娘峰の樂師瑠璃光如來の申子也仍而淨瑠璃御前と名乗し也御會司牛若丸と深く馴染たる事を十二神をかたどり十二段につくる此時淨瑠璃御前の何段目を語ると唱へける夫より音

曲の異名となりしなり元祖は淨土宗筑紫の善導寺會下法隨和尚也全く經文より出たと見えたり夫より岩船夫より生佛琵琶法師又瀧野澤角へ傳へ夫より世上に弘まりしなり
 一二代目庄右衛門河東弟子に河丈といへる山の手邊に住居ありしが傳之助河東の頃河東二人ありしが名乗争ひ合ひ公邊に相成候處御上に係候ことも無之に付双方共に河東と名乗候ても不苦之旨被仰渡相濟申候仍て出入には傳之助負なりしが後は勝となり山の手金次河東二代目河丈と名乗り木挽町芝居も勤し也後瀧山町桶屋善五郎といへる者へ河丈を譲り廻國に出で行方不知善五郎河丈は今にあり初代より三絃岡安新次郎おなじく喜三郎鳥羽屋三右衛門今の喜三郎は二代目秀彌が弟子品川にて鐵右衛門と云ものなり
 一傳之助河榮軒より藤十郎の名を東作へ譲りけるとき河東方へ東作の名を返し藤十郎と改名の届をいだしける時右返答に評議の上忠次郎麩屋文次郎兩人を遣し此度改名之儀御届承知候得共東作に有之候は御出合可申候へども藤十郎にては御出合

いたしがたくと申斷是より河東と藤十郎破談となれり
 一傳之助河東死去の後本郷沙洲河東なる其後諏訪町蘭爾へ河東をゆづり東雲と改剃髪して暫くワキを語り傳之助弟子に茅場町宮原忠次郎河洲といひしが改て沙洲と改名す三代目藤十郎弟子藤四郎といへるもの藤十郎方を破談に及び傳之助弟子となり藤十郎への面當に東佐と成此者事幼年の頃は本所多田の樂師の居住たりしが大夫に成て吉原町に住居し五十歳之時駒込土物店に弟有此者方に住居を定め寛政十年の秋剃髪して夕丈と改め翌未年七十三歳にて故人となる同門鎌倉屋平五郎相應なる女郎屋なりしが是も東洲と名を改淨瑠璃語りとなり吉原町に住居し安永年中頼焼により日本橋檜物町に住し寛政十一未年故人となる
 一本郷平四郎河東弟子東爾といへる者神田佐久間町茗荷屋市郎兵衛と云し者也右同町に住居六十歳の頃吉原町へ引越寛政年中故人となり東曉といへる者は湯嶋切通し七右衛門と申ものなりしが寶曆年中古人となる東雅は出生本郷元町邊の者なり淺草

金龍山といへる餅屋へ養子に行きしが此所を出て後に淨瑠璃語りとなる惣右衛門と云ひし者なり明和年中故人となる

一 神田黙屋文次郎と云者渡世も成兼ね商賣仕舞河東弟子となる文爾と改名す名弘め兩國柳橋河内屋半次郎方にて興行名弘め淨瑠璃丹前里神樂也其時樂首にあたらしふやの文爾殿やれ大たんな人じやへといひしがあまり出来ぬやうに覺し也仕合に會花思の外集り夫を元手に酒屋をはじめ文爾の名も河東へ返し商内も繁昌し暮しけるが寛政年中故人と成る

一 淺草諏訪町忠次郎河東弟子傳藏といふ者同所三軒町の者にて河東養子と成沙洲と改名し伴となる太夫事は七十餘歳にて寛政年中故人と成後に伴沙洲事河東と改名す吉原京町四ツ目屋善藏と云者文魚弟子にて文洲といひしが忠次河東弟子と成沙洲と改め淺草御藏前釣竿屋利左衛門事同門にて東里と改め沙洲と成榮藏と云者樂爾と云しが後に蘭爾と改め善藏事寛政年中故人と成る

一 傳藏河東弟子なり新場に金七と云者茅場町の沙洲

が弟子にて傳藏弟子となり東爾と改め深川仙石屋庄五郎事同門にて東榮と改神田多町雁金屋安兵衛と云者寛政年中酉の年同門となり東和と改元祖山彦源四郎は出生相州戸塚在の修験の弟なりしが三絃懇望にて當地に出て木村又八弟子となり終に三絃彈となり世に名人の名を残す後に弟子孫四郎悴秀次郎に名を譲り二代目源四郎となる是も伴秀次郎へ名をゆづり髪を剃存候と改寛政年中故人と成る

一 文化四丁卯年八月廿日兩國柳橋河内屋にて興行源氏十二段淨瑠璃供養節付傳藏河東

一 女山彦二代目源四郎弟子中橋にてみつ新場にて菊清丈弟子淺草東仲町ゆふ同所田原町にてむめ

一 明神河良弟子赤城にて文志神田明神にて扇志

一 三代目河良弟子淨世小路にかね柳橋同朋町にうた淺草諏訪町つう

一 傳之助河東の頃寶曆年中中村勘三郎座にて助六の狂言を催しける夫より下稽古もはじめ候約束之處斷もなく伊勢參宮に太夫出立いたし二月下旬より始る筈にて看板等出し中村座より太夫方へ申來候

處右之仕合ゆゑ返事しければ中村座にて當惑いたし沙洲蘭洲へ懸合けれども不承知なれば無是非相止候様評議極り候處座元にては狂言も取組相止候事難義故依之半太夫へ相頼取極始しなり向後此芝居は河東相止め半太夫計と相談相極め其例にて中村座は半太夫計り市村座木挽町は河東勤に

なる
湯嶋切通し邊に平野氏といふ隠居異名竹雅と名乗此仁本郷平四郎河東の弟子也江戸節至て懇望にて段物等委敷覺へ能き音聲節間拍子三つそろひ近世の名人也寛政三亥年六月六十七歳にて故人となる

一 淺草御藏前片町大和屋太助次といふもの此道に入同門にて異名文魚といふ後には森田町代地河岸通りへ住居を極め是も能音聲にて節間拍子能語りし也寛政十二申年春七十一歳にて終に故人となる兩人共に近世の名人也

一 享保三戌年春市村座にて松葉屋瀬川に路考一川と云突出し女郎に路三郎此出端まつの内淨瑠璃河東ワキ沙洲東爾東榮東和三絃源四郎河良新九郎文次

郎文四郎相勤大當り

一 山彦宇右衛門作へ宇右衛門の名を譲りしが此者事少しの譯合にて破談に及びいろ／＼と身を勞しけれ共渡世も難成寛政年中忠次河東へ手を入和談也稽古所處々順講等へも出席いたしけれ共久敷打絶しゆゑ手も廻り兼ね間に合がたくそろ／＼と引退ける此後三河町邊に居候よし

一 明和年中の頃東海道島田宿川役人江戸表へ訴事に付罷出二三年も滞留いたし候時吉原町何屋とかいふ内にて座敷淋敷ゆゑ傾城にすゝめられ蘭洲源四郎を呼て江戸節一曲承り度由申ければ早速淨瑠璃始りけり彼役人市左衛門此淨瑠璃の行儀正しきに感心いたし終に此道に入り夫より河東弟子となり後に藤十郎弟子となり三絃は小田原町和蝶に習ひ後には彈語りせしなり和蝶弟子に安針町に和住と云者ありしが此者事は生山流の琴にて河東節よく合せ三絃もよく覺え彈きしものなり安永元辰年正月目黒行人坂出火之節類焼にて立行成兼ね上方へ登り申さんと同年出立ける此時嶋田宿へ行市左衛門方へ立寄暫く滞留いたしける内弟子

出来稽古いたし居ける也其後大坂へ登り天満の表門入口右之方にて江戸節を語り居ける寛政元年の春自分事大坂へ登り此處へ立寄けるに江戸節の聞ゆるに不思議に珍敷と暫聞し也淨瑠璃終て彼仁に對し旅宿へ尋來るべしと物語して歸りければ其夜旅宿へ尋來り此時前文の譯委敷承り夫より淨瑠璃二三段語り其後尋行ければ有馬へ入湯の留守也又其後尋ければ有馬より島田宿へ行しと也翌年五月島田へ泊尋ければきんといへる替女の方に同居し弟子も大勢有り又此處にて淨瑠璃かたりしなり珍敷事故書取置くものなり

一 東都にて長唄目利安諷ひ始めは鳥羽屋三右衛門也其後豊後節も彈始るなり三右衛門事後に東武専太夫となる唄は文五郎と云へるもの専太夫の三絃の弟子也東都に三絃弟子にならざるはなし唄の弟子松島庄五郎是は能く諷し者也後に延享のころ中村富十郎始めて下りし時坂田兵四郎といふ者召つれ下り執着といふ唄を諷ふ鼓唄と云ふはこの時より始るなり森田座にて興行大入也

一 隆達節は日蓮宗の僧なりしが泉州堺の顯本寺の院

内に住しける故あつて還俗し大阪藥種屋高山氏の家に入て商人となり常に音曲を好み小唄の流を唄ひ出す其唱歌やさしく人の心を和らけ教訓にもなりたり世に隆達節と稱す

一 古今節元祿の比古今新左衛門といふ芝居者諷ひ始るなり

一 道念節京都に道念山三郎といふ木遣り音頭有る真草の比盆の踊りに口説といふを諷ひ出したり此節踊りの拍子に能合たるなれば今以是をよしとす

一 都一中同三中岡本文彌宮小路國太夫桐山節是は元祿年中より流行出す

一 園八節新内節年號不知近年のものなり

一 京都に宮小路國太夫節芝居にて所作によく合し節にて今に捨らすはやりしなり弟子に文吾といふものあり元年中東都へ下り宮小路豊後太夫と名乗三絃相方は鳥羽屋三右衛門弟子佐々木市藏三絃手附は三右衛門也國太夫節の三絃は甚だせわしく東都にむき兼し故子供にも能彈るよふに手を付替せしなり其後加賀太夫數馬太夫杯とて同門ありワ

キを語る至てはやりしが所々にて色事心中欠落もの等數多有之ゆる豊後節御停止御觸被仰出御法度に相成止みけり其年中國米相場兩に八斗貳升の相場也落首に豊後米八斗貳升と觸られて儲をかむるか宮小路きめらと云し事あり其後豊後米八斗貳升ことの外世の中つまり困窮のもの多く有しと老人云傳し也夫故久々打絶しが後に京都寺町位牌屋文右衛門といふもの義太夫節を能語り江戸へ下り名を上んとおもへども名人共數多有之中中渡世には難相成とおもひ居る處に上方より一中と云者文右衛門を尋來る其時文右衛門は手跡の指南をして暮しける同居して一中にかの節を習ひ晝夜のわかちなく能稽古し至て懇望にて語り覺へしが音聲はよし夫より工風して佐々木市藏を相方にして義太夫一中豊後押交て語る是中興豊後節の祖なり近頃の名人也夫よりまたはやりてワキ語り志津摩太夫造酒太夫など其比は常磐橋邊に住居いたすゆる常磐津文字太夫と名乗し也此節事芝居にて道行其外所作事に能合し故今に繁昌也今の豊後

節かたりは勝手次第の名字をつく常磐津宮本豊名賀吾妻元來はみな宮小路なり是を名乗らぬは御觸を恐しか三絃も元は佐々木なれども今は色々様々の事を名乗取極りなき流儀なり

一 説經節初り年號不知延享年中の頃江戸又は田舎祭禮等に折節興行有太夫に天満萬太夫ワキ半太夫久太夫長太夫など有り三絃は盲人にて龍玄と玄達などいへる者あり人形は裾より手を指込み一人遣ひにて見合は今ののろま人形也古風成もの也隅田川荆葦杯段物の操見物致せしを覺へると老年の人は是を申傳る也いつの頃よりか相止み淨瑠璃は折ふし湯屋の貼札に見ゆる也

一 古近江作八聲といふ三絃に掛物一軸添へ三河町河良所持の處存生の節本郷日蔭町良波方へ可讓管之處少々故障にて太田様御屋敷へ上り其後安永年中に二朝方へ手に入ける也寛政十二申年七月古人とあり夫より讓受くべきものなく今は上野廣小路若荷屋方に所持いたしける後四代目河良へ讓る

元祖河東

乙 享保十歳
釋清西居士
巳七月二十日

俗名
十寸見藤十郎

二代目

甲 享保十九歳
妙屋紹音居士
寅二月五日

同
庄右衛門

三代目

乙 延享二歳
潭譽澄瑞信士
丑七月廿八日

同
宇平次

四代目

辛 明和八歳
一法圓諦信士
卯十二月十五日

同
傳之助

五代目

辛 安永五歳
曉照院遊山東雲居士
申三月十三日

同
平四郎

六代目

丙 寛政八歳
妙音院正山道榮居士
辰正月廿一日
極樂の道もあかるし梅櫻

同
忠次郎

十寸見河東代々石塔六代目忠次郎河東存生之内寛
政年中建之

本所牛嶋

長命寺

本三重	片三重	上り三重	本フシ	中フシ	中本フシ
下り三重	忍三重	天皇三重	イロ本フシ	シヲリ	イロシヲリ
甲三重	大三重	クリ三重	シヲリカ、リ	ヤツシシヲリ	カイトウ
カハリ三重	イロ三重	ツリカチ三重	ヤツシカイトウ	ハルカイトウ	二ジヲトシ
ヲカサキ三重	スカッキ三重	獅子三重	ヲロシ	ウハル	サワリ
別レ三重	切合三重	ウレイ三重	アイチウ	ナカヂ	ナガシ
山入三重	半ユリ	七ツユリ	クドキ	イロクドキ	コウワカ
本ユリ	ユリステ	ユリアケ	ゴサイフシ	カドセツキヤウ	カソエウタ
三ツユリ	ユリツ、ケ	ユリカエス	上コトバ	テコトウタ	ツ、ウフシ
イロユリ	カハリユリ	マハシユリ	ウサイ	シバカキ	マイカ、リ
ハツミユリ	ヒヤウシユリ	ウレイユリ	一中	三中	ゲキブシ
キリミユリ	ハコビユリ	ツ、ケユリ	トサブシ	文七ブシ	コトウタ
ヤツシユリ	ヒツトリ	レイセイ	キリヤマ	ナゲブシ	ドテブシ
ツ、ケヒツトリ	ヤツシレイセイ	半レイセイ	エイカン	コウヲクリ	ヲクリ
レイセイカ、リ	本アマイト	ヤツシアミト	タ、キ	下ハシル	中ハシル
カハリレイセイ	アマイトカ、リ	本ムスヒ	マキアゲ	モミダシ	ナヤシ
半アマイト	下ムスヒ	イロムスヒ	トリライ	ヤブシ	ノル
アヒムスヒ	ムスヒシヅメ	ギンムスヒ	カ、ル	ヲトス	シツム
ヒロイムスヒ	イロジ	ツナギジ	ハル	カンギン	ウク
ノリジ			イレル	ランド	カ、リ

カサイブシ フトリブシ サイツメ
 サイモン フチウタ フトシ
 カタクトメ ウレイ スユル
 三ツビヤウシ カマカンブシ シキブフシ
 ヨセル カハサキヲド ウタガ、リ
 平家ガ、リ ランビヤウシ コムロブシ
 フシチブシ アイノヤマ ロウサキ
 ツバラヲリ

カンザレイ ニジチトシ
 我玉のをもない竹の ゆるさせ給へと計にて
 イロツ ウレイ
 神の雛をこへぬるも いたはしかりける次第也
 イロ本フシ ウタイ
 よみしも今は身の止 松にことゝはん
 カツエウタ タ、キ
 一ツとや一ツ臺に しやうじやひつめつ
 平家カ、リ カ、ル
 宮樓高く立て風 空恐しき月
 牛ユリ ユリッ、ケヒツトリ
 軒のしのぶにうつろい 夏ころも薄き契り

本三重 片むきおく霜も
 テコトウタ つゝれさせてふ
 片三重 行末の萩か下枝も
 下ハシル 我身にけたぬ色
 ハヤムスロ けはひさか
 ハル本フシ 文に宿かす
 ハル本フシ 賤がうみその
 ツキユリ 御代ながら
 ナガアシ 初音おしるん
 ウキチンフシ 縷子のきざはし
 上ウタ 男や禿の
 上ガ、ル 岩根におふる

クレイユリ
 いと物すこき折から
 ツナキ
 八千代祈るほふり
 ナツシカイトウ
 ほろとなひたは
 中ムスビ
 なかれかし
 下ハシル
 知人ぞしる
 本フシ
 紫立し
 本アシト
 千代の
 本フシ
 時しも秋の
 カハリユリ
 みつぎもの
 中キンナカザ
 夜はすがらに
 カハサキチント
 廻り燈籠の
 カアリムスロ
 みちひかわらぬ

ツクカチ三重 月と花との
 イロムスビ 仁義有り
 ハツミユリ 顔かくす
 ツツギ 七種なつな
 エイカンブシ 雪ころはかし
 カ、ル 忽一ツの嶋をなす
 カサイアシ 八聲をつげの
 クドキ さなきだに
 上クトキ 上クトキ
 かねなでのこる
 中ヨセル 元より慈悲の御方便
 イロ三重 元より慈悲の御方便
 かきは能こそ
 イロサ 實忘草忍草

ウダガ、リ 洩るとめきの
 ウダガ、リ いかにも男じやる
 チンドカ、リ 千代の契りの
 チンドフシ 参る薬師は
 イロツ 知る人もしらぬひの
 カサイフシ 砂の色も金にて
 マイカ、リ 此御神の其いにしへ
 イロクドキ 夜の鶴の空を
 コムロアジ 朝の出かけにや
 上コトハ 雀海中へ入て
 ナケリ 星の契りに大磯の
 イロクドキ 道踏分けてはへ際の

カ、ル よきにはからへ
 ヒロイムスロ かわゆさは
 イロ 李下に冠を
 レイセイカ、リ 我梳髪も
 エコトハ 上蓋の扉開けし
 チクリ なりやせんいとゝ
 エリカエス 手向草桔梗
 カ、リ三重 大井川
 中カイトウ いか計ふく
 ユリステ 浦千鳥沙の
 本ユリアケムスロ 千方行袖の
 ツマラチリ ひとの見るくひ

アミトカ、リ 氷や増らん
 ヒヤウシユリ 鶺鴒の
 カ、ル 堅い男に和らかな
 アケムスビ 氣にいらぬ
 本フシ おろかやとわに
 チンドガ、リ 其なりひらの
 三ツビヤウシ 稻光り成亥涼敷
 チントヤツシ 顔を隠すの調法は
 エリアケ 紅葉のぬせきに
 ヒツドリ 千方に見ゆる
 ロササイ 一筆書て送り
 クリアア三重 いくとせの

軒端の梅に
 コウワカ
 徳若に御萬歳
 カハル
 なちよの翁も
 ナカス
 翁とふく
 カマカミフシ
 千秋萬歳の
 カハル 中シヌメ
 ろかいの拍子
 ハルカイトウ
 天下泰平
 ナカサ
 秋より先にならず
 セツユリ
 三ツ葉四ツ葉に
 シチヤツツ
 かはさくら
 マイカ
 雪花がふるはの
 マイカ
 いさやあしを

すわまに池を
 コウワカ
 平家ガ、リ
 山かくは峨々と
 平家ガ、リ
 夫遠寺の鐘の
 平家ガ、リ
 三千世界は
 文セフシ
 是の御庭に池堀
 ナロシ
 國も豊に
 カイトウ
 廻るぐるく
 ナロシ
 高砂の尾上の
 ナガサ
 聞ん便の封文
 ハシル
 横雲しらむ
 上方フシ
 父戀しやと
 フチウダ
 白鷺は迎に來たか

つら憎や
 イロユリ
 上イロ
 ひたりともへに
 下ムスロ
 あちらむき
 文セフシ
 中よいとしの
 ヤツシビツトリ
 茶屋あつらへは
 ヤツシレイセイ
 とりなをし
 ハシル
 曾我菊と浮名
 レイセイヤツツ
 すいてほどいて
 シバガキ
 いらぬ女郎の力業
 牛ユリヤツツ
 むすこはせい高く
 上ヨドガ
 女にあまんの布
 シツユリ
 初日がいやく

人目忍ふのすき
 イセチンド
 エリステ
 おさへられては
 サイモン
 廻らぬ女郎の
 ヒロイムスロ
 ふところは
 半アマト
 髪にかゝれば
 ハヤバシル
 結ぶの御床入
 シチヤツツ
 鐘は寐よとの
 シバガキ
 戀草よ
 ハヌム
 折々事の
 キリヤマ
 三番むすこは
 フシツナキ
 しやうかこもくたる
 本三重
 たそやく

三河にかけし
 ヒセンフシ
 キンムスロ
 東路や
 三申ツシハシル
 さすが都の人とて
 ウレイユリ
 りうていこがれ
 イロクドキ
 君も花とや
 ツミツタ
 大一大萬大吉
 コウワカナガシ
 熊谷と名乗
 ゴサイフシ
 木曾のみさかの
 ウレイユリ
 はらくはつと
 ムスヒジツメ
 春霞
 ユリカケ
 かわらぬは
 カハルレイセイ
 袖や秋のほひ

扇流し砂流し
 サイツム
 カレ
 かたのことく
 三申ウレイ
 日照の櫻色
 本ユリナヤシ
 大慈大悲の口櫻
 ツミツタ
 春前に雨有て
 下ムスロ
 待乳山
 ヒセンフシ
 御つれくの
 カドセツキウ
 扇けふとき
 ヒセンフシ
 渡れば千鳥立
 大三重
 別れくに
 ユリステ
 互にそれと
 フシハシル
 りんきねたみの

しきみつむ
 シキフシ
 カハルレイセイ
 契りし霽も
 平家ガ、リ
 山は八よふ
 コウワカ
 和光のひかり
 ヒセンフシ
 あすは元より白玉
 ツナギガ
 幸手かへらぬ
 カハル
 皆面々に
 チロシ
 飛入ける
 中本フシ
 我身の上を
 マラシ
 けふくそ
 中ユリヤツツ
 おもひ出たり
 上ムスロ
 錦を括る

花の色ませに
 大マハシ
 レイセイイカ、リ
 清見寺と名付
 ツキユリ
 田子のうら
 シチリカ、リ
 袖は清見が關
 ヒセンフシ
 昔が今に
 ハヤ三重
 茶臼の廻る
 ウレイユリ
 船底ひれ伏
 ノリ
 思ひ切たる事
 中ユリヤツツ
 思へばく
 ヒセンフシ
 人や詠めん
 クリ三重
 天津空
 ウレイシチリ
 い、や我ながら

浮世の業や
流しと
嵐そと
はん忍いは
鏡はづかし
残るらん虫の音
朝比奈も時宗も
ここがる
流の身
灯火の
綱手かわして
入相もいつの

月は迎も
うしとや
大磯の鐘は
袖の雪
秋の月
せきばぐたる
門の破りし焚燗も
目にも餘りて
かしこは儘よ
分て山路に
灸によい目と
花になく

大ナガシ
土井の次郎
くるゝものとは
なよたけ
ニツかしらの
吉といふ字と封文
秋やこきふの
雪のなつなは
言の葉そや
合の障子を

イロユリ
二ツに割て見せたき
縁の空も
しんきしの竹
片山里に
波るゝにけ水の
道成の卿
淀の川邊に
黒髪
水揚蝶

一瀬川
濡浴衣
虎少將道行
牛ユリ
水調子
扇八景
いの字扇
家櫻

山椒太夫
竹馬
伊達娘道行
常盤の聲
禿萬歳

牛ユリカ、リ
京童
千歳の枝
廿日の月
ぞけり

口舌の鶏
松の後
こそけれ
利けり

壯年の頃より此道に心を寄て東の間も忘るゝことな
く師にたよるといへども愚にして人並にも成がたく
せめて水の波打音の邊り竹の節間のわたりたる敷を
わづかに尋心をなぐさめんと日々夜々其奥意を聞し
てわづかの草紙にかくは作るなりもはや七十次にも
なれば世をのがれんとし月の去たしき名にまかせ形
身ともならんかと玄めしゝは是まで心を勞せし
輩も古人となりければ此道の事尋る人もなく絶なん
こと餘り歎かはしくおもひ後の人のたのしみ亦は
餘の人に聞れあひさつもならんかと書おくのみかな
らずしも餘の人にみせられんことかたかくことわりは
づかしむるのみ
なには是みちかき長し節の間も
あはて此世へへた名のこれり

文化元年甲子五月

柳園

三座家狂言并由緒書

猿若

新發意太鼓

中村座

歌舞妓狂言街道下り

市村座

佛舍利

森田座

中村座 家狂言

猿若

大夫

中村勘三郎
杵屋喜三郎

一罷出たる者は杵屋の何某と申て大名でムル某が召仕に心きいたかしこひ者がムル彼が名を猿若と付てムル中へ面白者でムル此間いとまも乞す伊勢參宮致した戻たならば急度異見をくはよふと存るエイ

ト「ワキ」笛の座の方へすはる

歌

「初春や君が小袖をきそはじめいろづき
やもつと奥山の猿若もいとわんざくれ
はいと心のかれ猿若

ト「シテ」柱の方にとまり

一是は今日の猿若ですまことに一夜ひらいてムればどこもかしこもにぎしくとした目出度い春でムル爰に私のたのふだお方は杵屋の何某と申お大名でムル此間断りなく伊勢參宮致してムルが定てお待

ちかねでムらう急で參ろうエイ／＼定めておたのしみ好きでムればお咄しのたびには思召出し遊さるゝで有ふエイ

ト此内舞臺を廻りながらもとの「シテ」柱よりかゝりて中ほどへ來て參る程に是じや

トあをむき門を見る思ひ入
久しく見ぬ内に御門の御普請があつたかしてどこもきらびやかな事じやどりや參ろう

ト門の内へは入ろうとおもひ入レして
イヤ這入られぬたのふだ御方殊の外ざれ深ふお入被成ばめつたに這いられぬどうぞあなたを笑はせ申ム、しよふが有そふな物じや

ト思案をして
ヤア有ぞ／＼聲色を替てやろう
ト扇を左りにさし思ひ入

物もふ
一表に物もふと有ルたれぞ出よやい珍齋はおらぬか徳入はいぬかたれもいぬそんならおれが自身いかずばなるまい

ト表の方へより
どふれ

ト「シテ」太鼓座の方へよる「ワキ」あたりを見
て人なき思入レ

今の物もふは何處にも居ぬ是はそゝうな隣やしき
で有たそふな

ト「ワキ」座の方へ行かふとする「シテ」左りに
扇をかきし足にて拍子をとる

一ものもふ／＼

トせはしなく云ふ「ワキ」びつくりしてこけな
がら出て

一扱もきびしいものもふじやどふれ

ト「シテ」太鼓座へ又隠れる「ワキ」方々を尋ね
ながら上下をふるふ

どふでも聞たがへじや
ト行ふとす耳のはたにて「シテ」大きな聲にて

一物もふ／＼
ト扇にて顔かくし跡じりしていふ「ワキ」きも
をつぶしみをふさぎ雷のやうにおもひ入
して手をとる

ワキ 一まづ目に見へぬ物もふお通り被成れい
 シテ 一それへ通り升ル程の物もふでもムリ升せぬ
 ワキ 一シテ又どこでお目にかゝり升ふ
 シテ 一お臺所のお釜の前でもちよつとお目に掛り升ふ
 ワキ 一ハテげすばつたものもふかな
 シテ 一物もふくく
 ワキ ト「ワキ」びつくりしながら「シテ」と顔を一寸
 見あはせ「シテ」橋がゝりへかくれる
 ワキ 一ハテ聞へたいつもの猿めじやなぶつてくりやう
 ト手をだし犬を呼よぶに
 こい〜
 シテ ト「シテ」そろ〜「ワキ」の方へ行「ワキ」小聲
 にて
 表にたれもいぬか
 シテ 一表に馬やのり物侍は八人大將共に九人
 ワキ トひぢをはりしさいらしくいふ
 シテ 一ハテしさいらしい
 シテ 一龜井がのふだる盃を武藏坊へとおさしある

ワキ ト舞の拍子「ワキ」も拍子をととりて
 シテ 一扱其次の盃を何方へおさしある
 ト同じびやうし
 シテ 一ヤレこわやそれは知りませぬ
 ト「ワキ」の鼻へ扇にてしつべいを當る
 ワキ 一あいたく
 シテ ハ、ハ、ハ、
 ト笑ふ
 ワキ 一あいたく南無三大名を鼻くたにしたそれへ出お
 ろふ是見をればなの穴が一ツになつた惜いやつの
 八幡ゆるさぬぞ
 シテ 一ハアあやまり升た
 ワキ 一ゆるさぬぞ
 シテ トいふ内「シテ」「ワキ」の顔を見ながら
 シテ 一もしやつぱり二ツムリ升ス
 ワキ 一何所に是見をれひとつに成た
 トゆびにていろいろいはらをたてる
 シテ 一はて扱二本のゆびで御ろうじませ

ワキ 一とりや
 ト二本のゆびでいろいろ
 シテ ほんに二ツある
 シテ ハ、ハ、ハ、
 ト大きに笑ふて
 何を御意被成升やら
 ワキ 一こりや〜此間はおれに隠して何處へいたぞ
 シテ 一こせんにかくしまして伊勢參宮いたし升た
 ワキ 一なんじや伊勢へさればこそ定めし道中は面白かつ
 たで有らふな
 シテ 一おもしろいだんではムリ升ぬ先は御威光をかり升
 て乗かけをきらびやかにかざらせ升て其上に三ツ
 蒲團どんすさやちりめん
 ワキ 一菰むしろはしかなんだか
 シテ 一何をおつしやり升スやら
 ワキ 一して〜どふじや
 シテ 一其上へ私がしやんと乗まして
 ト馬にのりしおもひ入

ワキ 五十三次をじや〜と参り升る
 シテ して〜
 ワキ 一そふすると前がはに美しいよねどもが
 シテ 一こりや〜其よねとは何の事じや
 ワキ 一よねはお知り被成升ぬか
 シテ 一いやしらぬ
 ワキ 一もしよねをお知り被成升ぬか
 シテ 一い、や知らぬ
 ワキ 一もしよねとは女郎の事でムリ升ル
 シテ 一ム、よねとは女郎の事か
 ワキ 一ア、イ
 シテ 一成程是で船まんぢうのいはれが知れた夫からどふ
 じた
 シテ 一其美しいよね共が赤前垂に赤手拭小妻をしやんと
 かつてあなたの方へしやなら〜
 ト女のまねをして
 シテ 一こなたのかたべしやなら〜とまらんせいとまら
 んせい奥も廣ふムんす相宿もなし居風呂の湯もわ

いで居升スコンナア馬士衆其馬をこちへ引こまん
 せコレナア馬士衆コレヲ、つらにくなど、申ます
 一おもしろい／＼そんなら其よねどもが赤前垂赤手
 拭小づまをしやんと取て

ト女のまねをする

シテ あなたの方へしやなら／＼

一是はならぬ／＼

ト鼻をつまみ扇をあをぐ

一こなたの方へしやなら／＼とまらんせいのふ／＼

奥もせばふんすぬるい居風呂もありくさつた飯

もムんす

シテ 何を御意被成升ル

一ハ、ハ、それからどふじや

シテ それから其美しいよねが

トいはふとしてやめ

一もふ／＼咄は是きり／＼

一これそれからあとがき／＼たい

シテ それからあとは

トいはふとして

イヤ申升まい

一是／＼夫はどふじやむまい處へきて跡をきかさぬ

は情ないちつと咄すもたんとはなすも同じ事じや

咄せ／＼

一咄しとふはムリ升れど咄したら跡では浦山しう思

召升う

一そふいふ程聞たいどふぞはなせ／＼

一そんなら咄升ふその美しいよねの中から我らへこ

とばをかけたじや

一面白イ／＼その言葉はなんと

シテ 一もの

ト手を引「ワキ」と脊なかをあはせ歌にてのく

「ワキ」こける

歌 「ぬしはしらねど格子からちよいとまねく

しかもかの子のずんどふり袖がちよひと

まねく

ト「ワキ」せうきにかゝり居るを蹴る

一あいた／＼

シテ ハ、ハ、ト笑ふ

一あいた／＼一度ならずした、かなめにあはせたそ

こへ出おろう

シテ 御ゆるされませう

一八幡きかぬゆるさぬ

シテ 一あやまりました

一憎いやつの

シテ 一したか夫にはよいまじないを習ふてさんじました

一口ごうせうなやつではムルサア覺へたらまじない

おろう

シテ 一然し此まじないは私が唱へ升ルが其跡をお前様も

おつしやらねば直らぬ事がムリ升ルがお覺へ被成

升か

一何といふ事じやいふてきかせおろふ

一扱もきついお腹立かな私がわになれ／＼と申升ル

と御前には何わになれやと御意被成ぶんの事でム

り升ス

一そふいへばなをるか

一たち所にふしぎが見へます

一然らばはやうまじないをろう

トうしろをむく

シテ 一何處でムリ升ル

一こ、じや

ト腰を顔へすりむける

一ハテふさならな

トはかまごしをおして

一愛でムリ升か

一あいた／＼サア／＼まじなへ／＼

一かしこまり升た

トふりばな拍子にて

わになれ／＼

一何わになれや／＼

一も一ツかへしてかたわになれや

トまたふむ

ワキ
一 あいたくもふゆるされぬこへ出をろうこへ
出をろう

シテ
一 ハ、ア

ワキ
一 じつゆるされぬ出をろう

シテ
一 是は不調法御ゆるされませ

ワキ
一 手打ちやなをろう

シテ
一 ハア、

ト いふ「ワキ」シテ「の顔を見て

ワキ
一 馬鹿めうそだは

シテ
一 うそでムリ升ルか

ワキ
一 いかにも

シテ
一 ハ、ハ、ハ、ハ、

ト 兩人笑ふ

ワキ
一時に夫から跡のはなしが聞きたいどふじや

シテ
一 何が夫から岡崎の橋にかゝり升ルと橋普請じやと

申て山からは材木をおろしまする川からは綱を引
上げ升るその上に音頭取がしやんとのぼつて

ト 扇をひらき

ワキ
おもしろふおんどを取たでムリ升

シテ
一 してくそのおんどは何と

ワキ
一 ものと

「くしのくん車にわれが思ひをぶんのせて
何とひくにもひかれまいよエイさらりな
に程引ともひくにひかれぬ我が思ひ

引物にとりては山でひくは材木川で引くはあみの
手車に綱をひつつけてエイさらりくエイさら
くエイさらりまたも引ものなげ頭巾にて合方お
ちやをひく小歌にのせて三味をひく

ト 此内拍子をとりにいふ

「おんど取は猿若うたにそろくかんもあ
る吉田兼好法師がおしへにも下戸ならぬ
こそおのこはよけれとつれづれ草にもか
かれしも我は君ゆへ心が亂るゝみだれ
くて心が亂るゝみだれくて君にふつ
つと捨られ申たよなんぼうにうらむまじ
くやむまじおふくそれあらうらむまじ
實に二世や三世と契りし中をふつゝりは

つたりすてられた

シテ
一 また引ものは猿引がおじやつて面白ふも舞せた

「猿は山王まさるめでたやおとるは手元た
ちみむまやはしの駒はきぬまきそだち小

石小川さほのみなみ南おもての泉水廊

下万里の間は恵方たり扱こ船のおん手

を見ればこがねのろをかけ十二の唐子が

はらりくとうては八ッ拍子そろふたり

吾妻下りのとはもたじなくあらしふ

けどいややさらにおもふさらにおもはじ

しと申はすみくすみよしやまたふげ

ん文珠のめされたりや

シテ
一 のりたりや猿若はやしたりや君たち

「天竺のあまの河原で細布をりて着せまい
らしよく

シテ
一 さてそれよりも

ト 是より五段の獅子鶴の舞いづれも傳授の三
味線相かた終り「ソキ」をせうぎよりふさに
て呼出しふさにてつかふ扇にて鼻の寸を
りきもをつぶす思入又呼鼻毛をぬく相方を

はる

ワキ
一 おもしろいく猶此上は目出たふ盃を汲かはそふ

シテ
一 まいれ

ワキ
一 ハア、

シテ
一 まいれ

ワキ
一 かしこまりました

中村座 家狂言

新發意太鼓

太夫

ツレ 柞屋六左衛門
シテ 中村 明石
ワキ 柞屋喜三郎

一 是は嵯峨の邊に住ひ候僧でムル若ひ輩樂を好てたのしみにいたすとわい太鼓が殊の外管絃の内でもひとしほおもしろふムル寺にも持てムル今日は山一ツあなたへ音樂の稽古に參る此間より召抱へたしんぼちを呼出し留守を申付ふと存る新發意はをるか

シテ

ト「ワキ」の前へ出る

一 幸ひ〜今日は音樂の稽古を聞に行程にすいぶん留守を大事にせい

トたつ

取分いひきかするは客殿に置く樂の太鼓は存る通り秘藏なれば急度番をい〜つけた必ずねぶるまい

シテ

一 お氣遣ひ被成升るなか様な事の有ふはしかけさおそふ目がさめ升た是では五六日ひらき詰にひらいてもびつくりとも致し升せぬお氣遣ひなされ升な

一 それは重疊な事じやいてこよふまつていよ

一 おあんじ被成升ルな

ト「ワキ」少し跡へよる「シテ」見送てげこのらく寢樂どりや一ツすい致そふか

ト寐よふとする「ワキ」すつと出て

一 それ見をれ詞の下からそれじや

一 是はおまへの心をひいて見たのでムル

一 たわけもの夫はをれこそ汝が心をひかふため隠れもした夫では心もとない

一 はて寢入たらたれぞ起しませうはさ

一 たわけものめがおのれをたれが起そふ

一 いやよいおもい付がムリ升る

トたいこ座の方へ行細きしゆきんを持って出太鼓のばちへ付け上へかけあたまへく〜しつけ

シテ

一 かよふ致し升ル

一 それは何とした事じや

一 此しゆきん太鼓のばちを付ましたは私が眠りをさます工夫でムリ升ルハ、

ト笑ふ

一 何を聞ふと儘じやなんのそれが目がさめるものぞ

一 そこでムリ升ル私がいねぶり升ルとおのづからあ

一 たまが下り升ルそこで太鼓でとまり升ル留メらるるたびに

一 おのづから目がさめ升ルなんとよい思案

一 でムリ升ふ

一 一段と出来たものはけいこじやねぶつて見い

一 かしこまり升た

トあぐらをかき

一 これからねぶり升ル

トねぶる眞似をするたいこのつなでとめる

一 是で目がさめ升ル何とよい智恵でムリ升ふが

一 あつばれかゝる智恵のあるものを遣ふはおれが身のくわほうじや随分留守を大事にせよ

シテ

一 かしこまり升た

一 い〜つけたぞ

ト舞臺の中へかほる

一 扱々發明なものを遣へば心もゆるりといたすいて

一 參ろうエイ〜

ト「シテ」表をのぞき見ている「ワキ」エイ〜

一 といひながらはいる

一 もふいなれたかしらぬまでヤアモウしろかげも

一 いつかな見へず大切な樂の太鼓の番きつとせうが

一 夕邊はふすまひとへとなりで經をやられるので寢

一 られなんだが眠らねばよいがどりやねむたさまし

一 に經をよみ升ふこや〜其こや〜

トよむ内ねむるつなできもをつぶしあをのき

一 きやうをよむ事二度あり

一 是ではどふも眠られぬ和尙も今は歸るまい寐よふ

一 かいや〜きつとばんをしませふ

ト太鼓の方を見て見ればあれに和尙のうたゝねでもいたされたるか

木枕が有ヤ寝むい時枕を見れば月雪花よりはまし
て戀しい中く和尙の今は歸るまい此しゆきんも
とつてしまひ五十年の榮花を百年にしてくりやう

ト枕をとり舞臺先へ出て思案して

イヤく折角の言付じや寝られ升まい此枕がある
からじやいつそ捨升せふか

ト舞臺先へほふり又寝むたき思入

「せんかた枕に取あぐるぬしはたれなりや
さゝのはり枕くのぬしぞゆかしかりけ
り其ぬしぞゆかしかりけり

ト枕をして太鼓座の前に寝るはしがりより

「ツレ」出る

ト扱も此ほとりに仕居する心も直ぐにない山だちで
ムル

トさいを投るふりをする

此間はついでに仕合もいたさねば難儀致す嵯峨の
へんにある僧の秘藏されたる樂の太鼓は万金にも
なる樂器じやと承つた今日も留守の様子と承り唯
今から参りばいとろうと存るエイく首尾よふ盗
みあふせればよふムルが彼が召仕にしんぼちがム

ルがおかしげ成ルやつと承つたもし留守にをらば
酒をしいて寝せうとぞんじて此ごとく持参いたし
た

ト扇子ひらきみせる

このせりふに舞臺を廻りながらいひて「シ
テ」柱のきはへ来て

とやこふいふ内にこゝじや

トのぞき見て
イヤたれもいぬはイヤく見れば誰かをるそふな

ト「シテ」を見付る「シテ」寝がへりをうつ

「いやお經は氣がつきるぞ
ト南無三寶お經が氣がつきると云ふそふな暫くまち
ませう

トしあんにして

イヤ寝言そふな

トさし足してはいろいろとする

「これはどふもく寝むたい事じや

ト寝言をいふ「ツレ」びつくりして飛のき

「もはや寝ていらぬといふそふなこれへ出たら此

ついで

ト扇を出し

打て打すへてくりやう

ト思案して

是はしたり今のも寝言そふなこんどはおもひきつ
てすつとはいろいろ

ト太鼓を見つけ

嬉しやあれに太鼓が見へるいつさんに参ろう

トつかく太鼓の方へ行「シテ」の足をふむ

「あいたく是は寝らるゝ物ではない夢かしら夢に
してはいたい夢じやたれぞいるか知らん

ト四邊を見る「ツレ」逃て外へ出る「シテ」吃驚
して

今のは猫か知らぬ猫ならば大きな猫じやしかし猫
が踏ではア、いたいはづはないへきこへたこれ
は和尙の留守をそまつにするばちと思はるゝ是か
らはきつと心を改めて番をいたそふ

ト太鼓の前へすはりきつとして居る

「ヤレおそろしやびつくりした見て所がきやつはお

ろかそふにみへる口車にかけてだまし取に太鼓を

盗もふと存る此なりで這入ては驚きませう何某の

風に似せ〇ものもふ案内

「あんないとは何者じや

トイヤくるしふない物でムル

「そちがふてもこつちがくるしい和尙は留守じや
いなしめせく

「是は和尙とは格別のなじみおんがくの友の何某で
おじやる

「成程聞及んだ名じやがめつたに通されぬ

「あんじまい和尙の使に來たのじやこゝをあげては
やう入をれ

「なんじや和尙の使に來た

「いかにも

「使でもめつたにならぬさりながら様子を聞てやろ
うなんといふ使じや

「留守を大事にする所は一段でおじやるさればこそ
師匠も不便におぼしめして召上らるゝ酒の内を新

ぼちにおませたいとの事ゆへ持参したなんとおのみやるまいか

ト此内「シテ」にこゝ笑ふ

シテ それは何より嬉しいが偽りでは無いか

ツレ しんぼちかけて違ひはないぞ

シテ それならば氣使ひない

トふうじめきり〜と戸を明る思ひ入有

ツレ やれ嬉しや〜

シテ おれも嬉しいサア〜酒をおだしやれ

ツレ はてせわしないまづまたれい和尚のことづてがあら

シテ はて和尚もへちまも跡の事酒を出さしめ

ツレ やれせわしないそふいふ氣では和尚の言れたとふ

ツレ りるすのうちは眠つたで有ふな

シテ いくつかな眠りはせぬまばたきもせぬわい

ツレ それはあつばれじや然らば亭主役に呑で

ト扇を盃にして呑ふとする

シテ ア、これめつぼうな和尚がいねば留守をあづかる

おれが亭主じやおれがはじめてやろう

ト「ツレ」の持たをひつたくり扇にうけてのむ

ツレ さても氣儘な酒じやどりやさせ

シテ 何じやおさへた忝い

トのむ

ツレ 我計りたのしんでおれには見せて置かこつちへおこせ

トひつたくりのむ

シテ それは我がの我儘じやこつちへおこせ

ツレ イヤこつちへおこせ

シテ こつちへおこせ

ツレ ア、酒がこぼれるは中よふして酒を呑ふまあしづまれ

ト盃を兩方の中へ置く

シテ 一どこにおれがのむまいといふ此様な肴のない酒で

ツレ さへ呑ものは肴が出たらたまるまいぞ

シテ 一なんぞ肴はないか

シテ 一どふかしらぬわい

トひんとする

ツレ イヤこふわれとをれがあらそふていては果しがつかぬ是から肴の代りに秀句を云ながらたがひ違ひに呑ぶ

シテ 一是は面白かるふ我は何を秀句にいふぞ

ツレ 一おれは肴の替りなまくさひものと精進もの料理に

よそへて言ふぞ

シテ 一こりやおもしろかろう

ツレ 一して又しんぼちは何を秀句にいふぞ

シテ 一おれはつぶりだけて草木で秀句を言ふ

ツレ 一よかろうマア我からいへ

ト盃を側へ付出す

シテ 一合點じや橋の諸兄柿の本の人丸山邊の赤草と呑ふ

ツレ 一出來た大友の眞鴨藤原のかたいたるかの大いし

シテ 一もちのやま丸さかな上の田村丸と呑ふ

シテ 一猿若の猿すべり藍の仲丸在原の柳平文屋のやす稗

木のつらゆきおふち柑子のみつね海松の忠峯坂上

のこけのり

ト呑む

ツレ 一相馬の鱒かど米かみを俵藤太たいのまんぢう渡邊

の源吾鮎さかなの金時葛井の定光下部の椎たけ八

幡鱈を鱈の次郎鱈の三郎珍膳八郎武藏坊辨當

ト此内兩人そろ〜酔ふて吾廻らす

シテ 一竹の深薮きの友則き藁のともすけ藤原の萩風山椒

太夫大なごんけいとうさんぎ竹むらいたいらのかれ

森みなもとのとりもち

トのむ

ツレ 一しそ殿の四天王むまいひぐち

シテ 一たでねいも

ツレ 一にしめたかなし

シテ 一あめのさだとう

ツレ 一佐々木餅つな掛草木は

シテ 一おの、小町

ツレ 一寝いる

シテ 一これ〜もふ〜

シテ 一おゆるしなされ〜

ツレ
一これさく

ト兩人共に寝る上幕より「ワキ」出る

ワキ
一げふの樂はばんせいらくがおもしろかつたイヤし
んぼちがまちなかて居るであるエイ〜是は門が
めてある發明なやつじや是では氣遣ひはないもど
つたぞ〜

ツレ
一南無三ぼうよはす〜とおれが酔たイヤ和尚が戻
たそふな先づ太鼓を盗ませう是は念をかけたそふ
ですきととられぬエイ〜

ワキ
一もどつたぞよ〜

ツレ
一是は折悪るふ戻られた新ぼちめにたらされたこと
にくし衣をはぎ升せふ

ト衣をぬがせ舞臺先を見て

是に和尚の着替の衣がある二色共にばい取ふ

ト「シテ」の衣をはぎ舞臺先の衣をとり太鼓座

へかくれる

ワキ
一もどつたぞよ〜

ト戸を叩かき金のはづれた体にて内へ入り

是はしたり錠がおりたとおもへばあけちらしてあ
るこれは

ト内へは入きもをけし方々を見て山だちの足

あとを見て

「妾が」ワキ（舞臺先）見へ是は新ぼちめが衣をはがれた南
無三おれが着替の衣もない憎いやつのをきよ〜

シテ
一おの、小松は出来たぞ有ふが

ワキ
一何をいふぞ

シテ
一しその四天王は出来た

ワキ
一こいつ主をたわけにするか

シテ
一たわけにするとはイヤ是は衣がない座敷も庭もど
ろだらけじやいつの間にお歸りなされたア、御ゆ
るされませふ〜

ワキ
一御ゆるされませふ所ではないけりやう秘藏の樂器

がぬすまれねばこそまだしもの事じや目通りかな

はぬ出てうせふ

シテ
一御ゆるされませう

ワキ
一出てうせふ〜

ト扇にて打橋が、りまで行打すへ「ワキ」座へ
行しやんとすはる

シテ
一是はながくしい事じや好な酒ゆへしたゝかな目
に逢ふたア、どぞ御機嫌の直るしよふ有ふ

ト思案して

能い事を思ひ出した彌生なかに都室町を通つた
時十二三の兒を見てあれはきれいなうまれつきじ
やとはめられた是を小歌にしてされかゝつて御き
げんを直しませふ

歌
一ぬがやりたや室町筋へとりやちがへて餘

のみにやるな花のかのりの手にわたせ

ト「ワキ」のそばへ「シテ」行顔を見る

ワキ
一あつちへうせふ〜

ト扇にて又橋かゝりへうちすへすつと来て元
の座に居る

シテ
一是はしたり又御きげんをそこねた兒の事を申たに
よつてじだらくものじやと思召たぞ有ふどうぞ御
きげんを直したいものじや

トしあんして

よい事がある去年の夏の頃歌枕のため富士を御ら
んなされに駿河へお出なされた一段と御きげんで
有た小歌がおすきでムれば此けしきを文句にして
うたふて御きげんをなをそふ

歌
一いなかなれども駿河は名所田子に打出で

鹽ざりとれば君にみ島とのきみにあわし

まの歌のみち

トまた「ワキ」のそばへ行顔を見る

ワキ
一あつちへうせう〜

ト扇にてうちながら橋が、りへうちすへもと
の所へ来りて

是におるによつて目にかゝる眠藏（みんざう）へ行ふ

ト笛の座へ来てすはる「シテ」橋が、りの中程
に居る

シテ
一南無三うはぬりをした何とせう是からは踊り拍子

にかゝつて御きげんを直そふ

トこゝにて兩はだをぬぎ扇をかざし

此寺の〜第一の秘藏なる樂器の太鼓をあづかり
て盜賊に出あふた〜かどり拍子によそへて新發
意が詫する〜

ト三味せん猿若の獅子をひきかける
一扱それよりも

ト是より傳授猿若の獅子新發意太鼓にては三段引二段目よりたいこのばちを持太鼓うち合せる是にてうかれ「ワキ」そろ／＼出る「ツレ」もそろ／＼うかれ出て衣を落し兩方の手にてふちを持こへをつかを此内「ツレ」の懐中より「シテ」の衣をとりもどす合方おはりしゆきんにて「ツレ」と間違「ワキ」をしばる

ワキ 一これは何とするぞ
シテ 一がつきめゆるさぬ
ワキ 一こりやをれじやわい
シテ 一是はしたり
ワキ 一でかしたく
シテ 一御きげんは直りましたか
ワキ 一きげんはなをしつたぞ
シテ 一御きげんが直つたりや衣まで出しました

笛 三味線 歌 大小 太鼓
寛永元甲子年二月十五日中橋におゐて芝居興行

市村座 家狂言

海道下り

シテ 右近源左衛門
ワキ 市村竹之丞
ツレ 同 宇左衛門

ワキ 一是は何がしと申長者でムル木曾海道は古歌あまた有る名所がムルと承りかねて下りたいと存てムルが明日最上吉日にムれば罷下り升ふとぞんじ升ルヤイ／＼太郎冠者あるか
ツレ 一おまへに
ワキ 一ねんのうはやかつたいよ／＼明日は罷立ふと思ふが何とおもふぞ
ツレ 一夫は一段とよふムリ升ふ天氣とや申一しほ御慰みでムリ升ふいよ／＼ちやり九郎左衛門様にもお連れでムリ升ルか
ワキ 一成程そふじや只今迄は聞及ぶ計りで有たが名所を

見たならば一しほたのしみで有ふ
ツレ 一左様でムリ升ルしてもちやり九郎左衛門様は一度も木曾海道下りは被成ましたか
ワキ 一イヤちやり九郎左衛門どのは名所好であまたの國の名所見られたなれども木曾海道下りは始めてじやとおいやる
ツレ 一ちやり九郎左衛門様もはじめてムリ升ルかハア
ワキ 一やい／＼九郎左衛門と身共も始て下り案内を知らいでも其方が先達で木曾海道の案内はよく存ており升れば此度は御供は私一人でもゆつすりともしたさぬといふたではないか其方がまた今の言はがてんがゆかぬ
ツレ 一成程左様申ました
ワキ 一そんならちやり九郎左衛門と身共がしらいでも汝が知つてゐるからは案ずる事はない
ツレ 一何を隠し升ふ私は木曾海道は始てムリ升
ワキ 一それなれば其方は海道下りの案内は知らぬか

一左様でムリ升ル

一それ海道下りの案内を存てをるといふたは

一其譯と申は海道下り被成て古歌のある名所古跡御

一尋被成升ルはさぞ御慰でムリ升ふと存升て唯一す

一ちに参りたい計り海道下りはいくたびもいたした

一といつはり升したでムリ升ル又一ツにはちやり九

一郎左衛門様は國々の名所を御尋被成てムれば本會

一海道下りも被成たで有ふと存て今日までいつはり

一を申ましたはあやまり奉り升てムリ升ル

一偽りをさんげしてあやまつたは實正か

一左様でムリ升ス

一あやまつて改るに憚る事なかれといへばゆるす殊

一更一筋に名所しうしん程の風雅にめでさしおく

一が今から案内にさそふも明日の事なればいかゞ有

一何とムリ升ふか

一一段とよい事を思ひ出した是は海道下りをした人

一是は一段の御思案でムリ升ル誰が存ており升ふな

一思ひ出した某が伯母御は海道下りにかしこい人で

一くはしいなんとおばごに問ふではないか

一幸な事でムリ升ル明日の旅立の御祝ひ申とおば

一ご様はお出被成たを表さしきにおまたせ申て置ま

一したが是へお通し申升ふか

一それは重疊是へと申せ

一おばご様いざお通り被成ませう

一ト四海波の諸にて「シテ」橋かゝりより出「シ

一テ」柱に留る

一伯母御様よふこそ御出有がたふ存升ル

一わごせは明日海道下りめさると有ゆへに見立に参

一つた

一よふこそお出被成ました太郎冠者こし湯をあげぬ

一まづ案内を御聞被成升ふ

一がてんしてをるひそかに申せ

一心づかひは無用でありやる本會海道下りは名所多

いところなれば一しはたのしみておりやろう

一儘かおぼご様には海道下り被成てムリ升ルな

一そふでおりやるまつと早ふ聞たならば老の思ひで

一にまた同道いたそふに残り多い先日太郎冠者が咄

一しを聞ては太郎冠者も先達海道下りしたと有れば

一さぞ残りのふ名所を教るでムろふ

一太郎冠者は海道下り

一ト「ツレ」の方を見る

一いたしたそうにムリ升ル

一面白い男なればさぞ道も慰で有ふ

一旅立は見立る人から盃を始るとムればまづ伯母御

一様からお始被成

一まづはじめ召れ

一先づ

一しからばさし升ふ

一ト扇をひらき吞「ツレ」扇でつぐ

一お盃でムれば一ツたべ升ふ

一さこしめせく嘸こなたの事なればはなむけがム

ろうわらはも何かと思ふて道中の餞別乗かけ馬を

一申付ておじやる夜明には参る様馬士にもとくと申

一付た心置のふ道中めされ

一何寄のおはなむけでムリ升

一ト酒をのむ

一サア今一ツ召上られい

一一目出度折からなればおさへ升ふ誠にそなたわれら

一如きまで名所見物に海道下りいたすは弓は袋に納

一ると申もかよふな御代にあふぞめでたい事であり

一左様でムリ升是は大盃でムれば一トいきにはまい

一らぬ

一ト「ツレ」扇にてつぐ「フキ」請て下に置き

一おぼご様には若い時より殊の外舞の上手じやと承

一りました折なふて唯今まで拜見もいたさぬ何とぞ

一トさし叶ひ升まいかな

一上手じやとはおこがましや若い時の事もおもひ出

一せばなつかしいものじや旅を祝ふてとは思へども

一何といたそふ

一ひたすら所望いたし升ル

一それよりは私も存ており升れどもおぼこ様に海道

下りのあんないを承りたふムリ升ス

一それはのちほどまづ一トさし御舞候へ

一案内おかり給へや

一イヤ舞を

一案内を

ト「ワキ」扇を出し

一幸ひ是に舞扇の候いざ舞候へ

一いざ出立も近ふ候へば旅行を祝ふその爲に太郎冠

者が望海道下りの案内を小唄節で申そふ

一所望じや〜

ト小鼓松風の物着を打「シテ」柱の角にすはり

一おもしろの海道下りや

唄「何と語るも盡せじ加茂川白川うちわたり

野しゝのわらや霞こむ木々に聲ある鳥本

やすりはり峠の細道雨はふらねと森山や

こよひはこゝに草枕かりねの夢もやがて

醒が井番場峠は袖さむし伊吹おろし不破
の關や戸ざゝぬ御代こそ目出たき

一よいや〜

一はや夜も明け候海道へ下りの用意候へ

トはや笛はや鼓「シテ」橋がゝりへ行扇を左

りに持て「シテ」柱まで来てひもに小鈴の付

しを持そへ

一見給へ乗かけ引て候道中無事に召れ候へ

トはや鼓少ししづかになり「ツレ」ワキ」を乗

りかけにのせる 此所傳授 つらみ止む

一是ぞ誠に馬のはなむけにて候へ、

ト笑ひ紐に付し鈴をふる

我花を譽るではないが扱〜見事な事でムルイヤ

我がるひらくに寝はらばふて詠めましやう

一是は三條の大黒屋でムル誠に我等事は長者でムル

何事も心の儘でムル私の友達に万疋の代りに佛舎

利を預つてムルガ宿元へ歸つてひらいて見れば内

に何もムらぬ餘りふといきな仕方でムルゆへ借狀

を持て今日は万疋の金を取返そふと存る

トあるきながら云ふ

我物ゆへに骨を折ると申はか様な事でムルしかし

彼男も心ざしはずんど風雅なものでムル万疋なぞ

は其儘に捨おいてもくるしからぬ事なれども外の

聞へがムルイヤ参る程に是でムル三條の大黒屋で

ムル内にか

一是ははや大黒屋が参つたそふにムル先是へ通そふ

かイヤ〜ぼたんを見せたなら所望いたそふまづ

〜外の間で逢ふてなだめませう

一いつ來ても留守じや〜とおいやる

一是は大黒屋殿よふお出なされたまづおとほりなさ

森田座 家狂言

佛舍利

シテ うなき太郎兵衛

ワキ 森田 勘 彌

シテ

一是はこのあたりに住居いたす何某と申者でムル去

ル子細有りて佛舍利の寶塔のうつしを持てムルガ

様子有て金万疋の替りに三條の大黒屋へ預けてム

ル此間より佛舍利を戻そふ程に万疋をかへせとさ

いそく致すゆへたくはへあればでムルが難儀仕ル

彼は長者でムれば今しばしなだめ置ふかと存升ル

今日も参つたならば何といたさふ

ト思案して

よい事がムル大黒屋は明日牡丹合せに参ると承る

身共もぼたんが好きでムれば庭にあまた植置てム

ル此牡丹をあたへて佛舍利を取替そふとぞんじ升

ルまづ障子をひらいてぼたんを見ませう

ト障子を開て牡丹の作り花有り

一通らいでなんといたそう

ト「シテ」かつら桶のふたを持出る

一まづ一ツあがりませ

ト「ワキ」につこりとわらひ

一扱／＼そなたはいつでも心づいた男じや此間の連

歌に參つて大酒致して三日程は禁酒でをるが一ツ

たべよふか

一あがりませ

ト扇にてつぐかつら桶にうけて

一大盃でおりやるが

トのみ

扱そなたに言たひ事があれどもそなたの顔を見て

はさすがいはれぬ

一もひとつあがりませ

一過ぎよふか知らねどもサアつぎめせ

トのむ

一そなたは佛舍利といふてあきづしをわたしたの

御覽なされましたか面目ないしかし三條の大黒屋

どのなればこそあきづしを渡しました

一それはきこへぬ三條の大黒屋なればとはどふして

一こなたは連歌茶湯に心を盡し何くらからぬ風雅な

長者なればむづかしうもおをしやるまいとぞんじ

升てたばかりました殊更私は連歌の御弟子でムれ

ば万疋や二万疋は親のものは子が貰ふに何と申者

がムリ升ふ

一いやればそこも有しかし親の中でも子の中でも

正しくするが禮儀じやコレおみやれ

ト万疋借状を持て

一借状も連歌の御弟子なれば私に下されませ

一夫はやるまい物もでもないがまづ／＼こんどは此

舍利を戻そふ程に万疋を返しておくりやれ

ト酒をのむ

一はて親子の中にかへすのかへさぬといふ事がある

ものかつかはさりませ

トふところへ手を入れる「ワキ」扇でたゞき

一すいさんにおりやる

一是ははや不調法な御きげんをそんじ升た御きげん

直しになんと連歌をはじめませう

一弟子師匠の中に腹立事もなければもそなたの爲で

おりやる

一ありがたふムリ升ル

一さあ連歌をはじめ召れい

一畏りました明日は師匠には牡丹合せに御出なされ

升ルと承り升たが左様でムリ升ルか

一そふでおりやるサア／＼連歌を案じ召れ牡丹でい

たそふ

一よふムリ升ふ私から致升ふ牡丹花に御めんなれか

し松の風

一よふおりやるか御めんなれかしは氣が／＼りな爰を

直しめされや

一いや私はごめんなれかしが一首でムリ升ルおつけ

なされませ

一日和になせよ雨のうき雲

一よふムリ升ルがひよりになせよをお直しなされて

なすな／＼とはどふでムリ升

一いやなせよ／＼といふがあんじでムル

一名のたつにつかひなつけぞ忍び妻

ト「ワキ」はらを立

一がつきめなをれ

トわきざしにそり打

一なんとなされませ

一いつそなたの名の立程の使をやつたぞ

一是は借状の佛舍利の事ではムリ升ぬ戀の月でムリ

升

一然らば直しめされい

一名の立に使な告ぞといたし升ふ

一段とよい吟せい

一名のたつに使な告ぞしのびづま

一あまりしたへば文をこそやれ

庭鳥もせめて別ればのべて鳴

ト長くいふ

一戀せめかくる入相の鐘

ト扇にてたゞきせめかくる
 シテ 一扱も是はせわしうなつた
 フキ 一せはしなふて何といたそふ
 シテ ト猿若のし、二段弾これより三味線
 シテ 一さあ、又私がぼたん畑を御覧なされて一ッ御上りなされ
 フキ 一何所でも行ませう庭鳥もせめて別れはのべてなけといふても戀せめかくる入相のかねとはよふついであるぞ
 フキ 一まアそふせわしういはずとも牡丹を御覧なされませう、
 ト障子をあげる
 フキ 一扱も、いつ見ても見事な牡丹かな身共牡丹すきゆへあまたぼたん持たれども此様なぼたんはないなんと明日の牡丹合に一花もたるまいか弟子は子といふ師匠の手がらになる事じやがたもるまいかシテ 一親の中でも子の中でもたいしうする事は正しうするがよい冬より春をこい四季折りの心遣ひした物をついもたるまいかとはこの義は御めんなされ

ませ凡數多の牡丹をよせても此花に及ぶか牡丹合せに參らいで残り多いかな事なり升ぬ
 フキ 一はてたもれといふに
 シテ 一我が花なれど扱美事な花かな
 ト舞のひやうし大小つゝみ
 叫 かくる見事な牡丹花をいづれの人にや得さすべきぞ
 詞 あら美しの牡丹かな
 「あら美しのぼたんかな
 ト三味線の獅子の三段弾「シテ」ぼたんの作り物を持「ツキ」を追つかけてぼたんと借状と取かへ太鼓にすわる「ツキ」返りしを見て佛舍利のづしをいらいて「シテ」拍子をふむ獅子に終る傳授
 シテ 一借状も佛舍利のづしのぼたんととりかへていた
 ト借状を引さき
 是がなければ誰こわいともぞんせぬヤイ、此づしへ佛舍利をうつしませ
 唄 三味線 大小鼓 笛

江戸三芝居始書上寫

境町 勘三郎

吹屋町 竹之丞

木挽町 彌

右之者共此度芝居瓦家根土藏造り仕候に付別紙之通下棧舖之儀相願申候十一年以前繪島一件以後棧敷一通り被仰付今以其通に御座候下棧敷被遊御免候ても苦かる間敷義と奉存候依之奉窺候則願書二通共奉入御覽候

享保九甲辰三月

大岡越前守 諏訪美濃守

右辰三月三人之者共願書相添水野和泉守殿に上る同四月十日右願書之通り下棧敷可申付旨和泉守殿に仰付由緒書認め同十二日和泉守殿に上る同十八日内寄合ひ右三人呼出し下棧敷之儀申付爲後日言上帳に記置旨申渡す

堺町猿若勘三郎座由緒書

台徳院様御代寛永元甲子年二月歌舞妓狂言御願申上候處則被仰付中橋にて芝居仕候大猷院様御代寛永九壬申年伊豆國安宅丸御船御當地に入津之節金之采を頂戴仕御船之先にて木やり音頭仕候御奉行向井將監

様此節より町奉行様月次御禮に上り唯今迄代々相勤來り此節芝居所者禰宜町にて仕候右禰宜町は長谷川町横町之事私名せつた町と申候山狂言座勘三郎申候慶安四年辛卯正月より同四月迄之内御城様被召諸藝仕鳥目六百貫文并金入猿若之衣裝頂戴仕候只今大切に仕所持致候此節堺町にて芝居仕候明曆三丁酉年正月十八日大火頓燒仕候て同五月京都に登り内裏様被召世伴召運新發意太鼓猿若狂言仕候爲御褒美作に明石と申名被下置候御褒衣裝丸の内に三ッ柏むらさき糸にて箔付并猿若者裝束頂戴仕九御當地に罷歸り申候三十四年之間大夫元相勤万治戊戌年死去仕候二代目明石勘三郎十二歳より廿八歳其年之間大夫相勤候此節元祖市村竹之丞儀明石勘三郎弟子にて候所則鶴之丸之紋所を遺し葺屋町にて芝居取立只今迄相勤申候五ヶ年之間大夫相勤三代目伴勘三郎四代目勘三郎延寶六年より貞享元年迄之間大夫役相勤申候後に隱居仕中村傳九郎と改名仕候貞享より五代目勘三郎元祿十四年迄十八年之間大夫役相勤申候六代目勘三郎元祖勘三郎より年數百貳年之間芝居を相續仕候狂言之儀者古來より仕候通續狂言相勤申候

享保十巳年六月

市村竹之丞由緒書 座元 村山又三郎

此者生園者泉州堺之者にて若年より歌舞妓を仕覺え御當地御繁榮に付藝爲指南罷下り右かぶき當芝居御願申上相叶候に付踊子供五六人其外能間狂言などをやつし相勤申候役者少々相交せ初て歌舞妓芝居興行仕候右之又三郎私芝居之元祖にて御座候仍て子孫只今迄私扶持仕罷在候承應元壬辰年又三郎儀病死仕候に付翌村田九郎右衛門と申名主相立市村宇左衛門彦作と申者相座元にて芝居相續仕候此節上方より踊子かぶき三絃之藝者罷下り一番二番之はなれ狂言を拵相勤申候且又右近源左衛門と申者上方より罷下りねり新之ゆかたをかぶり女形と申形を此芝居にて始め候右市村宇左衛門伴竹之丞十歳之時葺屋町にて玉川主膳と申役者相座元にて狂言芝居相勤申候寛文四甲辰年始て三番續の狂言を拵仕候其節芝居者前々之ごとく放し狂言踊のみにて御座候依之私方踊芝居此故に呼來候と傳承候大猷院様殿有院様御代毎度御城に被爲召度々鳥目百貫文之、拜領仕又者御時服頂戴仕

候節も御座候尤前々之御屋鋪様にも御召候間罷出候右又三郎宇左衛門伴竹之丞迄右之通にて御座候由承傳候且又歌舞妓芝居根元村山又三郎蒙御免始て取立候より以來八代にて年數九十二年に罷成候右村山九郎右衛門と申代より竹之丞は名改め只今迄相續仕候右又三郎は私芝居元祖にて御座候

元祖村山又三郎

村山九郎右衛門

市村宇左衛門

市村竹之丞

市村竹之丞

市村竹松

市村長太郎

市村宇左衛門

右之通御座候

享保十巳年六月

原町 狂言座元 市村竹之丞

森田勘彌由緒書

私共芝居取立申候年數之儀者万治三子年より當子年迄六十年に罷成候太郎兵衛と申者木挽町五丁目にて芝居取立私共元祖坂東又九郎一男にて又七郎を太郎兵衛養子に仕森田勘彌と相改狂言仕候其節より又七

郎方へ座元を相譲り申候則勘彌と申候唯今迄之又九郎にて御座候鳥帽子にて狂言等之指南仕勘彌を譲り申候依之代々坂東又九郎座元相勤申候以上

享保十巳年六月

木挽町芝居 當大夫駒太夫事 勘彌 座本 又九郎

右芝居由緒之儀御役所留無之不相分候に付享保十巳年六月町御年寄奈良屋市右衛門方に相尋候處右之書面之通り由緒銘々書出申候に付記置候先年者狂言芝居座本四人有之候所十年前三月御城女中繪嶋僉議一件之事木挽町に居候山村長太夫遠島に罷成候其後長太夫跡芝居取立之儀度々願人有之候得共不相成由今程者勘三郎竹之丞勘彌三人にて狂言座本致候事

元祖 河原崎權之助

九州肥前國に住居仕元來能狂言を以歌舞妓芝居取立於肥前長崎興行仕寛永年中之頃京都伏見におゐて興行仕候砌奉幕御江戸之繁榮を御當地に罷下り太鼓櫓蒙御免於木挽町五丁目初て芝居取立万治年中之頃迄

興行仕候

二代目

權之助

寛文八戊申年九月三日より太鼓櫓上ヶ一日芝居興行致其後に相成從弟之故を以森田勘彌と相座元にて芝居興行仕候元祿年中相座元相別れ如定年之壹人名題に罷成候

三代目

權之助

幼年之砌堺町におゐて蒙御免享保十九甲寅年十二月蒙御免舊地木挽町におゐて同二十巳年より延享元甲子年迄興行仕候

四代目

權之助

寛政二庚戌年二月蒙御免木挽町五丁目におゐて同九丁巳年迄興行仕候

五代目

權之助

寛政十二庚申年八月蒙御免文化五戊辰年四月迄興行仕其後文化十二乙亥年蒙御免同十四丁丑年十月迄興行仕今般文政二己卯年三月蒙御免

文政二己卯初秋

立川談洲樓

燈火のもとに

七十七翁

馬

馬

秃筆をとる

此たび猿若座家につたへし寶を披露しことぶきける
古き狂言を見物し珍しければ其まゝ書き寫し後かゝ
ることすける人にみせんとそおもふ

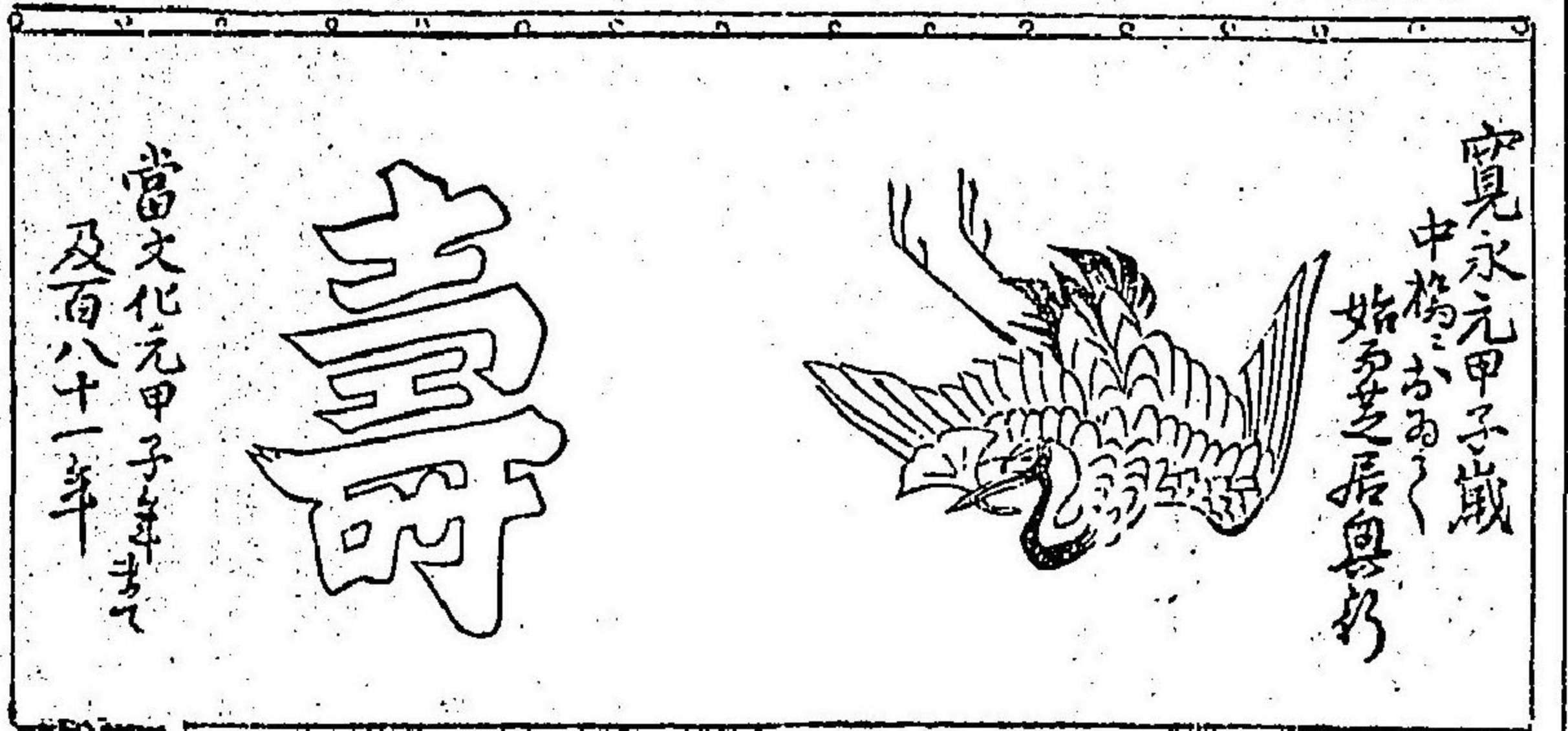
甲子年

壽狂言之圖

文化元年四月廿日ヨリ三日カ間拜受之品
披露

十一代目
中村勘三郎

立仕の色鼠鳩色柿幕引



元祖猿若勘三郎拜受之品於舞臺披露

○金 麿

寛永九壬申年伊豆國よりアタケ丸といふ大船入津
之節綱曳の音頭相勤候砌拜受の品なり

○猿若衣裳

慶安四卯年御城様の被爲召候節拜受背地金入紫襦袢禁庭に被爲
召候砌丸に三柏紫糸縫紋裾に薄に露之品拜受

○御簾のあげまき

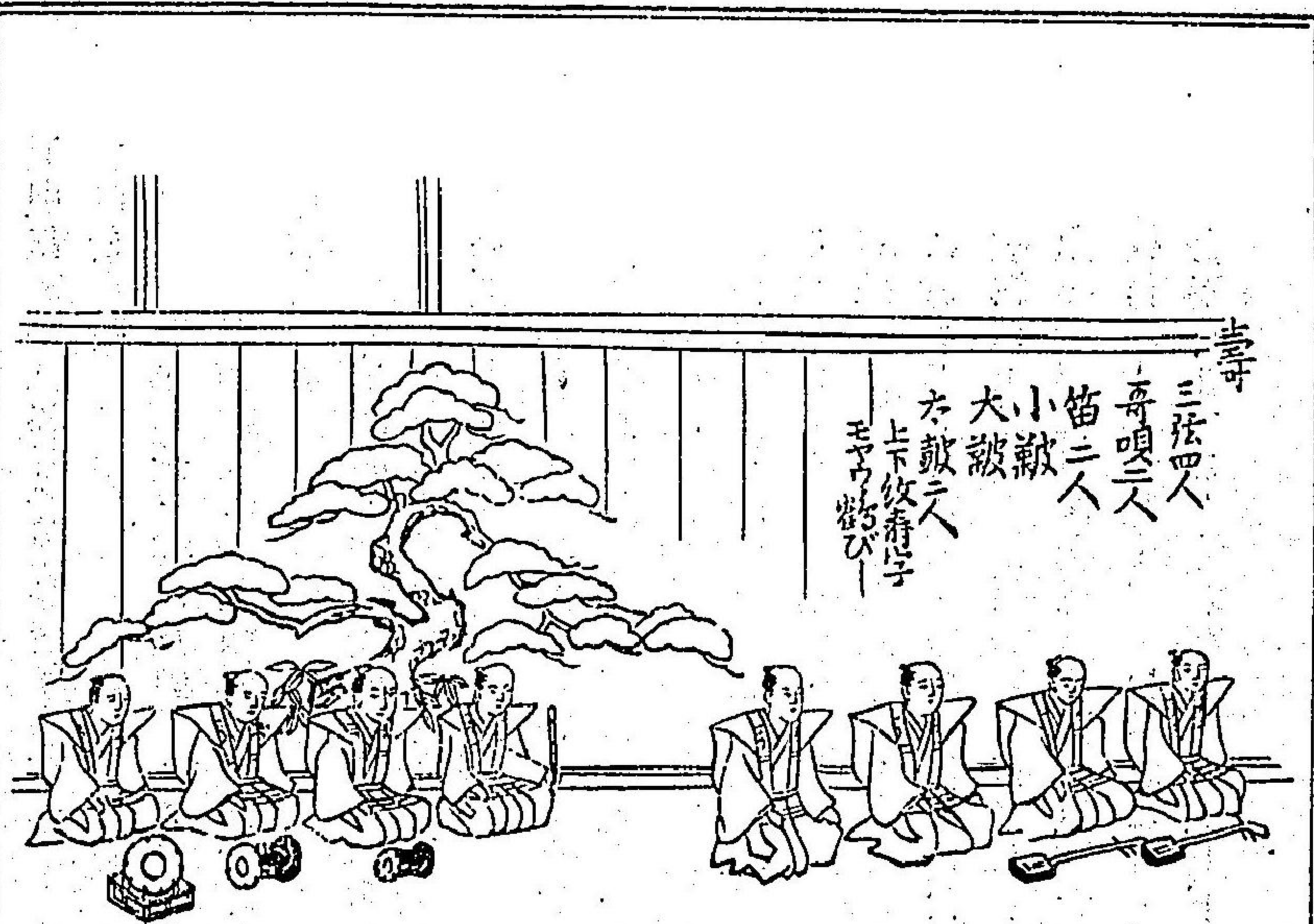
明曆三丁酉年勘三郎親子上京叡聞に達し高貴御方にて
新發意太鼓と申狂言又猿若と申狂言相勤候上帯を失念
し隙取し折節是を拜受し首尾能相勤候

右何れも紫縮緬服紗に包之黒塗蒔繪之箱に入淺黄縮緬之外
服紗三方にかざり付たり

右披露口上に親子上京したる砌狂言乍恐叡覽ましまし見る
にあかじとて明石と申名を忤にいたゞきしと也

披露口上は先々市川海老藏相勤しより百五十年壽之節も安
永年中四代目海老藏五粒五代目團十郎白猿兩人相勤當時七
代目團十郎十四歳にて口上誠に役者冥加に相叶候段難有仕
合奉存ますと述之都て座中麻上下





壽

壽おどりぞめ
子役座附紅梅
の杖持之五人

千世八ちよ
いろもかはら
ぬ常盤木の
いふ出しの歌
にておどる

壽女舞
女形七人



門松

是は此あたりに住うとくなものでをじやるヤア、
太郎冠者春をまついとなみほうらいの臺もつくりな
してあるかハア中々用意いたしてゐると御まへにも
ち出る見事、しからは嘉例のごとく伯父御さまへ
歳末の嘉儀目出度申述で参れ門松を立るぞひまたら
すはやういで参れハア立出てエイ、といそぎ候程
にはや参りつきて御まへに出歳末之祝儀申上るとす
ぐさまかへらんといふヤイ、太郎冠者酒をのうで
ゆけイヤ申付られましたすぐさまにまかりましたよハテの
うでゆけと御すゝめしからは一ツ下されてまいりま
しよと盃を取れば伯父御つぎ給ふ是はけつこうな御
酒今一ツ下さりやうのうでゆけとつぎ給ふ太郎冠者
きげんよくおちご様は又一ツ御としをとらせらるゝ
がいこうわかう御見へなさるゝ殊によく御心つかるゝ
る夫は何が御酒を下さるゝハ、今一ツ下さ
りやうのめ、と三ツ五ツかさねて酔たる躰なりヤ
イ太郎冠者以前久しう見へざりしがいかにかハア上方
へ参りました太郎冠者都の者でゐるゆへしばらくと
うりういたしてゐる夫は一段の事であつたその都の



はなしがきゝたい／＼さらば御咄し申まじよと扇をひらき立上り足もしどろに拍子とり此處都名所名寄せの一寸したる歌にておどりありハ、／＼／＼しからば御暇申まじよと立出しが例年おちごさまより御上下を下さるが今年は何として下さらぬぞと立かへる太郎冠者まだいなぬかハアいかう上下がめめましたしわをのばひて参りまじよア、おちごさまは一ツ年をとらせらるゝゆへかいかう御年がよらせられた何とした物わすれなさるゝ御暇申まじよと出てゆくおちごやがて心付給ひヤア思ひ出したいつも歳暮に上下をとらするをはたとわすれた上下をくりやうイヤ／＼しわをよりのしましたまづ御預ケ申まじよイヤ／＼氣にかゝる請とれしからばいたゞきませうと肩にかけエイ／＼と家にかへりハ、ア門松もようたつた／＼唯今罷かへり候申附たいかうひまがいつた伯父御さま御酒を下され嘉例のごとく御上下もいたゞきました都の咄しを申上ひま入ましたと扇をひらき門松の立たりし目出度文句の歌にて立て舞ふ其うちに上下を取落し夫をもしらで拍子とりあるじもつかれ立同じく立て舞給ふがかの上下を取上で手にふれともに舞給ふを見るより太郎冠者はしりより是ははいりやうの品でゑるとおつとつで入にけるあるじもついで入給ふ 幕



五百十四



猿若

さてものどかなる春でゑるまかり出たるものは杵屋何某といふ大名でゑる心きゝたる若と申召仕ふもの主人へも申さず伊勢参宮にまかりたるよしやがてかへり來らばきつと申付うとぞんずる猿若立出主人へも申さず参宮しいそぎかへらんと存るエイ／＼主人の方へ参り付て候御門もきらびやかに出來て候入らんとせしがイヤ／＼たいにはいりがたし主人のきげんをうかいひわらはせらるゝ時立入らんと物もう大名ヤア金才はをらぬか北仁もをらすばと自身立出給へば猿若扇にかくるゝさてはとなりの事にやと入らんとし給へば又物もうといひさまかくるゝはてめんようなとかんがへ給ふを物もうとこはづくろい足音とう／＼主人おどろきしり居などしたりハテ目に見えぬ物もう是であひまじよイヤ／＼夫へは参られませぬシテいづくで御かまの前へ参りまじよヤアと大名さしのぞくはなばしら猿若がかはかくせし扇でひつしやりアイタ、ハ、鼻の穴が一ツにひしげたいエ／＼やはり穴は二ツありますいらうて御らうじませなるほど二ツあるは時に猿若参宮よりひとり戻りしかハア供人あまたは御門にのこしをいてゑる何をいひをるヤイ猿若こゝへコイ、ハ、ハア参宮の道すがらさぞ面白



中村勘三郎



中村七三郎

き事であらう中々咄してきかせいはなしませうか馬にふと
んをうちかさねひらりとのりてあなたへしやならこなたへ
しやなら主人もうかれてしやなら

「出しぬしはしらねどかうしからまねくかのこのふりの袖
一寸したる歌にて所作ありたがひにもたる、脊中とせなか
大名こけてアイタ、ハア御めん、むさい處がいたみ
ますならよい咒がムりますいたむ、はやう咒てくれハア
わたくしが輪になれ、と申ますな輪になれとおしやり
ませとくまじなへ、ハアと紐の先にて輪になれ、大名
しりをもつたてなになれ、猿若咒てかたわになれ、
大名おのれめ、主従ハ、さて道すがらの咄の跡
をき、たい、ハアとまらんせ、とり、まねくよねた
ちの大名よねとは何の事じやしらぬ、女郎の事でムりま
すム、夫でしられた何の事か舟まんぢうといふ事かハ、
、又歌になり

山に木をひく川にあみひく三味をひくと引づくしの文句
扇おどり手おどりあげまきをとりてはおどる参宮の道すが
らのものがたり大名もうかれたちどもにおどりもすみけれ
ば中々おもしろき事じやほうびに酒をのまさう猿若まいれ
ハア引 幕



中村座は當年役者すくなき上春に至三人まで退座
せしかば興行もいかあらんと噂せしに三月上旬
より一の谷の淨るり狂言をはじめ坂東三津五郎忠
度熊谷二役大切に親年回遣善として娘道成寺所作
事相はじめ大序より切まで一人しての出精其奇特
其仕うち近來珍らしき若者なりと大入大はん昌し
ければ其勢ひに乗じ猿若座甲子年壽狂言興行の摺
物江戸中一町限りに配り猶豪家へ壽狂言御見物を
願ふしるしと袴羽折にて摺物を配りければ江戸一
般の大評判となり古風の狂言見物事をて初日より
いやがうへの群集しけりかぶきの根元さもこそあ
るべけれど三津五郎がいさほしも又少なからず

申子四月

萬延二年辛酉歲二月中浣一校畢

活東子

中古戲場説卷上

文化元甲子年堺町歌舞妓座本猿若(中村ト號ス)勘三郎芝居寛永元甲子年より年曆百八十一年に及ぶにより壽狂言興行之節口上之寫

乍憚口上書を以奉申上候

先以御町中様方益御勇建ニ被遊御座恐悦至極奉存上候隨而私芝居之儀數年來御量負厚被成下是迄不相替狂言座相續仕候段難有仕合ニ奉存候然ル處當年者甲子之歳ニ相當候ニ付壽狂言として當四月廿日より日數三日之間猿若之狂言所作事并門松と申狂言興行仕候間御光來之上御見物被成下候様備奉願上候右甲子之歳壽狂言之儀者私芝居元祖勘三郎御當地御繁榮ニ付元和年中御當地ニて男歌舞妓狂言座仕度段御願申上候處寛永元甲子年天下泰平國家安全之御吉例とし歌舞妓狂言座太鼓櫓御高免被成下難有則中橋におゐて初而舞鶴之紋所を付け太鼓櫓を揚狂言座興行相始申候儀ニ御座候尤家之紋所は抱澤濁ニ御座候得共右舞鶴を紋所ニ仕候義者元祖勘三郎儀御當地ニ而狂

言仕度心願ニ付元和年中より御願申上候處右願中之處鶴山おしきに銀杏をのせ口にくはへ富士山の頂きより勘三郎家の舞込候と夢見し故夢さめ不思議に思ひ時の占者に尋問せしに鶴は日本の名鳥にて山折敷は高人の器物なり銀杏の形にして未廣なり是異朝に名を發して永く舞の家と成べき瑞ならんと判断す目出度事に思ひし折柄願の趣御高免を蒙りし故中橋におゐて始て太鼓櫓を揚ケ則家の紋を舞鶴に改め用ひ來り候處其後舞鶴は憚る事有之角に銀杏に相改今以相用申候然ル處寛永九壬申年中橋より彌宜町に移り又候慶安四辛卯堺町の當時當所ニて芝居相續仕候元祖勘三郎より私迄年數百八十一年狂言座相續仕候段誠以御當地におゐて御量負厚被成下候御陰と難有仕合に奉存候前文中上候通百八十一年以前寛永甲子年に相當り候儀故右甲子の壽として元祖勘三郎儀致置候猿若の狂言所作事を以て古來の狂言以古來古めかしき少し計の所作狂言に御座候間當時の御見物様方の御目に留り候程の儀にて御座有まじく候得共昔床しき狂言と思召御見物被成下候様備奉願候尤右壽狂言中元祖勘三郎より我家に拜受仕罷在候左之品々舞

臺におゐて御披露申上候

一猿若の衣裳

一金之廳

一青地金入猿若の衣裳

一紫裾濃猿若の衣裳

一御簾の揚まき

右之品々は元祖勘三郎より由來有之今に於て我家に拜受仕罷在候今般甲子壽百八十一年來狂言座相續仕候儀誠ニ御量負厚き御惠の故と難有仕合奉存候間右申上候品々古めかしき品には御座候得共壽狂言三日之間舞臺におゐて御見物様方御披露申上候何卒御町中様方被仰合御見物に御出の程備奉希候尤壽を祝し少々の摺物懸御目申上度差上候得共御祝儀は御用捨にあづかり度奉存候誠以數年來御當地におゐて狂言座興行仕候儀は御町中様方御陰故と奉存候間爲冥加右之段々御披露奉申上候尤先年より壽狂言の節は右傳來の品々之山來口上を以申上候儀は市川海老藏市川家は迄申上參り候吉例當七代目市川團十郎舞臺に於て口上を以申上候いまだ幼年の身分にて如何敷奉存候得共是又江戸根生の團十郎にも御座候間御用捨被成下候様備奉希上候以上

元祖より甲子三たびの星霜

凡一百八十一年に及べり

壽きや十一代の家ざくら

觀子

うちつゝく家を繼穂や花の枝

明石

賀章

三升

茂山をいくつ越けんほとゝぎす

白猿

わざおぎの本卦がへりや辻が花

十一代猿若

文化元甲子年初夏

中村勘三郎

賀章

同伴 明石

此狂言四五日之間興行江戸町々より祝言して目録遣し候由芝居向茶屋の中へ會所を建右祝儀物持參のものには酒吸物にて饗應の上見物させ候由到來の長柄の傘をさしかけ舞臺にて披露せしなりと子が方に出入の町人祝儀物を贈し節の事直物語なり

柏庭

一江都伎藝四天王の隨一と呼ばれし程有之實に藝の外に妙と云べき者にて伎家の豪傑と稱して可也一年(寛保元酉十一月なり)大坂佐渡島長五郎座に上り

しに顔見せはとやかく偏執せし者も有し由翠春狂言鳴神北山櫻の狂言久米寺彈正(今之俗毛拔と云)と鳴神上人相手尾上菊五郎雲の絶間柏庭大切不動明王の尊像大當り京都は云に不及和泉河内までも聞傳へに群集し京大坂の眼を驚かせし也其夏嵐七五郎中村次郎三など同道して涼に出天満あたりにての事にやさりぬべき茶樓へ伴ひ納涼せし其家より醫師の出で歸ると見れば又一人の醫師來り診察調藥する躰也よつて柏庭は七五郎に向ひ此家は病人ある躰なれば長座は無用なり家内も迷惑せんとかく〜と歸るしたくなどせしを中村次郎三云けるはこゝなる亭主とは懇意なれば尋見んと勝手へ行しは有て立出柏庭にむかひ是なる獨娘なるが去秋の頃より瘧にて惱めるが故に種々湯液は勿論加持祈禱呪咀の敷をつくせ共さらに驗なし今以落ざる故此程は餘症添て惱みふしぬ是によつて願はくは貴客の不動の威力にて落して見給へかしよし落すとも障る事あらじとしきつて云柏庭笑ていにしへ江戸にて不圖せし事にて狐の付たる女を落したり是全く僥倖なり其上其比はわれ壯年の血氣

ともに強き故に落しとみゆ今は老年に及びいかでさる事あるべき無用なりと答し所に勝手より亭主立出て一通りの語話済て扱申やう先程より各様がたの御物語り具に承り候ひぬあはれ柏庭貴丈は御願申したとへ落不申候とても少しも苦しからず皆様は御慰み半分私方は一人の生死安危にかははり申事にて萬一早速に落候へば至極の御厚情と申物なりと實に餘儀もなき體なりし故七五郎も共々に希望せしかば柏庭もせんかたなくさらばしはし待れよと口漱手水して手拭にて頭をつゝみ懐中せし汗手拭を出しさして來りし小脇指を携へ病人の寐間へ案内させ病勞れたる病女を柏庭命じて抱おこさせ我面を見させしめ給ふべしと云により其詞のごとく起して言聞せしかば病女もつく〜と柏庭を見たり其時に柏庭の短刀を抜放し汗手拭を握りて縛の繩にしつゝ立上り病女を白眼し勢ひ誠に別人のごとく見へたり病女一目見るより戰慄甚しく其まゝ打臥ぬ柏庭はしばしが程瞬もせずならみつけて元のごとく短刀を納め元の座に歸り又うがひ手水して酒茶料とも元のごとく

病女は夫より汗出る事瀧の如く瘧は跡なく落ぬ七五郎次郎三感のあまり柏庭を拜せしと也亭主出つつかゝるべしと夢ほども存じなばとくより御旅宿へ參り願申べきを是迄醫師四人までの療治をうけ露ほども驗なきに扱々奇とや申さん妙とやいはんと雀踊して悦び夫婦ともに柏庭を禮拜せしとかや

一享保の中比中村座樂屋番の妻に狐付しとて斷をたて場所を引居たりしを柏庭はしらす何事か有用と見へ何がはいかかせしや今日は何として出ざるやと問しにまづかくの仕合にて引込しと答しに柏庭戯れにわれ白眼おとしてとらせん物をと言しをかたはらに鳴見五郎四郎鎌倉長九郎などいふ役者口を揃へいざさらば今日歸りがけに立よりならみ落して見せ給へと口々に言是は柏庭を少し憎しと思ひし故かく云し也柏庭は今更引にひかれぬ事と成さらばならみ落して各に見すべし去ながら先我には何れもより先へ歸宅し少々心用意もあり各方は芝居濟て我等宅へ來るべし同道申さんと役を仕まふと早々歸宅せしなり扱入相比約せしごとく兩

三人來りいざ御同道申べし所は靈岸島なる由打つれ件の宅に至り柏庭病人はいづくにかとふ夫ト二階に罷在と云を柏庭きくとひとしく眞先に立二階のはしご半分程上るやいなや件の狐付恐れおのゝき眞平御免被下候へ只今立去申べしと色も遣へ落涙して詫たり柏庭立より聲を勵しをのれ今立去ずんば我計ふ旨ありと確とにらみしその勢ひに狐付色をへんじて立上り二階よりさも急がしく飛おり沓ぬぎに倒れて氣絶したり夫トさつそく介抱して寐させたり夫より柏庭は皆同道して歸宅せし途中同道せし兩三人に向ひ何も御苦勞ながら我等の宅へ立より給はるべしと倡ひ今日の物語りをしたり同道の輩皆々今日の御手柄甚以感心恐入たりいかしたる事やらんと問しに柏庭は懐中よじて言し事を何も我をこまらせん爲にいらみ落せと言れし我も其時覺悟をきはめ万一落すんば狐付を一刀にさし殺し我も其坐にて自害せんと心を決して爲し也夫故狐も我心をさとり早速落し物なるべしと語りしに同道の役者共皆々肝をつぶせし

と也是ひとへに勇氣のなす所ならん是等は伎藝の外といへども自餘の者のよく及ぶ所にあらずと云べし

一古人山中平九郎はさのみ大兵といふにもあらねども一體ひれ有人品也悪家老工藤左衛門又神靈化身妖怪など至て恐しく幅の有生れなりし去により相手になりし實事師荒事師など何れも平九郎にのみ付らるとひとしく影のなきやうに見へ其身も自然に身のちいむよふに覺へしと云しと也

寶永の比にや木挽町山村座にて柏庭始てのしばらくの相手の公家平九郎也し平九郎心中には何條アノ二歳めひとにらみにしてくれんと思ひしに初日に切幕よりしばらくと聲をかけ柏庭柿の素袍にて出つらねを云うち平九郎瞬もせずならみ付めたり跡は例の通り玉座より引おろし寶物を取返す勢ひ幕際まで始てと云ながら格別なりしと見たる者直咄し也

扱初日濟て平九郎柏庭に向ひ今夕宵の内來られよ咄度事ありといふ柏庭心得しと答へ心中には名にじおふ平九郎なれば今日の藝氣に應せず我を招き

平九郎なりし我工藤を見ると實にくくなりて飛かゝらんとせし也されどもさすがの平九郎なれば何とも云ざりし也其後中村座にて祐經小川善五郎十郎に訥子朝比奈十町也し我五郎やはり前々の心持にてせしに初日の夜善五郎我宅に來て云しは御自分の今日の五郎時致は實にかく有たき物也其許對面の時我を親の敵と勇氣を顯してにらまれし時我胸先へきいやりとせし也と云し此善五郎は至て直なる者にて虚言輕薄なきものなり是其方への教訓なりといひし其時徳辨當時誰か氣に叶しやと問しに柏庭答てまだ伊三郎也と云し也夫故徳辨は伊三郎をかたに心得て勤しと云ふかく教訓せしのみにて藝に懸りては子ながらも一言の是非善惡の沙汰に及ばざりしと也是享保十九年の春也徳辨此時いまだ元服せず升五郎に成てもやはり若衆にて虚無僧にてくるわの喧嘩手強くせし也眞田がめのと文藏國安に柏庭「同女房に路考」元祖文藏至て臆病の仕うち長尾の新吾大谷丈右衛門を切殺し其生膽を切先に貫き柏庭にくわせると忽勇氣になる狂言兩人とも當りし也此時工藤は座元竹之

仕内を少しかへてくれよなどの事かもしらす左あらば我は得心すまじきと心にかたり平九郎宅に立寄しに奥へ伴ひさし向ひて平九郎申けるは貴所の今日の仕うち甚以感じ入實に我を折たり尤此座にて以前貴客は石山源太我は鈴鹿山大竹丸の役にて貴殿へ虎をかける其時よりも天晴たゞ人ならずと思ひし也其譯は我相手となりし役者わがにらみ付ると殊の外手弱く成やふ覺へしに貴客計は我既に今日精神を勵しにらみ付れ共一向に物の數とも思はぬ體にて勇氣はげ敷有様中々御親父の才牛も及ばぬ程の妙所有さる程に今日ひとにらみと思ひしに案に相違し本舞臺にて寶物を取返されし勢ひ却てわれ恐ろしく思ひし也左すれば相手の膽を取りしぐは古今無双と云べし我は老年なれば近年のうち死すべし我なき跡にても其心をたゆまず勤なば藝道につゞく者有べからず此事語らん爲に今宵招き候也と懇に物語して歸せしと也柏庭此事を海丸に語りしを海丸子の白猿子に語りしと也

一三代目團十郎(始號升五郎)徳辨始ての五郎の時柏庭教訓に我むかし始て五郎をせし時工藤は故山中丞(實工藤也)鬼王廣治侯野の五郎元祖團藏也役者揃にて當りし也此時徳辨こむ僧美男別して評判よかりし也其後元文元年春狂言一番目柏庭京の次郎みづ賣にて絹布端物盡しのつらねと々杏葉牡丹の黒小袖を徳辨にあたへ始ての助六をせよと譲り二番目の助六の筋を云し其時柏庭京の次郎と景清二役一番目の詰に淺草觀音の繪馬稻葉六郎太夫になり頼朝をねらふ鐵炮場よかりし也二番目待乳山かくれ家の茂兵衛と云男伊達本名侯野の五郎白髮の男伊達風雅にしかも強き仕うち五郎を助六に仕立る藝珍らしかりし此時工藤は海丸始ての祐經惡工藤の當り扱々にくかりし此助六より始て罷の意休と云者出來(意休は市川宗三郎なり)夫まではかんべら門兵衛計り也(門兵衛は海丸也)徳辨は柏庭とは違ひ尺八にて八丈切付と云流行吹を尺八にて吹かれし是又珍しく見物悦びし也海丸の門兵衛是も奇麗なる惡にもよかりし揚卷は瀧中歌川上京して病死徳辨美男ゆへ當りし助六なり同七月より曾我後日と號し累物語を取組十五日より出せしかさねに袖崎菊太郎おんりやう座元竹之丞

與右衛門實は累清に柏庭「智金五郎市川勘十郎」法然上人鶴屋南北「娘きく市川滿藏」若事なり九月下旬に成て入落す十月十日迄せし也出來狂言と云内柏庭強弱を兼おかしみをつくわへ至て面白かりしちなみに云近年累の狂言毎度見しが本體をくづして作るゆへ面白からず去程に當りもなし一躰累の狂言の始は享保十五戊七月市村座にて大相撲藤戸源氏と云ふ名題にて百姓與右衛門中村新五郎かさねに三條勘太郎智の金五郎中村吉兵衛關取音羽川（本名）佐々木三郎盛綱坂東彦三郎（元祖）娘きく山本龜松音羽川が女房に佐野川万菊なり始ての累大ひに當りし也其比は中村座の生膽市村座のがさね大當り故兩座共家の狂言のやうに申せし也夫より累の狂言に死靈解脫物語りを日々三部つゝ鬨にて出せし也初日より十日ほど座元親子柏庭父子其外立者の役者素顔麻上下にて幕の外へ出柏庭口上を述しなり（生膽の事は訥子傳にくわしく記す）

延享三丙寅年正月曾我の狂言景清柏庭重忠に訥子にて駕昇の仕うち兩人七兵衛忠兵衛にて娘形を駕

にのせ兩人對の袖なし羽織淺黄頭巾對の衣裳にて淺間がりのおかしみ坊様山路破れた衣ひいふうみいよいよとかつぐ仕うち誠に名人同士至て面白かりし其次の幕頼朝大佛供養の場景清が伯父大目坊に親三甫右衛門景清を訴人せんとかけ出すを一刀に切殺しその衣裳をすぐに舞臺にてゆるゆると著かへ長刀かい込頭巾をかぶりしづかにはしがかりを切幕へゆくうしろより訥子重忠にて烏帽子素袍の片々をぬぎ中啓をもち景清待てと聲をかくる所初日前夜兩人共氣に應せず五六度仕直したれども何分氣に叶はず兩人も退屈せしにや明日の初日に舞臺にて兎も角もせんと訥子云しに柏庭も尤なりと別れしを作者はじめ頭取ともに立物の兩人明日の所いかゝあらんと甚氣遣しと也掛翌日に至り件の場になり柏庭三甫右衛門を殺し其衣裳に著かへ薙刀杖につまみとと花道を切幕のかたへ半ば行きもはや訥子呼ぶかと思ふに呼す又二足三足行て呼かと思へと呼すよつて柏庭例の氣象出少し憤激してさらばとつと切幕へ這入訥子にこまらせてくれんとづかんと足早に切幕の

際まで無心に行く薙刀の先は早切まくに當るほどにみゆると訥子例の響き渡れる大音にて七兵衛マテと聲をかけしゆへに柏庭も實に怖りして振り返りにらみし其勢ひ見物の氣にこたへし故一同にとつと聲かゝり大當り也此時の工風共に訥子にあるやうなれども柏庭が實に這入る氣になりしは實に名人同志のつり合面白き事ならずや夫よりは猶更言合なく毎日同じ出來にて諸見物の目を驚かせしなり予其初日正月二日その藝をしたしく見たりし故一しほ感じぬ

一 柏庭が工藤も度々見たりしが又格別也延享三四年の比かと覺し中村座にて祐經に柏庭十郎に少長（中村七三郎）五郎伊三郎なり工藤江の島參詣とて乗物にて出しを五郎と十郎と乗物をさし上しをはねぶたの戸を引明上下工藤むらさきづくめの花やかなる衣裳にてにらみ付ケ河津が兄弟の子供一万宮王かハテ成人したナアと云し對面はいかにも物凄きほどなりし工藤は似せ景清也本工藤は市川宗三郎也是も二役にて漁夫三種の白龍なり景清白龍を殺して羽衣を奪取しを白龍が亡魂景清に付ま

ひ羽衣を返せと云が狂言の筋なり其羽衣にて二番目の詰に路考（元祖）天人羽衣の所作是又當りなり

一 此一條は狂言にはあらねど柏庭が禮節みだりならず潔白なる事故にもなみに記之元文の比の江戸太夫河東と柏庭とは心易き中故に或年の九月柏庭日待を催さんと河東一段語りくれられよと頼しまま安き事なりと三絃山彦源四郎相かたなりしに源四郎據なき出入の方へ先約せし故參らねばならずそれ故柏庭方はたれにても外の三絃ひきを連行給へと斷りし故是非なく其比山の手にて素人にては無上の上手何がしと云し與力の有しを河東頼みやはり三絃引の躰にて同道せんと云し此人も柏庭方へ行は甚面白き事に思ひ甚悦び打連て行しに河東も座に著件の人をも三絃引の積りに引合せ扱淨瑠璃二三段語り暫くして河東には吸物盃酒など出せしが件の人には一向に吸物も出さず河東も氣の毒におもひ其人も甚不審して居たりしにしばらく有て柏庭下座の方より衣類ふくさ小袖麻上下を著し吸物の膳腕ともに河東にすゑしよりは拔群に目立

し結構なる家具にて膳をすゑければ此人赤面したり柏庭は元の座へ下り敷居をへだて慎みて私風情の人非人の宅に御慰み様とは申ながら入らせられ被下置候段冥加至極難有仕合可申上様も無之先々御箸とらせられ下さるべし尤火も別段に吟味仕相改仕立候得ば不浄に不被爲思召被召上被下置候様にと兩手をつき頭を盤に付平伏したり此人も一應挨拶にこまられ酒も少し飲れしと見ると柏庭は次々立本膳持参やき物迄引又敷居をへだて、躊躇し居たり此人も元來名高き遊人にて右のあしらひ氣詰りゆゑ少し不快なりとて河東より先へ早々歸りしと也此時程こまりし事は一生に覺すとて予が友都築何がしに語られし予も其時都築の宅へ行合せ直咄を聞たり扱其人歸りし跡にて柏庭河東をうらみ以後ともに右林の事あらば永く絶交なりときびしく制したりとかや

一元文五庚申年市村座春狂言角田川に柏庭粟津六郎左衛門にてやつし面打元興寺赤右衛門となり淺黄頭巾の上へかけざるばし素袍の下ばかりにて櫻の枝を肩にかけての出腰元共相手にじやらくらし東の

方に面箱五つならべあり吉田少將座元宇左衛門少し所作有てはん女玉澤才次郎に面を見せんと先始の箱をひらくと尉の面質の面と見へみなく我を折たり又しばし櫻庭に瀧中歌川に面を見せんと明し所今度は鹽吹別してよく似たりし也其次にはん女櫻庭しつと故互にしつとふかき般若のごとく異見の爲に般若の面を見せんと開きしに凄じ程よく似たりし其次は姥の面仕舞はふかくの面也是はす、け色にて口をくわつと開きし所へ久米兵内兵衛海丸にて勅使太宰の熊主に村山次郎右衛門と云中役者と一所に悪事を相談し都鳥の一卷を盗取しを出す所へ奥より足音する故人に見せじと海丸手に持し一卷を後へ廻すと件の面巻物を引くわへて引とる是はとふり返ると面箱はしやんとふたがせり押ても引ても明ぬ所面白かりし五つの面どれくも眉毛唇など動し故柏庭なりと知られたり面は前後共にたい一度ならではせざりし殊の外骨を折しとなり

都て柏庭は神靈事化身事の名人也我見し計も不動三度達磨豊干禪師毘沙門韋駄天庚申杯何も奇とい

ふべし我覺し當り狂言左に記す誠に十分が一と云べし

- 一新田四天王四役四度
 - 一伊勢海老あかん兵衛實は長谷部兵衛信連のしぼらくなり
 - 一助六三度
 - 一外良賣三度
 - 一分林五郎二度
 - 一喜三太ト辨慶二役二度
 - 一矢の根五郎三度
 - 一面打元興寺赤右衛門實は粟津六郎左衛門
 - 一不破伴左衛門
 - 一もぐさ賣大當りのよし幼年ゆへ不見
- 一 鳴神江戸にて三度大當り
- 一 猪野早太二度
- 一 關羽三度又關羽一度
- 一 暫くわれ見しも五度計り也

此外も數多あるべけれどもみなく暗記なればさだかならず先年柏庭大坂にて鳴神上人切に不動の大當りは京都よりもうつしてわたし大坂を下り見物せしゆへ京へ上りしも同然なりと上方者の咄じ也行狀人品より始め實に此道の妙手と稱すべきは柏庭なり

訥子始善十郎又善五郎 宗十郎 長十郎 後號助高屋高助

訥子元來京都生れにて宮家大臣家の諸太夫八木氏

の三男なりとかや放蕩ゆへに出奔せしとも又勘氣を受しともいふ京都の名人澤村長十郎を頼み寄食して居しが手跡よき故長十郎の世話にて樂屋の物書に出されし其比は廿四五の比なりし其内に自分好みにて長十郎弟子にて役者と成し也一林器量もあり器用には見ゆれども役者はまた格別の事故弟子ながらも先澤村を名のらせず染山喜十郎と號し中村の敵役へ出せし處至てよろしく見へし間翌年(寶永の末なるべし)澤村長十郎と改めし也然るに或時に長十郎に向ひ京にては彼是遠慮多しよつて江戸へ下り澤村善五郎にて勤めしかどさのみ人の目にも立ざりし翌年冬中村座へ移り故柏庭五郎にて雁金文七紺屋へ捕手の役人訥子なりしが柏庭訥子を藍瓶へ投込夫より半分藍になり出でての藝至て面白く始めて聲かゝりしなりそれより日夜にふかく出精して宗十郎と改め三年目にて市村座にて始めて十郎祐成大ひに當り程なく中村座にて柏庭五郎十郎に訥子いよ、上手の高名高くなりしと也享保十年か十一年の比より松本幸四郎大谷廣次を下につけ後には柏庭訥子と稱せられし繼に十二

三年の修行にて出世せしは藝道の妙を得たりと云ふべし一生の當り狂言數多き故悉は暗記せざれ共第一中村座春狂言十八公今様會我にて京の次郎訥子工藤市川宗三郎三條勘太郎五郎萩野伊三郎伊勢の三郎姉川新四郎二役元祖路考とら玉澤才次郎其年は中村座役者すくなく座組も思ふよふならねば當るまじと評せし也市村座は柏庭嵐三右衛門大谷廣治坂東彦三郎女形は瀬川菊次郎袖崎菊太郎早川新藏敵役は坂田半五郎成川十郎左衛門中島三甫右衛門其外も役者揃と云し也先會我不當りにて三月節句より角田川へ五人男を出し座本男揃へ是はと思ひしに是以不當り也盆前まで以上狂言四つ迄かへ柏庭もよろしくせし程也中村座は姉川新四郎一番目伊勢の三郎似せ獄門よく其上に路考始ての石橋相生獅子大當り二番目訥子京の次郎狐の女郎買其比狐客に化して吉原へ行き遣り金は残らず柿の葉なりと専ら云ふらせし也土手にて犬の足を切り夫に土を付足跡を狐とみせる仕うちしやれおかしみ詞にのべがたし扱工藤は眼病にて敵打れず何とぞ本復させ兄弟に敵をうた

せんと路考と夫婦の中にもうけしむすめおたつ工藤が好みの通り辰年辰の月辰の刻出生の生膽をとり工藤を快氣させんとの実義訥子は二階にて海士のうたひを誦ながらの愁歎棧敷も下も一面に泣ぬ者は一人もなかりし也是工藤が悪心にて十郎辰ぞろひの生れ故殺さんとのたくみさて伴の生きもを工藤にあたへると眼病はいつはり祈經が兩眼蟻のはふまで見へるはヤイと兩眼クハット見ひらくにくさ伊三郎も當りとい伊勢の三郎見顯すまで宗三郎も大當り大詰は路考訥子夕霞淺間ヶ嶽といふ千中ぶし淨瑠璃所作は不得手の訥子故に如何と見物も評せしに案に相違し訥子至て大様にてゆつたりとせし所作の相手却て能く大當りにて七月まで入り落す江戸中に鼠の糞と夕霞の淨瑠璃本のなき所はないと云くらひよし原揚屋町に油紙の多葉粉入に路考訥子が夕霞の畫をすりしを持ぬ人はないと云ほどの事なり正月三日よりの狂言をたゞ三幕だし七月迄の大入實に古今無双と云べし是より前訥子頼兼にて桶屋と成籠をかけながらの仕内自然と大様に下卑ぬ仕うち市村座にて大當りその後勘

三郎座中の顔見せ名古屋の狂言柏庭不破伴左衛門新水荒獅子男之助十町其中にて訥子は頼兼にて屋形をいでやつすがた淺黄頭巾袖なし羽織にてくらやみにて全盛のくるは咄したひひとり藝にて大當り成し此狂言は京都にてむかしの名人坂田藤十郎傾城柳の糸といふ狂言大當りにて三度迄出して當りを取りなりそれを訥子は工夫を以當世に合ふやふにさりやくして勤し故少しも骨を折らず口計きゝて當りを取りなり

一梅の由兵衛は享保十九年の春是も京の次郎にて富りを取宗十郎頭巾とて流行せしは是より也長吉は中村吉兵衛が子吉藏女房小梅路考なり夫より以上に三度せしにいつとも當る中村座なり

一寛保二三年の比市村座益狂言四目結家督定といふ狂言二番目佐々木三郎にて沙燒藤太夫が一念とり付しと藤太夫と佐々木問答言舌のつかひわけぞつとするほどによりかりし也

一延享三年大坂淨瑠璃座竹本芝居にて忠臣藏新淨瑠理一鉢訥子其前年大岸宮内にて歌舞妓の大當り別して祇園町生醉大當りなりし故訥子にて作りし淨

瑠璃なりし古今有まじき大岸なりと評せし故操座の作者も忠臣藏を作りし也其年間もなく歴々の太夫竹本座退散せし故大坂にては始は忠臣藏ははやらざりしと云然るを江戸にて翌正月肥前座にて興行せし九段目駒太夫大當り故市村にて五月より忠臣藏山良之助に新水師直九太夫二役魚樂若狭之助と天川屋二役十町本藏定九郎二ヤク海丸お石勘平おその梅幸お輕力彌市松鹽治判官龜藏千崎座本原郷右衛門津打門三郎等なり中村座にては訥子由良之助中島勘左衛門九大夫少長かん平余太郎おかる當浦おいし柏庭天川屋澤村喜十郎定九郎市川宗三郎本藏先右之通也忠臣藏は市村一の當り也十町二役當り海丸魚樂も當り也市松おかる梅幸勘平當之助何れも評判よし然る處中村座にて狂言重忠訥子にて生醉をせしに當りと云程にはあらねど雲上なる生醉狂あらばかくもあるべしと評判よかりしに間もなく其夏忠臣藏一統にはやりし故に中村座にても忠臣藏右の役割にて出せしに肝心の由良之助春も生醉又七段目の生醉故少し見物の目にしむたりしが左ほどにはなかりし右之通一鉢訥子は仕

出し狂言の當らざるは時也と云べし去ながら九太夫を引よせ四十四のふしづの段は言語に絶せし仕うち惣身にこたへしなり訥子も春の重忠の生醉には骨を折勤し故屈侘なしにせし也實に名人の心いき成と芝居見功者は甚ほめたり都て柏庭訥子には名人上手の聞へ計りにあらず云に云れぬ妙なる所あり見ざる當世の人は偽とも思ふべけれど中中口筆にも述がたき意味有としるべし予が見し訥子仕うちにては大友常陸之助の謀反人油屋庄九郎頼兼の簷近松門左衛門京の次郎伍子背伊勢の三郎今熊坂赤澤十内今坂小栗大部好色一遍上人佐々木三郎小野道風狐忠信いがみの權太平親王將門の七役就中油屋庄九郎京の次郎梅の由兵衛など古今無双の當り也生膽は路考新四郎宗三郎伊三郎勘太郎訥子一座の當りなり訥子一分の當りと云ふは右に云所也何れも筆端に盡しがたき名人と云べし去により上方にては無類と計記して巻頭に居へ江戸へ下りては大極上々吉無類澤村宗十郎と出たり柏庭と引合にて柏庭は根生と出したり實に甲乙なしと見へたり(外に訥子が階子蕎麥と云事ありはし

この數ほどけんどんをばをならべ置一段ふみかけるより上まであがるうち七膳にても九膳にても残らずくひしまいし也尤汁はかけ置也)訥子晩年に及びし比森田座甚役者少なく何卒取立くれ候様にと勘彌達て頼みに付顔見世より森田座へ出し立役は坂田藤十郎(二代目)女形は嵐吉彌山下宇源太くらの事に中々狂言は出来まじと云しに訥子尤也しかしそこが水物也我まづ骨を折て見んと將門次に中納言匡房座頭の政市奴政内めのと政木百姓政藏儀藤太秀郷七役共扱々目を驚かしたり惜むべし二丁町ならば大入大當りなるべきを思ふ程入なかりし別て將門はみすのうちより出て貞盛(勘彌)と對面詰びらき自然と威有てたけからずしかも物凄くさのみ恐しき顔にてもなく少し薄青き顔色眼のふち少し燕脂のあしらい計なれ共たゞ物凄き躰實の將門もかくやと思ふ程なりし秀郷は別して綺麗さ手強き詞に述べられぬ意味名人の藝はかかる事ならんと覺へたり柏庭訥子の兩人は至極の名人と云べし
私云近來上手々々ともてはやしたる高麗屋錦考

(始瀬川金五瀬川金次市川武十郎市川染五郎市川高麗藏松本幸四郎)榮屋秀鶴(中村仲藏中村若太夫傳九郎舞鶴弟子にて子役より仲藏と號ししはらく道外形にうつる夫より實惡にて大ひに當て通し一旦中山小十郎と號し又中村仲藏に返りて死す)紀伊國屋訥子(二代目宗十郎の實子初名田之助甚以て上手くともてはやしたれど江戸の目にては未上手にはいたらざりしなり)瀧野屋新車など尤下手にはあらざれ共元祖訥子などにくらべ見れば中々以甚の相違なり今の人にみせたまきは四天王と云内に柏庭訥子也一向よねや器用計にてはさらにいかぬ事と見へたり

元祖

十町

一親子は元祿より正徳まで江戸敵役の巻頭黒上々吉にて敵ながらおかしみを兼たる藝故人殊の外悦びしときく十町は實子にて子役より奴荒事を勤め成長して藝をしあげ朝比奈は傳九郎このかた也と呼

れ當り狂言數多し享保の始上方へ登り奈良迄も行て藝を修行し三四年目に江戸へ下り又元文の始に上方へ登り寛保元丙年に市村座へ元祖路考と二所に下り二年勤め夫より中村座へうつり三年目秋狂言今川忠臣傳に寺澤市右衛門役にて病氣翌年病死せし也娘は存生のうち萩野伊三郎が妻とす二度目の上り上方にて大上々吉にすゝみ一生の當り狂言は國姓爺和藤内は市村座にて大當り也中村座にては柏庭和藤内さぞよかるべしと思ひしに存の外廣次當りし故柏庭はさのみ是はといふほどの事もなし廣次は大當りなり此ほか唐金茂右衛門百姓十作黒澤忠右衛門山井ヶ濱忠郎大森彦七鬼王のしうたんいつとも當りしなり若盛の頃大森彦七にて赤つら上下大肌ぬぎにて尊氏小川善五郎を諫めかね琴をひかれしは大に當り也都て藝風大陽にこそつかず仕うち大きく實に舞臺一ぱい有し様なるは又外に仕手なし若盛の時に木下藤吉みすの内より奴姿草履取の出松下嘉平治に小川善五郎兩人共に評判大によろし此廣次若盛は我間に合す故に具に記さず

一とせ鬼王にて宮根の如右衛門と云吃の百姓女房は仙石南次郎にて反魂香の又平の仕うち甚だよくみなく感心したり所作は不得手にて東金茂右衛門河東ぶしにて酒中花當りしは妙といふべし其身に不相應の役もよくはまりしかも當りを取しなり婚禮福引名古屋には由比ヶ濱忠郎路考(元祖)と兄弟の名のり愁をふくみし藝名古屋三郎左衛門いかかと一座も見物も思ひしに不破伴左衛門柏庭を打擲別てよかりし其後延享元年子顔見世中村座にて一番目尊氏となり大森彦七は鬼次にてむかし十町のせし尊氏へ異見琴の場大當りなり扱々面白かりし大詰に柏庭しの塚の青龍刀を持て暫く十町尊氏にて魏の曹操の姿にて十二口の玉の冠白ねりの唐人衣裳十町肥満の大兵ゆへ十三端かゝりしと云二番目は竹原大彌太を勘翁由左衛門と見あらはす仕内十町見あらはさるゝと無言にてつゝ立上り矢筈かつらを両手にて一度にぐつと亂しての勢ひ大陽にて甚目立し也上方にて作り方より佐の源左衛門の役を付しに一義にも及ばず勤し所至てよかりし也いかにも四天王と立られしも尤也何れに

上手名人といふべし

薪水幼名篠塚菊松後坂東彦三郎

一實父何者か詳ならず大坂の上手篠崎次郎左衛門が甥のよし始は菊松と云へる若衆形なりし元服して坂東彦三郎と號す第一美男口跡よく大坂にて大經師茂右衛門の役より若手のきゝ者となり三十計の比京へ登り家老役と成繼母と悪家老の悪をあらはす大に當り京都三四年も修行せし由江戸へは享保の中頃市村座へ初下り評判よく翌年も市村座に居なりにて甲場樂の狂言に初下り嵐三五郎(近來の嵐三五郎雪子が父なり)山本勘助薪水は直江大和之助兩人とも大當りなりし其後中村座へうつり柏庭訥子十町相手にて不破伴左衛門武道の事大によし家老役は持前なる上に坂上田村丸秩父庄司工藤鬼王角田川の山田の三郎楠正成備後三郎佐藤忠信など何も當りしなり全體物の當りを好まぬ性大器量にてこせつかぬ藝なり武道太刀打は外に似せてのなき名人なり

一岸柳島の狂言は元文の比大坂にて岸柳に藤川半三

郎月本武者之助薪水にて大當り江戸にては元文三年かと覺し市村座盆かはり志田の狂言に岸柳島を切組し也一番目海丸しらが岸柳薪水は志田の左衛門なるを岸柳切殺し一番挑灯に我名を書て岸柳立のく仕うち二番目月本武者之助にて岸柳と途中に出合岸柳しごくうやまひ何とぞ御前の立合にまけて給はれとたのまれ其次に岸柳をねゝふ女兄弟母共にかくまひし所へ岸柳上使に來り大高慢にてきせるにてわが手の内を自慢し枕をすぐに武者之助へ投付るを扇にて見事に打返すに岸柳抜て打かけるを扇にて抜身を打落し又切かくるを引はづし胸ぐらを掴み抜身をさしつけ岸柳を取て伏るその早さ實にまたゝきの間もなかりし大切敵打の後見まで大當り皆々感じ入たり江戸にては此時計り一度也其後年へて海丸が團十郎に顔見せよりなるべき秋狂言市村座にて岸柳島をせしが武者之助に梅幸岸柳海丸にて手に入し藝ゆへによりかりしされ共梅幸には少し手ばりしやうにて見ごたへなかりし也また近比白猿岸柳にて門之助武者之助是は相應なりし然れ共武者之助は薪水打つけの役と見へ

て外の者には相應せぬと見へたり以前市村座にても十町魚樂せしかども魚樂が岸柳随分よかりしかども武者之助は薪水の外は相應せぬ役と見へたり一享保二乙丑年霜月芳澤富浦市村座へ初下りの時女楠化粧鑑と云狂言一番目薪水大森彦七にてから舞臺に震動雷電するに切幕の内より薪水大音に推參なり正成此盛長が催す處の中樂に障礙をなさん杯片はら痛し叶はぬ事及ぬ事ひけふな逆るか引返して勝負をせぬか此彦七がこわいかと呼わり立烏帽子素袍の片ぬき片手に抜身片手に小鼓を持て空中をにらみ付ての出端實に空に相手の有やうに思はれて見物みなく屋根を見上しと也二番目もやはり彦七にて薪水あやめ相手の實事武道とかく申されぬ仕うち兩人共に見ごたへ有し也夫故にあやめは不當りなりしかども薪水當りし故入り落ざりし也二番目には訥子杉本左兵衛泣男よかりしゆへ彼是にて閏十一月持こたへ大切に座元龜藏伊三郎三人彌七珍らしく十二月五日までせし也中村座は其顔見世は役者揃にて柏庭に藤川平九郎初下り鬼薊の大當り其外路考仙魚兄弟市松鬼次宗三郎少長す

ぐり立たる立物を引請市村座のみ入り落ざりしは
薪水訥子の功ならずや此彦七の役は自分にも得意
の心と見へ京都にても出して當りしなり二度目の
京にては少し顔見世ゆへ江戸風の工夫をつけて當
りを取りしと上方者の咄し也

一 訥子申年以後は白髪まじりの殿の伯父悪がりの
仕うちに薪水實家老役の狂言はいつとも見物悦
びし也何の狂言か忘れし市村座にて柏庭は奉行職
訥子は伯父の實悪薪水は家老はかた左右衛門と云
役にて薪水を柏庭訥子吟味の處佞人どもはびこり
をればわざと寶紛失と申ふらし實は拙者めが肌身
放さず懐中能ますると懐中より取出し三ヶ條の
不審さつばりと云ひらく仕うち殊の外よかりし故
柏庭訥子に向ひさすが一國の執權職たるはかた
左衛門併は餅屋じやと譽し初日はかりそめに薪水
を譽んとておどけ半分云し所初日殊の外悦びし
とみへ聲かゝりし間夫より毎日と云しと也

二 二代目坂田藤十郎(始定四郎)薪水が藝を甚信じ折
折聞合などせしが或時芝居休のおりから薪水宅へ
來り問しは實事は至てむづかしき事と存るなり我

何とぞ貴所ほどにせんと種々工夫して勵むといへ
どもとかく下卑たやうなる心持になり己れと扣か
へめにする心ゆへに上達せずいかすべきやと問
しに薪水少し笑をふくみよも心付れし成ほど
其はず也其もとの藝は上に人を置て下知をうけて
する藝風ゆへに見だてなし折角問る、故に我ら心
一ぱいを云程に必々立腹せずして能く心得られよ
御自分の藝實事師の家老職と云心にて出精とは見
ゆれども一體が我々より器用過こせつくが癖なり
それ故太平記ならば恩地左近にはよけれども楠は
相應せず曾我なれば本多の次郎には打て付なれ
共重忠にはなられず近江小藤太はよけれども祐經
には及ばずしかも役をつけず何とぞ工夫して重忠
が相應すれば本多の次郎は出来るなり去とてはお
しき事なり工夫あれと云しと也夫より藤十郎も返
へす、工夫せしかども出来ぬと見へ其顔見世よ
り實悪になりてよかりし也名人の見る所少しもた
がはざりし

一いつの比か柏庭宅へ訥子十町薪水來り種々雜談
の中に立者の心いきなどとりづに咄しせしに訥

子は柏庭に向ひ我等は中年の役者にてかく云は
おにがましけれ共都て立物となりては餘りにせせ
せとして狂言毎に當らんと心がけると程なく追込
評判薄くなるもの也一狂言大に當ると三四年もそ
れにて持もの也其内又工夫して重ての當りを心が
けるがよしと思ふなりと云しを柏庭聞てそこが立
物の極意といふ物なり去ながら一ツ當て三四年も
持内に重ねての當りを工夫する心なれば至極なれ
ども大方は一ツ當ると是よりもはや上手形氣にな
りいつも當ると氣がゆるみたがるゆるむと一生中
手にて朽果ると知るべし又藝の風にもよるべし足
下薪水我々などは其心得にて随分よし十町などは
勝れて大場なる藝なれば少し斟酌もあるべきかと
いへば十町云我とても國姓爺和藤内東金の茂右衛
門木下藤吉由井ヶ濱忠節大森彦七郎掛塚の十作な
ど是迄一分の當りはやうく六七度ならでなしそ
れに今以人が上手と噂するを思へば大はくの藝也
とても同じ意味ならむといへば薪水云いかに我
等も若年の昔し大坂にて大經師茂兵衛が當りしが
出世の始也今思へばそこ耻かしくよくはあのごと

その藝をしたるよと我ながら思ふ也其後岸柳島は
大坂にて藤川半三郎を相手にし京都ともに兩度迄
當りし我少し京都にては工夫もあれど第一は半三
郎が極くにくていにしたりし故に大に當りし也唯
今訥子のいわるゝがごとく其當りにて四年ほど何
も當らね共しかも譽られたりし也とて四人色々藝
道撰せしを折節勝手に居し杉本玄吉といひし醫師
子に語りし也親く聞ざれば虚實はしらす面白き事
と云べし

私に云其比右四人を四天王と云ひしほど有て何
れも人品格別に口跡大音就中柏庭訥子兩人は至
て能辯にて少しもなまりなくつらね口上は柏
庭「事むづかしき云ほどきは訥子」と専ら沙汰し
感じたり訥子が師匠故澤村長十郎云しは三ヶ
の都の舞臺といふはことの外晴がましき事と
見へて未熟の内は幕より出るとたれくも手
が邪魔になる物なり上下なれば手はいへ手を入
れ又はゆきを揃へ下ヶ緒をいじりなどする也手
に氣付ぬよふになればそれが出世の小口なりと
我等初心の時に名人坂田藤十郎の咄也達人の詞

まことに妙と云べし然るに今弟子の喜十郎を見るに一向手に氣がつかずけふ此比の役者には去とてはふしぎ也後々は名人に成べしと云し是も又妙なり

(此段は長十郎親類の京都四郎七と云し京生れのものゝ手に語りしを記す)

市紅元祖團十郎才牛か門弟始市川團之助後に團藏

一元祖市川才牛(柏庭が實父也)が弟子也赤つら上下都て荒事の上手なり其上愁歎得手ゆへ主人の諫言の仕うちなどはさらに狂言と思はれずと皆感せし也一牀古風にて堅き藝故格別の大當といふ事はなけれ共藝大陽にて鮮ある人品故立物とは見へし也享保なかばにや柏庭と不和になり一旦は同座もせず團藏は三升の定紋に真中に一文字を引て紋に付し也享保十七年顔見世に和合一字太平記と云狂言にて舞臺にて和談せし也役は楠正成に柏庭「弟正儀に團藏」和談の意味珍ら敷當り也同座の訥子に初下り佐渡島長五郎三甫右衛門鳴見五郎四郎大谷龍左衛門女がたは路考に袖崎三輪野萩野伊三郎等

にて顔見世當り也其後元文三年河原崎にて閏月二八景清といふ柏庭は實は重忠にて似せ景清團藏は實は景清にて似せ重忠となり燠丸の太刀より雲氣の立しにて景清を見あらわす場なり大詰に柏庭は團羽の姿唐装束青龍刀團藏は張飛の姿にて兩人押出し見えよく評判つよし其後團藏は日の出の五郎八と云男伊達實は義經の臣熊井太郎を勤の内二月病死なり市村にては隅田川狂言に柏庭は粟津六郎左衛門にて渡し守のやつしにて市紅追善の口上表を催せり市紅は鎌倉権五郎景清鬼王青砥左衛門杯はいつともよかりし也根元江戸風の實荒事師にて少しもこせつかずいかにも大とり風の立物なり近頃死せし二代目團藏などは雲泥の相違と知べし

上に出す四人を四天王と云團藏を獨武者と云し也

海丸始松本七藏松本幸四郎市川團十郎松本幸四郎市川海老藏、俳名五粒海丸三升、俗木場の親玉と云

一元祖松本幸四郎は下總國ふま村小見川と云所の産にて一牀人品よく實荒事しうたんの上手なり數十

年の勤の内町人になりしは漸く五六度と云こゝを以武道の上手を知べし海丸は實子ともいふ其事さだかならず最初は七藏とて子役より娘方夫より女形となり享保十九年寅正月會我の狂言に頼朝の役女形にて大場梶原がせん義を遁れんと女姿にて銀杏の洞へかくれ洞の内にて元服して出一牀男よく大に目立しなり夫より翌年まで立役勤め享保二十年五月市村座杜若十二段に幸四郎今若にて三州鳳來寺元龍となり淨瑠璃姫に戀慕し姫の指をくひ切さもうまそふにくひし大ひに當りし義經に富澤門太郎淨瑠璃姫に瀧川歌川繼信に訥子忠信に薪水佐藤庄司に鎌倉長九郎五月よりの狂言九月迄入り落す當りし也幸四郎此役より色悪といふ名目は五粒より始し也其後岸柳の當は薪水の譜に記せし也清玄又悪の不破伴左衛門辰夜及御前惡禪師工藤左衛門は度々當りし也別て病氣の工藤は中につき大當り此所に一生の當りを荒まし記す七草四郎熊坂長範鎮西八郎乞食坊主高の師直(忠臣藏にてはなし)赤星太郎武者わつばの菊王にてのかたり寝姿の庄左衛門土左衛門傳吉(三度)平親王將門(秋田城之

助悪)条平内荒五郎小山の判官と百姓粹藏の二役(是は別て當り子供迄小山でござるく)とまねし也)八橋がぼふこん(女形にては中村慶子とつれ所作也)下河邊庄司が娘のぼふこんおんりやうにて高野山の檢岩丹波の助太郎といふ馬鹿大當り熊坂と喜三太のあはふ小の、道風熊谷次郎景清は年々見る人多かるべし此外にも子が見たるも數しれず今度にあらわすは藝にはかゝはらぬ事ながら海丸が氣性尖き事を予が親しく見しゆへに記す延享三年寅顔見世市村座にて鉢の木狂言に海丸赤星太郎武者にて仙臺萩を入れし狂言一番目五立目に赤星生醉の出に袴計にも、立紅葉の枝に吸筒盃をつけよろくと出て腰元役を相手にじやらくらからかに面白かりし時に地廻りの若者つみ物連中初日には中村市村とわかり兩方え入組もの共二百人餘も有しみなく芝居より渡せし手拭をかぶり切落舞臺際へ二三十人も二ヶ所三ヶ所に群立出る程の役者へ手を打てるなり此初日も左のごとく中役者迄手を打しに海丸が右の出端に一向静りかへりて手を打きたもなし尤ほめ口もなし目立て

いかなりしされども海丸さあぬ鉢にて其幕の仕うち仕舞其次六立目最明寺屋かたにて赤星が悪逆仙臺萩對決の所也薪水秋田城之助十町青砥左衛門兩人證據を出して檢議にかゝる時に海丸薪水十町の兩人の相手に向ひしばらく待て給はるべしと斷扱見物に向ひ兩手をつき狂言半ながらしばらく御了簡願奉ると口上をのべさて舞臺の眞中正面へ押直り地の若衆中に少々申分有此方にはいささか覺なけれ共近比は何も方拙者をにくまるゝ山兼て聞此方には毛頭覺へなしつらくせのわるきは生れ付なれば詮方もなし顔見世の事は此方共人々身祝ひの事云すとも承知なるべし然るに拙者一人に限り手を打たぬは遺恨有と見へたり少しも苦しからず存寄有衆中何人なり共只今是へ上り心次第にいたさるべし去ながらこゝは役所と云外々の御見物様方の御邪魔なれば拙者が宅は各方も知らるべし少しも逃かくるゝ我らにあらず幾人にも苦しからず只今にても來られは随分相手に成べしいかゞと大音に云しか共ひつそりとして二言の返答するものなし重てさあらば何も言分無しや

と又二三度いへども彌返答なし然らば藝にかゝり申べしと又見物に向ひ始の通りに躊躇し暫く狂言を相やめ申せし段御歴々の御見物様方へ對し恐入申候御免被成下候へと平伏し扱薪水十町に向ひさあらば藝にかゝり可申嘸御兩所にも御退屈ならんと挨拶し夫より藝にかゝり勤しな

此一件は予が廿一二の比にて晦日の宵より行二ばん目二まく打出し迄見物せしに神田明神前にて八ツの鐘を聞し也親しく見聞せしまゝ其趣を記す其夜仕切場帳元など打より若いもの頭とやらんを以て連中へ云通し海丸宅へ同道し和談せしとき

戯場とはいへども海丸若英の氣なくてはなるまじき事なり其比小田原町新場材木町四日市などの若イ者と號するは死生知らずの溢れ者芝居にても皆皆恐れし也然るを海丸右之仕合にて一統に我を折しと也此狂言役赤星は甚手強く薪水十町が手にも餘るよふに見へし甚面白かりし海丸一生の當り狂言は見し人あるべければ委細には贅せずたゞ役名を擧るのみ

- 色衆 一今若玄籠
- 一工藤左衛門
- 一小山判官と杵藏二役
- 一久米平内兵衛
- 一佐々木岸柳
- 一乞食ぐはん鐵
- 一鎮西八郎三度
- 一甲賀三郎
- 一秋田城之助
- 一景清數度
- 一夢の市郎兵衛
- 一荒五郎茂兵衛
- 一七草四郎二度
- 一油屋九平次
- 一丹波屋の助太郎後おんりよふ 高野山檢岩
- 一惡禪師公曉
- 一熊取と喜三太
- 一惡禪師公曉
- 一寢姿の庄左衛門
- 一高野師直三度
- 一不破伴左衛門
- 一山井正雪
- 一病氣工藤
- 一小野の道風

- 一谷淨るり
- 一熊谷次郎
- 此外も有べけれ共年久敷事忘却も多し予が見し所計りを記す名人の柏庭見立て養子となし名跡を譲しほど有て古今の上手と云べし
- 海丸 初町萩野伊三郎十町二代目
- 魚樂 此四人二代目四天王
- 白猿
- 中車古人 足業古人 秀鶴
- 新車門之助 中車今高助 訥子紀伊園屋
- 三升 錦考獨武者 錦考幸四郎
- 足業三津五郎 榮三 曙山源之助
- 右者近來より當時迄の四天王らしきを戯れに記す
- 二代目
- 十町 始辰松文七坂東又太郎大谷鬼次大谷廣治 號駿河屋始東洲後十町
- 一はじめ辰松文七とて人形座辰松幸助(後八郎兵衛)門弟なりし男ぶり大がらにしてしかも美男也し市村何 弟子と成坂東又太郎と名のり中の土位にて今の市川宗三郎花井才三郎位の役者也柏庭與右衛門の時監物太郎はふとう丸後に井戸へは入富澤門

太郎に鎗にて突れ名乗合しうたん廣次に似たりとて大谷々々と聲かゝりし也夫より朝比奈を年々つづけて出来し二三年過て中村座へうつり鬼次と改め十町の弟子と成り延享二年丑の顔見世中村座へ藤川平九郎初下り一番目熊の、別當辨眞が子鬼若丸辨慶が幼立赤ぬりの子供姿大によし二番目鬼王庄司左衛門にて風折本石赤ぬりの場々路考が住家へ小兒を抱き雪降りに来り乳をもらひしに義理あれば乳は飲されずと柴の戸をへだて、路考うれひ鬼次後には悪たいまじりの愁歎翠眞の春會我五郎役一番めはさしたる事なく二番目夏祭を入し狂言團七九郎兵衛藤川にてしうと殺し大當り鬼次は五郎にて一寸徳兵衛藤川の出合大によし是より前にも中村座にて大森彦七にて尊氏に諫言赤ぬり上下大はだぬぎにて琴をひき元祖十町が譜の通り夫より二年程すぎ市村座へ廣次と成出累又太郎と成大によし其時名題出世紅葉狩と云狂言小名題に若武者百万騎といふ小題鎮西八郎に海丸能登の守範經魚樂長兵衛山本京四郎より政に市松猪の早太に若太夫渡邊長七に津打門三郎競漕口に薪水平

惟茂に座元女がたは仙魚小六市松富之助梅幸實に若年の役者揃其後同座にて青砥左衛門武知兵庫之助石谷實右衛門奴の友藏何れも當り也其冬喜代三郎江戸著おそく漸く十五日より出勤ますく大入大繁昌子も三度見たり七ツ半比出六ツ前にゆかぬと見物ならぬほどの大入也以後魚樂との角力いづもく大入なり五度と覺し也始ての角力薪水會我の太郎にて行司の役飛金の孔雀もよふの上下目を驚せし也中村座にてすがはらの松王丸當し也武智は凄みを兼てせしゆへ一入大入其後市村狂言初花角田川に山田民部左衛門切腹よし二番目弟山田の三郎にてやつし女郎屋若イもの太鼓持四平實は久米の平内魚樂やば大臣坂東三八をてらす仕うちよし引かへしの幕新町九郎助稻荷の板塀に魚樂とやみ仕合の大だて花々しく大當り也此狂言の其後へ柏庭鳴神梅幸女形雲のたへま兩人大當り其翌年春狂言には下り嵐七五郎團七九郎兵衛大惡十町は鬼王にて一寸徳兵衛もとりの觀音を團七吞し故是非なく切腹し雨落の樋竹を切と水おびたしく出るをその水にて團七が傷をあらひ觀音

を手に入と光明さすを二階より喜代三出ると顔を見合かけ行幕大出来その、ち市村座にて鬼王にて重の井新左衛門となり女房月さよ仙魚娘のじねんじよのお三王子路考也夫婦して娘を姫君の身がはりに殺さんとのしうたん狂言とはさらに思はれず泣かぬものなかりし上手同志の出合格別なり其後程の愁歎なし二番目宮古路加賀太夫と云ふ淨瑠璃語りの太二持例の魚樂喜代三と三人の出合見物大ひに悦びし也是より前五人男の對面十町ほてい市右衛門實は鬼王肴屋にて雷庄九郎魚樂實は景清惡にて金を奪取鮫鱈の腹へ入し故十町いろく仕内有て鮫鱈の腹を切破ると金出る無間のやつし大當り也其夏病死也江戸中力を落せし也近比の丸屋十町は二代目十町弟子にて春次と云し也別して中村座にて春狂言兩國橋の髪結床魚樂と隣り合せ大におかしみ有扱々思ひ出せば今見るやうに面白かりし一生名題の當り狂言多し何に近來の上手と云べし

天川屋義兵衛 松王丸 梅の由兵衛
齋藤五 山田の三郎 鮫鱈むけん
大概を出す其餘かぞへがたし

魚樂 仙石屋下號す
一寶永より享保十六七年の比迄道外方の上手仙石彦助實子にて始木挽町へ出中役者也閏月二人景清の狂言に範頼となり謀反あらはれ井場の十藏坂田藤十郎に足を切られ無念の仕うちより其後中村座へうつり又藤十郎と同じ藝を出され大ひに人の目がつき其冬市村座へうつり翌秋梅幸が伏見のけんくわの時姉和平次相手薪水ゆへ一しほ評よく其後延享二寅年市村座顔見世を伊樂入道と梶原平藏の二役大切に伊達の島右衛門本名鎮西八郎大によし翌春初工藤と佐の、百姓次郎左衛門にて伊三郎に殺され早替り祐經二階よりの出大に見物のうけよく其後十町と度々のすもふいつとも見物悦し也獄門庄兵衛釜屋武兵衛兼平内島川太兵衛始終市村座にて春狂言男文字會我物語慶子を相手に男道成寺大當り又市村座にて乞食坊主訥子との出合次第

武知光秀 河津三郎同相模の場五度
朝比奈 鬼王新左衛門 黒船忠右衛門

次第に立身せしに十町が死後に相手のなきように見物も思ひし故に見るには合なく木挽町へうつりて安達ヶ原宗任と岩手ばやかりしに程なく病死せり今の魚樂も助次の比より評よく親によく似たとて四五年はもてはやせしか共見物だんく若くなり前の魚樂が仕うちをみなく忘れしとみへて次第々に評うすく今は中村座の頭取にて養子に助五郎をゆづる出精すれ共覺束なし上手も幸不幸有と見へたり

釜屋武兵衛 姉和平次 石川五右衛門

鎮西八郎 久米平内 どう三郎

蘭平 男道成寺 百姓次郎左衛門

髪結 工藤 獄門庄兵衛

坊主檀齋 松王 宗任

路考落村屋

一京都生れのよし幼年より二十計迄娘がたにて勤し處いかの事にや商人となり三十計迄は京都夷川通りに居たりし夫より心を起し女形と成瀬川菊之丞と名乗し也瀬川の名は路考工夫にて付し由其

譯は豊臣太閤朝鮮征伐の軍士の中瀬川采女と云武士菊と云ふ妻をめぐり今日婚禮せし其翌日急に朝鮮へ立べしとの嚴命ゆへ名殘おしむ間もなく異國の軍旅に赴し妻の菊甚だ別れをおしみ文こまんとしたゝめ公の飛脚便りに彼地へ遣はせしに海路難風にて其船破れて乗たるもの并に荷物連も行方しれず流れうせしに菊女が認めやりし文箱は肥前名護屋なる太閤の陣營近く漂ひ來りしを番人取よせかれ是と沙汰せしを太閤の聽に達し右の狀箱を取よせ自分取出し人によませつくく聞れ甚貞節を感ずるの餘り瀬川采女朝鮮の軍役をゆるし歸朝すべしとて早々歸り夫婦永く榮しと云全く菊女が貞節より起りしと云ふ菊女が操を學ばんとて夫の名字瀬川をとり瀬川菊之丞と號せしが名人と成しなり路考一癖心がけよく平日男の行跡なく始終女の藝のみにて終りし也上みにては始さのみ役も付すやうく上上地位にて在し無間鐘狂言初の下りは享保十五戌顔見世市村座へ下り器量よし也翌年亥春婚禮福引名古屋と云狂言柏庭訥子十町故別て面白く路考山三女房かつらぎにて山三の難

義を救わんと手水鉢を打つ無間の鐘始る大當り也其後上みへ行ても當りし故ひらがな四段めに切組是又大ひによし全く路考の功なり翌春狂言相生石橋よし其次始終入り落す當りづめなりし中々當世役者の及ばぬ處なり其後市村座へ移り柏庭十町相手辻君などの當り云もおろかなり元文元年の比上方へ上り寛保元丙年の顔見世市村座へ下り女業平あしく翌戌春會我に座元と江口西行よく其次石橋よく十町薪水素面麻上下にて紅白牡丹の造り物兩人持出薪水口上にて十町兩人始終後見扱々花やかなり其年石橋を見ぬ人殘念がりしほどの事也翌亥春會我に佐藤庄司が娘忍ぶなれ共大磯の女郎屋三浦屋の三輪と云後家十郎と色事全生付嫉妬ふかく捨おくと髪一丈餘も長き故少し延ると切て捨し故後家詣にせしと云が狂言の筋兄忠信薪水色色すれども聞入ぬ故兩手を縛り置しにとうと祐成祝言の盃すると聞二階より屋根へ上り盃の酒飲さぬくと氣をやるなり其酒をうすどろにて皆々吸取飲はず仕うちぞつとする程に凄く二ばんめ大詰に女鳴神白雲(澤村歌菊)黒雲(佐野川千藏)楓紅

也兩人聞たかく聞たぞの出にて路考出は緋の衣淺黄の花ぼうし片手に梅香燻片手に水晶珠數をし手に鈴をふり殊勝の出端壇上へ上りしはしはて菊五郎齋藤五の若衆姿扇にねりの羽織いほりに木瓜の紋付たるをかけ松むしの鐘を打ての出うつくしづくめ棧敷もしんとなりし其跡は柏庭の鳴神の通とはいへども路考も梅幸も十分の色けあり故に實にくいんでもつと云ふは此事なるべしと諸見物酔るがごとく見物したり大切に岩屋にかくし置たる逆澤瀉の鎧をとらんと藤棚より岩屋へ上り注連を切ると大雨雷電し菊五郎上り兼し藤棚の急なるを腹ばいにて一さんにをり藤棚の留りにてくるりくるりと二ツ中がへりしふたいへ飛をり鎧をかへ一さんに切まくへは入る身のかろさ我を折たり路考大荒にて五郎龜藏簀箆大竹持にて路考本舞臺へ押かへして幕大入大當りとは是を云べし其後兄弟夜討の時も十郎に取付惱す仕うち路考六尺計有油けのなき亂髪かづら白紗綾に薄曇と云空色の雲をちらし白むく五ツ重ね白縮緬のしごき帯一ツたいくらくしてうすどろにて切まくより出し五

月節句過ながらさむけ立やうなりと云者多かりし也とい白衣観音に成佛迄座元何虹は三浦が筆の朱鐘馗の靈像兩人押出し鐘馗と観音も至てよかりし其まゝにて七月五日迄入り落す五日限りに仕廻し也十五日より後日東鑑といふ狂言路考暑氣中り故出すゆへに當らざりし也

一跡先になりし右は二度目に市村座へ十町(元祖)と一所に下り其翌々年鳴神なり二度目の下りは寛保元丙十一月なり姿繪女業平といふ狂言大江岩摩左衛門が女房うらは也左衛門謀に髪を切二ばんめ業平と偽り勅使に來りしを大伴黒主が亡魂うらはにのり移りいるともしらす惟喬親王方の者色々の事を問かけるを少しも滞らず和歌六義小倉百首の五義色々惟高(市山傳五郎)に答ふる辯舌皆々忙れる中願の通り傳授の一巻請取る仕うち大出来々々々一享保四卯年春狂言市村座玉櫛筒化粧會我に小性吉三に路考八百屋お七萩の伊三郎お杉魚でつち彌作實は小柴掃部若井半七郎久兵衛山本久四郎釜屋武兵衛に中島三甫右衛門なりし始作り方より路考に小性吉三實は木曾若君清水冠者也と役割せしを

路考作者に向ひわれは女形なり女一通の役なら勤むべし若衆とても男也よつて我が勤る事ならずと承知せず作者路考若衆形珍らしきを一種におみ立し狂言を路考勤めざれば無益也さ候は右の小性吉三郎本妹女にて山吹御前なれ其源氏をはいかり世を忍ぶために小性と成しと云事に改申さば勤らるべきやと問しに本妹女の役ならば勤べしと滞なくつとめし也此狂げんお七がれんぼのうけはづし始終女の妹崩れずしかもぬれ事のあんばい言葉に絶せし也一番目大詰に頼朝の御殿へ工藤伊豆次郎其外梶原ならび大名四五人吉三郎を呼出す出端空色の素袍小結の烏帽子太鼓を持ての出先花やかに珍らし工藤兄弟其外問かけるを一々すいやかに答る言舌大によし扱旭のみはた寶塔にあるをばい取んとかゝるを近江小藤太坊げるを切すて段々の物語りにとらが父小柴の前司と名のるをきのとくと思ひ入は實の女の仕内感心々々さて寶塔へかかると女といひ今小藤太に手負せし血汐のけがれにて髪長くなり女と成仕うち大に當りし也と二番目お夏にて清十郎座元兩人道行所作面白かりし

路考は地藝はせぬ人の様に今の人は一向に見ぬ人の評と知べし其後中村座にて羽衣會我に天人所作名残にて古人になりしは實に惜むべし年の事を能しりたる者は七十三なりと中々以て所作地藝おどけなく娘のごとく前々上手の女形年たけると藝じはからくなるを少しも其意味なくいつともぬれ事娘がたなどやはくくと生娘のごとく見へしは妙と云へし北本所押上村大雲寺に葬りし也元祖廣次も同じ寺也二代目路考は當時の人能見て藝の當りも知るべければ是に略す又若盛にて病死今以諸人おしめり二代目薪水とお七吉三郎美し揃見し久は今以云出して回向の種となれり是又中年過なば名人なるべし元祖路考の心いき當り藝紙筆に盡しがたし大昔の事はしらす江戸にて古今無双の名人と云へし三代目今の路考一通りならぬ上手實に三代連綿せし相續の名家也

仙魚 瀬川菊次郎元祖路考弟也

始京大坂にて若衆形より娘がたへ移り享保十七子霜月市村座へ初下り也市川宗三郎と一所に下り同

座の勤也東山殿花舞臺と云名題座組は廣次(元祖)薪水杉曉(元祖)中村吉兵衛女形は三條勘太郎早川新勝山下龜松也仙魚は出雲の國の生れのよしされ共當りといふ程の事もなかりし翌春狂言松竹梅根元會我にお七仙魚吉三は五郎にて勘五郎也檀七矢倉太鼓を打處大によき當りしよし予は病氣にて見ず残念なりし仙魚は路考と違ひ器量さのみ美しからねども一藝藝にはまはりよくお七三度お杉三度いつともよかりしなり仙魚が地藝は格別の心いき有て言にいわれぬ意味有其證據器量美質と云程にてはあらね其傾城事よく貞節孝心の心意氣至て上手なり寛保元西七月市村座四目結家督定と云狂言に一番目長崎丸山の太夫連山のおかしみ少しも當氣なくして求すしておかしかりし切に山吹御前の武道はつきりとして見對せし也二番目は篠田庄司娘おせん弟五郎龜藏と非人敵打女菊地は海丸女荒岡に座元土手塲大當り也敵は市山傳五郎兩人共大當り也仙魚は孝心の仕うち傳五郎は大兵にてにくてい奴にて折をおかじみを云し故兩人持合の當り也仙魚は不當り不入の時も少しもそへげ

す身にしみて勤し故見物のうけ格別なりし其後市
村座役盡し名護屋曾我に傾城かつらぎ仙魚不破伴
左衛門海丸山三郎に龜藏伴左衛門大悪むほんの
仕うちかつらぎに戀慕してくどけども山三あれば
一向返事せぬを伴左衛門色々心を盡し衣装おびた
だ敷送り元より桂木は山三に金を入し故衣裳なき
故着してゐる所へ伴左衛門色々とき指切て送
れ共受す大に怒り着て居る衣裳并につららの内の
も皆此伴左衛門がやりし也是非なびかすは残らず
返すべし上林のかつら木と云立派な全盛の太夫
が裸で道中もなるまひとふた／＼とそにくさ仙
魚無言にてすつと立ち着たる小袖を残らずぬぎ
つららの上へ重ね其身はねりのじゆばん一ツにて
ふるへる場古今希代也伴左衛門いよ／＼怒りつ
らの衣裳取出し仙魚がぬぎしも一處に四方へほう
り出す所淺黄じゆすがく裏水仙の縫の小袖夜の藝
ゆへ蠟燭二挺ならべし上へかゝり見る中にくわつ
くわつともえるを仙魚も海丸も見て少しもかまわ
ず彼是するうち後見みつけて早々もみけしたりか
よふの事今の役者ならばいかにするや覺束なし其

後柏菴仕まひの助六の時揚巻は仙魚意休は宗三也
柏菴老後助六ゆへ見物もいか／＼と思ひしに仙魚揚
巻の仕うち至て花やかに若々しくせし故柏菴も
はへし也其狂言一番目重忠奥方縮笠御所景清女房
あこや(二代目)あやめなどの局澤村源一郎が悪
ば／＼を切殺し死がいをかくしてゐる所へ仙魚扇
をかざして假屋の幕の内よりかいどり姿なきなた
かいこみ見るともしらすあこや立戻り夫と景清
が人形の繪書し板札を切取小わきにはさみ静には
しが／＼を切まくへ入らんとするを仙魚聲かけ景
清がつまあこやまてと呼かけるとあやめふり返り
見るとつか／＼と本舞臺へ戻り兩人の立廻り諸
見物息をつめみしに仙魚ほぶどふ丸を對面のしる
しに連行と渡し重ねての見參と言とあこや情はな
さけ主君の仇の片われとしゆり劔を打を仙魚狩場
の切手にて請とめ別る幕まくを引と見物一同
に溜息をつきしにどつと云たりしはらくは鳴やま
ざりし也何者が切落しより譽られぬと云し也是全
く兩人共名人の出合柏菴訥子同日の談也と其比の
人みないひし此次に記すは虚實はしらね共路考か

たへ出入醫師少し頼み筋有て予が方へ來りし其者
の談也ある時仙魚兄路考に向ひ女形の心得はいか
が會得すべきやわれも随分と心得て勤れども貴兄
の様に和らかに藝につやの有やふにならず其故に
聞なりと云しに路考答て尤の不審也古人芳澤あや
めと云し女形はとかく傾城事さへ能出來れば外の
事はいか様にもなる物也傾城事があしければ餘の
事はよくても末のとげぬ物也といひしはいかに
も名人の詞感心せり我はそれを忘れず其外はをし
へる事もなし其方は其方の得手たる所われは我が
得たる所格別也去ながら女形の字に氣がつけば甚
下手に成べし形の字に氣のつかぬやうに／＼とわ
れは心がける也と云し仙魚も成程尤也と云しと也
名人の語おもしろし

盛府 佐野川市松
若衆方女方一代の上手

盛府は佐野川十吉(始萬菊上手の女方也)弟子にて
京大坂にて子役の時より名高かりし也其後若衆が
たにて元文五申年二月中村座へ下り菜花曙曾我に
高野山小性久米之助評判よく次に十二段半若のや
つし牛にのり笛を吹し處よく二年餘も勤し處少し

譯有て二年餘りも休み夫より市村座へ出勤又々評
判よく兩座の内にて若衆形女形當り多し女形にて
は世話事面白し若衆は楠正行にて師直(市川宗三)
と詰合能市村にては曾我五郎狩野の雪姫又頼の小
三又訥子三度の梅ノ山兵衛長吉と頼宗公又おぼこ
人形所作何れもよかりし十年餘の勤にて木挽町へ
移り其年も役者すくなく團藏十年餘り上方に居て
のぼり團藏しばらくのうち女形にて盛府役大に評
判よし夫より三年めに古人となる一躰器量よき故
男女ひみきおびたいしくふれし次郎よく翠春八百
屋娘お七と佐の次郎左衛門實は樋口次郎佐野の
百姓次郎左衛門(助五郎)を殺すさの、船橋の場其
次八橋が首を打柱若の八橋の仕合大當り也其後夏
すがはらに武部源藏役よかりし其役より病氣にて
九月病死せりおしまぬ人はなし藝風は二代目中車
に似たり中車が敵役をきめる氣味よきを見て伊三
郎を思ひ出せし也盛府初町は名人にはあらねども
一代の上手なりにくいほど面白き所の有る藝なり

中古戯場説巻下

附録

都て伎藝の事は見たる人計の云し事は當分は格別後後までの標的にならず今こゝに擧る所は古人名人上手の云しことのみ見聞のまゝをあらはす舊年の事ゆへ忘却も多からん猶識者の訂正をまつのみ

耳塵集

寶永より享保の中頃まで京都大坂の舞臺をふみて始め道外形後に立役金子吉左衛門と云し貞享

菅浦草

元祿の頃の名人上手の話を集め記せし書也

元祖芳澤あやめは評判記に極上々大吉位より三ヶ津藝頭と云位をとりし古今女形の名人二代目

あやめ山下又太郎三代目あやめ中村富十郎などが實父也是も伎藝の心得を記せし也

訥子口傳

元祖訥子思ひ出る儘心得を記し又自分の發明せし藝道の意味よりシテワキといふまでの心得を

記せし書也

右之三書近頃印行に有といへどもたゞ其肝要計を出す尤右三書の中をもあらはせども印刷にもれて寫本にあるを人の殘しをけるをいしへ見て忘れぬ計を出すよつて誤謬少しとせず猶好人の校正を俟のみ

一古人坂田藤十郎いはく傾城買やつし事は第一至て大やうに及すながらも藝にかゝると大名高家の氣にならねばうつらぬものなりさればとてそのみに心かけると得手子細らしく見ゆる物也それにては大やう上品國のかみの若とのとは云れずひとへに和らかにのつそりとしかも子細らしくなくむつくりとせねば實の和事師にあらず雲上と子細らしきとのわかちが大切也利口過小きりめくは以の外の禁物なり我藤屋伊左衛門を六度佛の京を三度迄して度毎に當りを取しは外ならず右のところを工夫せし故なりと云き

一三代目嵐三右衛門江戸市村座へ下る暇乞に日頃心易き上役者中役者五六人も招き立振舞して彼是雜談の次第に今の役者江戸は知らず京大坂を見

るにとかく氣のぬけるよふに見えしされば大坂にて狂言梅の山兵衛に敵役三笠城右衛門長吉には我なりし金を懐中して花道を出しに跡より城右衛門そろ／＼付て出て来るうしろより長吉とこへ行と聲をかけしに初目にはそつとして色までかはりしと天の井又右衛門が云し也それより毎日／＼出ると今聲をかけるか／＼と思へば後よりさむけだつやふに覺し也是全く城右衛門が仕打われらが肝に答しゆゑなり實と惡とのかはりめはあれど相手の

きもにこたへるは同じ事也我は夫より其時の心いきを忘れず皆も存する如くわれは惡と言事はみぢんもせし事はなけれども兎角相手の氣にこたへるやうと心がけし故にや父祖に劣らぬほどにはなりしと云き

一訥子の師匠澤村長十郎(實名備中屋長右衛門)或時けいせい貫の狂言相手の傾城は萩の八重桐是又上手なれど腹を立障子を立切りは入場とかく長十郎氣に應せず幾度仕直してもそれは町の女房の腹を立し也それにては武士の奥方の腹立し也などと仕直しても氣に入らず八重桐もはや實に腹立しゆる

足音もあらく障子をつよく立しを見て長十郎笑ひながらそれよ／＼それにてよし明日より其心得を忘るべからずすがなりと擧しと也さすれば實に腹立程の思入なくては相手の氣にこたへずと見えたり

一金子吉左衛門云しは役者と云者はかはりし物也當り狂言なれば幕引馬の跡足までもよく見えるものなり不當りの時はさしもの名人上手も常よりは二割がたも下手に見える左すれば當り狂言の時の心得にて當らぬ時の工夫有たき物也大概の役者も當らぬ時にははやと見たり又肝心の時笑出しなどする故彌見物の目にもあしく見えるなりと言き是も修行の一つなるべし

一柏薙いはく我等は元來京生れなれば素人のうち大坂奈良をはじめ安藝の宮嶋伊勢の古市尾張名古屋杯へ行し尤役者に成べしと思ふ故いつとも先芝居をば見し也夫に付今考ふれば近頃は藝道はみだりになりてや／＼もすれば立役より親父方花車形實惡敵役道外迄もする様成しは藝道衰微と云べし尤も我も先年親父形を京都大坂江戸ともに二三度も

仕たれども是は役者すくなく無據作りかたよりの頼み故なれど是以てよろしからず三ヶ津共にむかしは立やく敵役親父方花車形若女形娘かた道外子役色子とみなそれ／＼にわかりし故若年の者は脚みし程に若衆形にては門之助袖岡庄太郎市松など若衆形に上手に出来し也京大阪にては菊次郎菊五郎桑三郎喜代三郎など上手に出来し也然るに近年はみな立役より諸方を兼て勤る故親父形花車形などは有てもなくともとなり自然とやみたり追付道外方若衆形も止むべしよからぬ事と云きいかにも名人の見る所明らかにて今は残らず立役より勤る事になり剩へ立役より女形迄當たがる世の中とはなりぬ

一元祖路考市村座にて女鳴神大當りせし其夏路考少し不快にて益後迄引込し休の内ある心易きもの來りて云けるは當年の鳴神大當り出端緋の衣珠數柄香爐携へての出甚殊勝らしく見えそれに引かへ咄を聞とそろ／＼行義くづれ取亂したる思ひ入至ての大當りはいかゝの心得にありしや末に至りて五月節句より五郎十郎夜討を鳴神の一念にて幽霊の

面體少しも常に替らすうす青き色もなくやはり美しく其癖姿み強く見物の中男がぞつとすると云しを正しく聞たり我も三四度も見しがまことに妙也と思ひし故にさだめて心いきも常とは替るべしと思ふなりいか／＼と聞しに路考答て心持とて外になし一舛鳴神は女にておみわと云女が十郎にぞつこん惚て敵工藤をうつと十郎は討死するは極てしれし事故何卒祐成を殺しともなくそれ故に逆澤湯の鏡を瀧壺に封じこめしと言が狂言の大筋也我はただその大筋にそむかぬやうにと計心得比丘尼にはなりしかど十郎を片時も忘れぬと云を第一に心得し也切の幽霊又白衣觀音などはやはり常の女形の顔のこしらへにかはる事なしさばき髪長の長き故にすぐく見えしならん幽霊なればとて若女形の顔のこしらへに案じなどして凄く見せんとするは色悪實惡の仕うちにて女形のいきにあらずと云しと也此下の二ヶ條は子が聞し一説をあらはす是は實曆三西三月葺屋町巴屋山九郎といへる茶屋へ行し時帳元へ至て心易くせし何がしと云聲色遣ひ予も前々より知るものなりその者件の巴屋が二

階にてひそかに物語しを記す虚實は我あづからず説のおもしろさまゝ記す

古人中村富十郎(慶子)は古人名人あやめが子にて人のゆるせし上手名人にて極上々吉とまで評判記に位を付し者なりし先年大阪にて揚羽の長吉と云若衆の男達をして大に當りしと云事専ら沙汰せしを瀬川仙魚聞て扱々慶子は狂言は上手藝道の心がけは下手なりと云し中役者并仙魚が弟子の秘役の女形まじり其譯はいか／＼と問しに仙魚答て慶子ほどの上手にて女形のみさほを守らずしばしも譽られぬと心さびしくなり何卒して當りを取り見物に譽られんと思ふ心有ゆゑに若衆形をして人を投たり切たりして當てたくなる也せめて一度かしむて二度もして止ればまだしもなれどもそれが當るとつる癖になりて又しても／＼それが當たくなる物也こゝを以て女形一通りの眼でみれば下手なりと言べしと語りき格別の心いき面白し成程仙魚が云ひしごとく江戸にても中村座秋狂言に右の長吉の若衆形を出し海丸がこは色にて仕うちはよかりしかど少し興のさめし心ちしたり其後も森田座春

狂言にとう三郎にて野鹽夕霧慶子藤屋伊左衛門にて此時も海丸の身ぶりこはいろ大切に竹拔五郎の荒事其翌年も同座にて是ものしほ相手にて若衆の出後琵琶法師の塙頭巾を取て景清になる仕うち日向句當を景清と見あらはさるゝ塙至極よといは言しかど女形の舛は甚崩れし也又其後市村座七變化の公家悪珍らしと云しかどひるき連中は慶子は本氣の沙汰にはあるまじきとて氣のどくがりし慶子心にては柏莖を生うつしにすると思ふ様子なれば自然と木場の親玉と聲かゝりし也予も見しがいかにも悪公家は海丸也し一舛慶子器用過ての心得違と見えたり都て上手も譽るかひなく當りが少し遠のけば自分の身にもさびしくなり又しても女形の立役めきし事にて當たく立役は實惡女形などをして當たく思ふは下手の常なり江戸の四天王どもは言しとなり

日用の談にも本らしき嘘もあればうそらしき本もありとや予が親しく見聞せし事にてうそらしくても出所は二丁町より出て本らしいうそかもしらねど聞にまかせて記憶のわるひ耳の底から

ひろび出して書記しぬたとへうそでも日用に害なし本なりともはた人生の有用にもならず書たもかゝぬもおなじ事はひとつ事にて餅は雑煮なりと云々

文化二乙丑年五月雨の比 計魯里親主人戯述

東都之巻 附名家略系

元祿末年より享保始迄之名前

江都三座大概

- 名物男名人 至上手 中村傳九郎 上手 生嶋新五郎
- 中村七三郎 上手 勝山又五郎 横山八郎次
- 宮崎傳吉 元祖至上手 猿若山左衛門 中嶋勘左衛門
- 市川團十郎 元祖上手 松本幸四郎 早川傳五郎
- 村山平右衛門

- 上手 音羽次郎三郎 親交方上手 四宮源八 道外名人 西國兵五郎
- 山平九郎 江戶七太夫 大谷廣右衛門 市川團四郎 若林四郎五郎
- 坂東又太郎 中嶋三郎四郎 勘左衛門弟子 圭笠 市川團藏 西國兵助
- 南北孫太郎 湯鳴天神住 小川善五郎 宮川八郎左衛門
- 吾妻藤藏 早川初瀬 荻野澤之丞
- 嵐喜代三郎 藤村半太夫 袖崎歌流
- 袖崎和歌浦 澤村小傳次 後三佐和右衛門下云立役也
- 津川かもん 嵐和歌野 早川新藏
- 已下享保半より予が見し名目なり 元祖古今名人 澤村宗十郎 大谷廣次
- 市川海老藏 古今名人 幼名九藏 至上手 十町

- 元祖 敵半道役 大谷廣右衛門 始東洲 元祖 本實事武道太刀打 大谷鬼次 坂東彦三郎 至上手 新水
- 至上手 五粒海丸 後水場親玉下云三舛 三代目號德辨 三升屋助十郎 後白猿 七左衛門
- 市川團十郎 四代目 五代目 市川團十郎 始松本幸藏 六代目 早世 市川團十郎
- 七代目 市川團十郎 白猿娘出生 松本幸四郎 娘 高麗屋錦考 始嵐玉柏 市川雷藏
- 實父松島屋喜平次 二代目豊竹和泉太夫 三代目澤村金平助高屋 市川八百藏 始吉三郎定花 後中村傳藏中車 市川八百藏 三代目 市川團藏 上方座
- 四代目 市川八百藏 二代目江戸出生 市川團藏 三代目 市川雷藏
- 實子 市川團三郎 二代目 坂田藤十郎 二代目 市川雷藏
- 二代目始吉五郎早世 始瀧川歌川歌川四郎五郎 始田之助江戸 澤村宗十郎 紀伊國屋
- 澤村宗十郎 納子深川住
- 三代目 大谷廣次 四代目 始龜吉 大谷德五郎 二代目 大谷鬼次
- 坂東彦三郎 美男 河虹末子 二代目 中村七三郎 一代上手 荻野伊三郎 初町 實子 中嶋三甫右衛門 號天幸
- 二代目 中嶋勘左衛門 實子 中嶋勘左衛門 三代目 中嶋三甫藏 早世 中嶋三甫右衛門 號天幸
- 二代目 中嶋三甫右衛門 天幸弟 中嶋三甫藏 實子 中村助五郎 二代目 中村助五郎
- 坂田半五郎 坂田半五郎 下り元祖實惡上手 市川宗三郎 三代目 市川宗三郎
- 立役敵役上手一代切 初代上手始竹田巳之助 富澤半三郎 坂東三津五郎 下り新九郎より三代目 敵役半道 中山文七 鳴見五郎四郎
- 後伴右衛門 成川十郎左衛門 市川辨吉
- 鎌倉長九郎 市川勘藏 澤村長十郎

凡々の輩除之

鶴屋南北 音八次男
坂東又太郎
二代目 嵐音八 道外
市ノ谷三五七 市川正藏 相違門人
金子萬徳 中村吉兵衛 號二朱列
花車 上手 橋本大次郎 同
澤村源次郎 同 玉川太左衛門 後出家
同 名人 立役後實惡海丸弟子 始女形辰之助
袖岡政之助 津打門三郎 後津山友藏 富澤辰十郎 後立役
紀伊國屋訥子門弟 始萩野藤藏
澤村藤藏 中村源太郎 中村竹三郎
三條勘太郎 後立役和歌浦金十郎 袖崎三輪の 同 いせの
後花井才三郎
山本花里 元文の頃京にて三條波江 山下龜松 嵐富之助
嵐宇源太 玉澤林彌 玉澤才次郎
元祖所作地藝名人 地藝世話武道人 二代目女形
瀨川菊之丞 瀨川菊次郎 吾妻藤藏

瀨川歌川 二代目重ノ井殘吉 吉兵衛子 早世
澤村小傳次 森田勘彌 中村吉藏
二代目路考 瀨川菊之丞 三代目 瀨川菊之丞 末二記
嵐喜代十郎 嵐三勝 岩井喜代太郎
京四ノ子江戸ニテ死 山本京藏 尾上菊五郎
姉川大吉 嵐小伊三 花川市之丞 龍事實惡始袖崎菊三郎
元祖若衆形 始坂東愛藏 始中村桑四郎
佐の川市松 始坂東愛藏 市川左團次
世話女形上手 市川市松 佐の川市松 始中村桑四郎
元祖丸一トテ若衆形名人 始老松又辨藏 新軍子始辨之助
市川門之助 市川門之助 流の家新軍 市川男女藏
極上々吉享保半早世 嵐瀧三郎 瀧川民五郎 新軍
出來嶋平八 姉川大吉 同 常盤
三代 初代道外 四代目始松本幸藏 六代目 岩井半四郎
吾妻藤藏 上ニテ死 岩井半四郎 始桑三郎
京下リ武道地藝 世話事上手後松本七藏 始桑三郎
小佐川常世 元祖朝比奈名人 二代目初勝十郎立役
二代目勘三郎隱居シテ傳九郎ト號 奴荒事

三代目 二代目八百屋子 市村羽左衛門 市村羽左衛門
中村傳九郎 寶永ヨリ座元始竹之丞何虹 始藤藏又龜藏家橋
實子始七十郎又龜藏 二代目弟子 小佐川常世 三代目路考門弟
市村羽左衛門 龜全 瀨川路之助
三代目 始市山富三郎後 同人門弟 前勘彌 森田八十助
瀨川路考 同路三郎
八十助子 一代役者 近江屋 始秀十郎後 小次郎ト號 實惡
森田勘彌 中山富三郎 松本米三 新九郎文七ノ中山ナランカ
當時若衆形

上手 藤田小平次 元祖上手 坂東彦三郎伯父
小佐川十右衛門 柴崎林左衛門 中村四郎五郎
岩井半四郎 澤村長十郎 上手 江 杉山勘左衛門
音羽次郎三郎 小の川宇源次 上手 江 姉川新四郎
三笠城右衛門 小の山宇治右衛門 初代 柳山平右衛門
上手實惡 大鳥道右衛門 江 片山小左衛門
瀨田團右衛門 藤川武左衛門 澤井園右衛門
初代 片岡仁左衛門 藤川武左衛門 天の井又右衛門
道外上手 山田甚八 金子吉左衛門
百人一首源三郎 古今新左衛門
後立役 正徳末より寛保延享寶曆明和の頃までの立役
大槪 上手新九郎子 市山助五郎
中山新九郎 中山文七 上手 江 慶子養子
嵐三右衛門 嵐三十郎 中村新五郎

上手始女形 藤岡大吉	初代江 嵐三五郎	二代目江 同 三五郎	元祖古今之名人 よし澤當浦	二代目始四郎五郎上手江 柳山小四郎	中村千彌
中村十藏	二代目 中村十藏	上手 民谷四郎五郎	三ヶ津惣頭柏屋七	元祿の頃 玉川半太夫	上村吉彌
山本京四郎	染の井半四郎	二代目 嵐三十郎	江 お七の元祖 嵐喜代三郎	瀨川竹之丞	江 水木辰之助
山下又太郎	市の川彦四郎	古今所作名人江 佐渡嶋七五郎	加茂川のしほ	市村玉かしわ	尾上多賀之丞
江 四郎五郎改 民谷十三郎	藤川平九郎	上手江 嵐七五郎	尾上左馬助	霧波千壽	霧波瀧江
篠塚嘉左衛門	上手 三保木儀左衛門	上手 八鹽武右衛門	享保の末始江戸ニテ 山下龜松 三條波江	江 淺尾十次郎	江 霧波尾上
嵐勘四郎	上手 藤川半三郎	今村七三郎	中村富十郎	江 佐の川万菊	上手 萩の八重桐
大谷廣八	江 市山傳五郎	中村歌右衛門	江 嵐和か野	辰岡久菊	佐の川花妻
江 笠屋又九郎	江 淺尾爲十郎	三代目江 片岡仁左衛門	江 富澤門三郎	江 姉川千代三郎	初代手江 山川金作
二代目續今は絶る	道外 大松百助	道外 嵐他藏	江 山本京藏	三保木七太郎	あらし小六 後三右衛門難助
南北三ふ	上手道外 松嶋茂平次	小倉山百助	あらし難助	芳澤あやめ	淺尾元五郎
合點彌左衛門	嵐他藏	後難助江戸ニテ死	澤村國太郎	中村喜代三郎	中村象太郎

江 山下八尾藏	江 尾上多見藏	中村松江 後里江	藤村半十郎 女形にて半太夫と云て武道世話事せし 上上吉までの女形なりし半十郎と改立役と成二年 勤て又女形になる
初代江 井花 中村のしほ	中村のしほ	芳澤いろは	三條勘太郎 江戸根生の女形にて器量よくしかも上 手なりしが元文の初立役名は改す立役にて度々當 りし也後延享三年寅冬より花井才三郎と改め中村 座にて勤し也
上手江 芳澤あやめ	始五郎一又咲之助	大概予が覺し通り諸記に書之寶永正徳よりの評 判記大かた所持せしを先年類火のために焼じし まことにそら覺を書しるしをきぬ定て相違多か るべししる人これを訂正あらば珍重ならんと云 爾	富澤辰十郎 是も辰之助とて本挽町へ下り夫より中 村座へ移り少しの間女形をせしが間もなく立役と なりて市村座にて死す
初瀬 早川權九郎 初瀬女形より立役にしばらく勤るとい へども女形の相應せず依て間もなく女形に復す	袖崎和歌浦 和歌川金十郎 是も女形袖崎和歌浦立役になり勤る といへども初瀬に同じくまた女形に復す	袖崎歌流 京女形にて江戸へ下り武道事などよかり しが上方へ歸り歌流佐和右衛門と號し勤ほどなく 死るよし	尾上菊五郎 女形にて延享の頃大坂より下り器量よ く漸廿六七の年ゆる甚ひるき多く若衆形五郎齋藤 五伏見のけんくわなど大當せし折々女形も勤し所 寶曆の始立役になり千手次郎海丸と車引當りし也 夫より始終立役にて終に由良之助毎度當りし也
高麗屋 松本幸四郎 松本幸四郎の名は元祖其次木場松本七 藏之女形にて幸四郎とて立役に成其後子息の幸藏 を幸四郎と號し其後今之通り也始櫻山松三郎夫よ り市村座へ出元文五年春櫻山金吉其後中村座にて			

瀬川菊次郎門人と成瀬川金吾にて若衆形なりし夫より元服して錦次と號し木場の弟子に成て市川武十郎其後染五郎夫より高麗藏其後松本幸四郎と號次高麗藏を子へ譲りし也
木場の海丸一端は松本幸四郎へかへり一年過て錦幸へ松本幸四郎をゆづり海老藏となる

三代目 助高屋高助

甲子ノ十一月改
市村座へ出勤

四代目 市川八百藏

岩井喜代三郎改

伎藝名家系譜

元祖 市川才牛 團十郎 幼名海老藏 下總國市川村産

二代 柏蓮 其角門號才牛又柏蓮 後團十郎父の幼名に改め海老藏と號

三代 德辨 升五郎 團十郎 早世 實父三升屋助十郎

四代 海丸 三升 始松本七藏 幸四郎 團十郎 五粒 亦幸四郎 海老藏

五代 三舛 始松本幸藏幸四郎 團十郎 蝦藏 七左衛門請地に隱居

六代 三舛 團十郎 幼名海老藏

七代 三舛 幼名七之助 團十郎 蝦藏娘出生 當時市村座出勤

實子 龜三郎 故有熱居して死

澤村 春五郎 後宗十郎深川住

歌川 四郎五郎 後宗十郎京都にて死 始曙山

訥子 本氏三木氏始善五郎又喜十郎宗十郎 長十郎門弟 後年助高屋高助と號す

など柏蓮訥子も稱美せしと云

薪水 幼名菊松彦三郎 美男 早世

薪水 彦三郎幼名吉五郎 實市村何虹末子

元祖才牛門弟 市紅 團三郎 號三河屋 荒事愁歌上手

弟子 市紅 始友藏 團三郎

道外上手 仙石彦助 三都共あたり 魚樂 始仙石龜太郎後助五郎 少長弟子になり號中村 助五郎

實子 魚樂 始助次後中村助五郎 近年頭取魚樂となる 助五郎 始助次中役者

眞の實事太刀打の名人會我にては工藤鬼王

薪水 號坂東彦三郎 伯父篠塚次郎左衛門 幼名菊松

丸屋 始兵次 壽町 號十町 後鬼治

東洲 駿河屋 始辰松文七後坂東又太郎 又大谷鬼治 號十町

十町 元祖大谷廣右衛門實子 廣治

田之助 源之助弟 女形

源之助 當時市村座

訥子 紀伊國屋幼名田之助 實子 後宗十郎

元祖半五郎
杉曉 享保十九年死

杉曉 實子にあり始仙石左十郎
又坂田左十郎
田川彦十郎といへ
る道外の子なり
半五郎上手正月屋

杉曉 始坂東熊十郎と號す
後坂田半五郎と改め早世

中村傳九郎門弟

秀鶴

仲藏 始大谷鬼治
榮屋 中山小十郎
後仲藏と云 早世

元祖 中年京の商人三十餘にて女形となる
路考 菊之丞 濱村屋

二代目 王子 養子王子村農家子路考見立て乞詣
路考 始吉次 後菊之丞

三代目 始市山宮三郎又瀬川菊三郎
路考 菊之丞今以俳名舞臺の名とす
文化五戊辰十一月改仙女

弟子

路之助文化五十一月路考と改

同 同六巳年故有て中村里好と改
路三郎 仙女と義絶

元祖路考弟

仙魚 誠菊次郎地藝の名人後なし惜むべし

大坂三代の座元の名

杜若

始松本長松又松本七藏
岩井半四郎 實父
大和屋 西川十三郎

半四郎 始榮三郎

榮三郎

三 俳優畧系譜

江戸浄瑠璃 江戸三座芝居へ出しは芝の字を
記す

江戸元祖 次郎右衛門別號して淨雲と號
薩摩淨雲

實子 次郎右衛門

薩摩太夫 大薩摩 次郎右衛門

芝 正徳より
主膳太夫 三座の芝居
元文の始まで

芝 薩摩掾
外記太夫

式部太夫

若太夫 七代目 何虹弟
市村羽左衛門 善三郎

土佐少掾橘正勝

土佐太夫 虎之助

土佐太夫 元文寛保
延享の頃

長門太夫

肥前太夫

江戸半太夫

半之助後剃髪して坂本梁雲と號

江戸半太夫 梁岷と號す元文より寛保の頃まで

芝 江戸太夫河東

芝 河東

芝 始餅屋宇平治
河東 吉原揚屋町に住す

同 江戸藤十郎 二代目河東が弟子師と絶して
別家となる

同 江戸双笠 二代目河東門人別家となす
是も師を

同 沙洲 湯嶋に住す薪木屋平四郎と號享保の木
より延享寛延の頃専ら唱世す

二蝶 卅四人二代目河東が
門人也其外多し略之
蘭洲 つる葛屋庄三郎二代目河
東門人名高き姐家なり

元祖薩摩淨雲門弟
丹波太夫が弟子
櫻井和泉太夫 一代絶家

右は俗にきん平ふしと云堺町に櫓を上し也甚あしき事のみ文句につわりし第一には公平が鬼を挫ぐ事のみ多し予も其本をみたりいかいしたる事にやふと金平死せし事を作りしより不當りに成しをまた公平蘇生と作り直して一はやりせし由享保の始めなるよし予七八歳の頃まできんびらふしと言て小唄をうたひしも七十餘年のむかしになりぬ

大坂 淨瑠璃元祖 伊勢嶋宮内

始嘉太夫 宇治加賀少掾藤原好澄 是はふし事八景事などの元祖と言へし

井上播磨少掾藤原要榮

宇治市郎兵衛 音聲家の祖として可也

竹本筑後少掾藤原博教 始義太夫 俗稱天王寺屋五郎兵衛

竹本若太夫 後に一派豊竹越前掾と號系列に記す

竹本頼母太夫

江 陸奥彦太夫

陸奥茂太夫

上手 竹本此太夫 後豊竹筑前少掾と號系列にあり

竹本和泉太夫

上手號志海 景事道行の上手

竹本播磨太夫

政太夫中興名人 俗名長四郎 此外門人多し畧之

竹本大和太夫

門人別に記す 播磨掾門弟 江 竹本陸奥太夫 平野屋大兵衛音聲無双

大和太夫弟子 竹本大和太夫

始三輪太夫内匠太夫大隅少掾 豊竹座にてしばらく豊竹上野少掾と號す名人

竹本河内太夫

後豊竹座にて駿河太夫と號す

竹本春太夫

江 竹本筆太夫

名護屋播磨太夫

始雅樂太夫 一度竹本美濃太夫

江 竹本錦太夫

錦屋武兵衛 始豊竹越前門弟にて豊竹和佐太夫と號す

竹本筑後門弟 始若太夫 元文六年江戸へ下る鉢の木出語

豊竹越前少掾藤原繁泰 人皆感之年六十五 寛保元年江戸に下り鉢の木并枕物狂ひ等出語人皆感之年六十五 死する年七十五

豊竹要太夫

豊竹彙太夫

豊竹肥前少掾藤原清正

始新太夫 門人多しこゝに略す

始竹本嶋太夫

同 豊竹十七太夫 同 豊竹嶋太夫始和佐太夫

同 豊竹若太夫

同 豊竹加賀太夫

同 豊竹伊勢太夫

同 豊竹村太夫始八木太夫

豊竹文字太夫

一夏肥前少掾 後新太夫 大和屋武兵衛

江 竹本内匠太夫

江 竹本若狹太夫

江 竹本千賀太夫

此外門人多し畧之

竹本出雲太夫

江 竹本政太夫

江 播磨掾弟子 竹本政太夫 始小政太夫近來名人 俗名十兵衛

江 竹本住太夫

始中太夫 俗稱利兵衛 竹本信濃太夫

江 竹本紋太夫

後上總太夫 江 竹本紋太夫

竹本紋太夫

同 竹本七太夫

同 竹本伊木太夫 上手俗あましほと呼ぶ

竹本長門太夫

豊竹岡太夫又兵衛

豊竹鐘太夫

豊竹駒太夫一派江戸へ三度下る

豊竹丹後少掾 始撰太夫 器正 富澤町住江戸に終る門人多し表徳に此字の音を用ひきしやうと云

豊竹喜美太夫辻兵助

豊竹柚太夫

豊竹筑前少掾

始撰本此太夫

藤原爲政

豊竹此太夫始時太夫

豊竹伊勢太夫始佐太夫後號豊竹伊勢

竹本友太夫兵助

豊竹薩摩太夫 京屋四郎兵衛 花井 須磨太夫 始陸奥太夫 門弟 浦太夫

豊竹麓太夫

山本角太夫 道具屋なり故に 道具屋ぶしと云 後阿波太夫

表具屋又四郎 表具屋ぶしとも又四郎ぶしとも云

聲よかりしと也一體ふし付上品也又四郎がふしを元とし作畧して一流を起す

京都 岡本文彌

岡本一抱子近松門左衛門弟也揚号名人百中なりわたる昇下して一中と號す享保の頃江戸へ下り名を上る

江 都太夫 一中

江 都國太夫 半中

後受領して宮古路豊後掾と號一流の祖となる

江 都秀太夫

是又千中ぶしと云江戸河東と交り角田川船の内と云は河東とかけ合のふし付にて名高し

江 宮古路文字太夫

後常磐津と號す 俗名駿河屋文右衛門

同 宮古路加賀太夫

後富士松薩摩掾と號

同 宮古路綱太夫

同 宮古路數馬太夫 後松本と號下品の一流也

江 富本豊前掾

始宮古路品太夫 後常磐津小文字太夫 後師と絶して別家となり一派の祖となる

江 富本齋宮太夫

後剃髮して延壽齋と號す俗もぐまやと呼ぶ

江 富本豊前太夫

幼名馬之助十歳計に孤となり齋宮が爲に補助せられ始豐志太夫と號す今専ら流行一中豊後 千中文字太夫等何れも門人多し故に畧之

江 朝日若狭掾

始宮古路敦賀太夫と號し加賀太夫高弟なり後半師と絶して受領せしが程なく死す近頃流行せしつるが新内なる者は若狭が弟子なりと云

寛延寶曆のころ北廓に春富士正傳なる者ありかれは京都にての豊後節也正傳ぶしとしてや、流行せり江戸の音聲よりは奇麗なりと云

江 明石越後少掾

始森川太夫と號す播磨門弟後内匠が音節をうつし名をなす江戸へも明石森太夫にて下る淨瑠璃三つ計り新作をなし其後断絶

陸奥竹小泉太夫

と横を上置は左の佐和太夫が芝居の由

陸奥竹佐和太夫 世話事かつら事の上手 淨瑠璃是も三つ計にて新作なし興行せしが寶曆のはじめ断絶せり

作者部類大概

江戸上古さつまぶしの頃の作者

北條宮内 何れか神職の浪客と云又倭臣の仕を辭せし人なりとも云

岡清兵衛 江戸舌耕士の祖とも云べし一生太平記補が軍のみ談せし

塚原市左衛門 是も或藩中より出し浪客なりと云ふ

土佐外記などの文句も多分是らの作せると見ゆ

竹婦人 始吉原江戸一の天満屋仁左衛門といへる娼家也五十才計りより剃髮隠居して淺草北馬道

知泉院(俗文箱地藏)地面に庵を下して俳諧の點者となり岩本乾竹と號す俳達源枕伊などのむねをさとり甚雜文ゆゑに二代目の河東頼にて文句を作らせたり其中にも挑灯の紋盡○竹馬の鞭○水調子○ぬれ扇○いの字扇○など絶唱と人々もてはやせしなり予俳諧の師なれば殊によく知れりはじめ俳名○吳丈と號し後に乾竹と號す竹婦人は別號庵號を満足庵といひ又千歳兒とも應一叟とも號せし也其外無益なれば贅せず○性甚猫を好み予が出會せし頃猫十二疋に及べり是又一癖ならずや寶曆九年春死行年八十歳

辭世 雪解や八十年のつくり物

京浪華作者

豊竹座 豊竹座 豊竹座

近松門左衛門平安堂

豊竹座 豊竹座 豊竹座

本氏杉森にて搦紳に仕ふ故ありて仕を辭し元祿の頃より京都芝居万太夫座の作者たり其以後大

坂に至り竹本筑後座の作者をせり世話作者の壘と稱す京都に名をなせし醫師岡本一抱子が弟都

太夫一中が兄なりと言淨瑠璃の作百になんたんとせし中に一世一代と號せしは○雪女五枚羽子板○國姓爺合戦○會我會稽山國姓爺は十七ヶ月せしに入り落す衣裳を始より三度仕直せし故古今の當りと云ふべし羽子板は藤内太郎と言もの五人の兄弟善惡吉凶を五段に明らかに作りし故とかや會稽山五月廿八日明七時より廿九日の明六つ迄を五段に書し故と云傳ふ享保八年卯七月七十有餘にて死すわが行狀をしるしておくにも

辭世はと問ふ人あらば

それ辭世さるほど扱も其後に

豊竹座 豊竹座

豊竹座 豊竹座 豊竹座

竹田出雲號文耕堂

豊竹座 豊竹座 豊竹座

竹本三郎兵衛

豊竹座 豊竹座 豊竹座

序

米の賤と朱堤のないと人が借さぬと是去冬よりの三種の神寶よりは貧乏をくるしみながらも折々はよし原しらす品川見す深川新宿なを夢助二町まちは通つたばかりこれで通ならしやう事がないと此書のむだを見てわらひ給へ忘れ給へと無性てん法貧窮な事賀真雅樂くと誤て序す

後序

友人滅法子來て此系譜を見て地に投じて曰足下この書を著述せる何の爲にするや人生日用に益なく知りて功なくしらすとも可なり抑庶の中をちにもしとかす寧白紙ならばかせをひいた時水ばなを拭ひ且糞をおさめんなまかに文字のまゝをいかゞ予答ていはく我元より人に益ある爲に書せず人生有用の書は今や汗牛充棟劔鎗ヤットフ何ぞ不佞ごときの口説をまたんやたゞ居るよりはと反古の裏へかいて見たのみ覺たが不肖念佛より外しらぬ鈍物無念鹽さんま何に

竹本座

吉田冠二

俗名文三郎木偶遣ひ

全 豊竹座

右之外も有之といへども紛々たる辭作あぐるにたえず略之

江戸

福内鬼外

全 豊竹座

豊竹座

此外にもあれども定らざれば是を除く暇ある時可考

もしらぬ世間も無一さん金はなしア、かねがほしい
ナア我は夫に引かへてア、貸てほしいナアと云々

中古戯場説大尾

近世江都著聞集序

元祿記顯之古今著聞集者建長曆應兩合其撰者宇治亞
相之戯語也後續著聞集者和歌山亞相之狂話也雖人每
其證不詳是聞怪言多書其誠以爲虛以虛爲眞事殆嚴隱
々顯々聖所美也因爰江都著聞辟虛實借其名而已
寶曆七丁丑稔暮秋

近世江都著聞集序

久かたのあめの帝の雲井なる誰殿とやらんのあまれ
し著聞集あり又近ごろもやんごとなき方より續著聞
集といふ書出て世界に鳴る事夥しされば犬著聞とい
ふも有と或書肆のいはれければ犬にもおとる筆のす
さみさきの著聞は宇治と和歌山の兩納言の撰れし處
か犬著聞は誰やらん犬の中にも我はこれ病あるすた
れ犬とて用ひられずあはれ人々必ずめぐみて犬に藥
の小豆の大納言がつくりしゆゑに名付て近世江都著
聞集とはおかしくも題號せしめて書肆駿藤に參らす
るのみ

寶曆七年丑の暮秋

武江講師 馬文耕輯

近世江都著聞集

目次

卷一

一八百屋お七秋月妙榮傳

吉祥寺門前吉三郎

井山田左兵衛混雜相違之事

此件は世上流布のお七傳の疑惑をあかして其眞實を記す所也

卷二

一松竹梅天和政要

湯島の額の眞僞の辨

此件は湯島の天満宮に掛し松竹梅といふ眞僞を糺し其眞實を顯はして辨解す

卷三

一新材木町白子屋お熊仇名の辨

加賀屋長兵衛實儀の辨

此件は享保十一年の御評定所日記を伺ひて其疑しきを除きし眞實の辨なり

卷四

一白子屋一件亡失の辨

此件同く公實の日記にたよりにて其眞實を顯す所也

卷五

一遊女薄雲が傳

一同勝山が傳

一同奥州が傳

一同玉琴が傳

此件は近世遊女のみさを面白きを記て其眞實を拾ひて顯す所なり

卷六

一瀬川路考が傳

一芳澤春水が傳

此件は歌舞妓役者氣取の肝要を眞實にあらはす所也

卷七

一中村少長驛路の辨

一不破名古屋艸履打の辨

一山中怨靈の辨

此件は名人藝の氣取をかんに其眞實をあらはす所也

卷八

一市川才牛覺榮が傳

杉山喧嘩の由來始終

此件は寶永忠信と云雜書の疑惑を解し其眞實を顯はす

卷九

一佐野次郎左衛門萬字屋八橋兩傳

此件は杜若といへる男の八つはしと云傾城に

まよひくもでに物をと申十寸穗大和が艶道通鑑の隠せる所を其眞實を顯はして傳を揚る所也

卷十

一歌舞妓傳助が記

井山村澤閑木偶人精心の事

此件は忠義の匹夫仁にかちしと云其眞實の形町の物かたりをあらはす所也

卷十一

一多賀長湖百人女鴈圖御咎遠流

井後年英一蝶と成の話

一觀世左吉太鼓の妙を得し事

此件は元祿の正説にして公實のまことを顯す所也

惑解斷

- 一 八百屋お七一件は其比の奉行中山殿の日記を其臣中山獨と云者子に見せしを本とす
- 一 白子屋お熊一件は予近來新材木町に住居し其比公廳に懸りし人其土地に多く有て物語するを本とす
- 一 遊女の傳は古今に言傳ふる事多し就中遊客の事を知りし廓内の老長子に語るを本とす
- 一 少長驛路の辨は管子か類柑子を本として其内證へわたる
- 一 不破が草履打は花井桃朝が嘶しを本とす
- 一 山中仙我が怨靈の辨は先年菅祈といふ狂言作りの物語りを本とす
- 一 佐野次郎左衛門が傳は公の御記録に留めて有之よし鎮目何某何事に預る依て子に語るを本とす
- 一 歌舞妓傳介が事は其所の長老現に見聞せし事を語る是を本とす
- 一 多賀長湖が事は其當流の人々現に有て其講席に毎夜來り折から委く語るを本とす
- 一 觀世左吉が傳は予亂舞にたよる所梅若次右衛門は

此左吉が弟子也其次右衛門物語を本とす

近世江都著聞集卷一

八百屋お七か傳

はせを翁の句に

いざさらば雪見にころぶ所まで

此句はひとへに人の志す所中途にして思ひ止らす命をかぎり一決して願ひを起すべしとの下心轉ぶを合圖の雪見の風雅面白し賢を賢として色に替よとの格言むべなるかな色慾戀路の道には人々命を落し或は心中とて相對に死る事來る年も又來る年も絶へざるは人の心の花にて有けるといふ場也ける爰に武藏野の若紫の江戸鹿子と云ふ草紙に仇名を留て狂言綺語の媒と成し八百屋お七と云小女の實傳世に知る人なし只其名のみは高間の山の上つかたより下々迄云ひ誤り間違ふ也予天和貞享のやんごとなき文庫に入て其眞實を得たり其意趣を秘記して爰に傳ふされば今小石川南縁山圓乘寺(天台宗なり元は日蓮宗也元祿の比台命に依て谷中感應寺など)同時に改宗して今天台宗上野の末寺となる)お七が石碑有て人々

是を知る所なり天和三年三月二十九日秋月妙榮禪定尼と云昔むじたる塚有り其施主も絶たりといへども近年堺町葺屋町の狂言座の役者お七の狂言の度にかれが墓所へ花を手向香を燒き塔婆を建て回向供養する事とはなれり誠には是も一の姿の花とはなれり根元お七が出所は加賀能登越中三ヶ國の太守前田家の足輕を勤し山瀬三郎兵衛と云者なりしが寛文中浪人して武士を止め町人と成り駒込追分願行寺門前町と云所に八百屋みせを出して八百屋太郎兵衛と名を改め安らかに渡世しけりしかれども夫婦子無き事を歎き日比日蓮宗の信者なれば只祖師上人鬼子母神七面を祈り奉り受持法華福不可量を願ひけり斯て一女を儲たりひとへに七字の題目のありがたく且七面大明神の申子なりとて名をお七と名付たり日に添ひ月にしてお七成長に隨ひ容顏類ひなく美にして見る人情を通せざるはなかりけりお七生年は寛文八年十月なりと公の留め書に見へたりお七十四歳の春二月この時天和元年也とかや丸山本妙寺と云寺より出火して本郷邊駒込邊一字も不殘燒失に及けり此節八百屋太郎兵衛も類焼に及けるに小石川圓乘寺は太郎兵

衛現在の弟肉縁なれば親子三人其儘圓乗寺へ行て爰に落着けり圓乗寺住持人々をいたはり普請の出来る迄は此方地内に明察の有なれば緩々いつまでも滞留あるやうにと衣類食事等迄さまざまといつまでも滞留する年まで親子三人此寺にて暮し居たり其比圓乗寺に小性のごとく懸り人となり居たりし山田左兵衛と云人あり此人は御旗本(二千五百石)山田十太夫の次男也けれども繼母の讒有りて其家に置がたく且那寺なれば暫く其讒をのがれんために爰におれり後年此山田左兵衛御旗本衆となり文廟章廟兩君に仕へければ此事を狂言綺語に深く恐れその名を不呼小性は吉三郎とせしは實に雲泥の相違也此山田左兵衛は至て美男にして茶の湯連俳手跡など拙なからずやさかた成男なりけるゆへ此寺に滞留申お七はこゝろならずも互に相見ること日を送りて山田がとりなり稻舟のいなにはあらぬ戀の山ふとおもひ初て人目の關を忍びつゝぬる夜の數の重りていつしかわりなき中となりにけりさればこそ末の松山浪越さじと思ひの深かりしに其年の夏過秋來りて焼跡へ新に家居建つらね太郎兵衛も新宅へ移らんと住持へ暇を乞願行寺門前

町に歸りけりしかるにお七は寺にてあひし左兵衛事露わすらるゝひまもなく只明暮に戀したひ胸をこがす計にて物やおもふと人のとふ病ひの種となりけらし其比此近所に吉三郎とて甚不行跡のあふれ者あり博奕を好み大酒して親の勘當を受け近邊をうろたへ歩行或時は近所の寺院へやとはれ火消やしきなどへも入込てわる者の仇名を取て聊の事をも喧嘩にして人にいやがらるゝくたびれ者也親は吉祥寺の門番して居たり是を狂言には吉祥寺の吉三郎とてお七が密通の男に拵へたり實は大なる相違也其後江府に吉三郎と云發心者の坊主有て江戸六地藏を建立せしを人誤て吉三郎心をお七が密通の相手にてお七天和の御仕置後小性吉三郎道心してお七が無き跡弔ひの爲に六地藏建立せしと誠じやかに語る人あり附會の説にして大きに笑ふべしにかに吉三と云道心者六地藏を建立せし也是別人なり子細を詳にせんにはお七存生の節天和元年の比最早六地藏の内二體は出來せし事明かなり此吉三郎道心はお七十五六の節には六十歳計の老僧といへり

吉祥寺の吉三郎はいつも八百屋の見世などへも來り遊び居けるが或時お七が物思ひの顔を見てそもじはいかふ何やら案じ煩ふ體也我思ふに圓乗寺の左兵衛を戀こがるゝと見へたり戀路の習ひ不便なり何卒取持逢せくれんと念頃らしう申けるによりお七嬉しく志にめんじて身の上の事委く語り取持んといふを悦び金銀など少し呉ければ吉三郎文など認させ其中立の便りして小石川の圓乗寺へ持行左兵衛よりも返事を取お七に嬉しがらせ其替りには小袖やうの物を借りて己れが博奕の元手となしけるこそ不届なる奴也後はお七も父母にかくしての金銀自由ならねば吉三郎に合力もなりかねたれば其時はいかやうに頼みても又請合すお七に物をおもはせけるつみの程こそ輕からね是のみならず吉三郎其上に悪事を思ひ立或時お七をだまし申けるはそなた左兵衛に逢度おもはるゝならばとかく火事にて家を焼圓乗寺へゆかずしては望は叶ふ事あるまじ又家を焼けば難なく小石川に行て自由に戀人に永く逢るゝ事ぞかし結ぶの神は火事なる程に只火事有る事を祈るべしとぞ申けるお七は一途に戀慕の闇誠に吉三郎いふ通り火事の

へにこそなれしあはれ今一度火事あらば戀しき人にも逢れんものをと終日夜もすがら居ても立ても只火事の有様になせ半鐘太鼓は打ざると牛込邊の火消櫓の見へながらあら無沙汰の櫓かなうてば打るゝ物なるにこのかこち泣女の愚智戀には鬼ともなるものをと空おそろしくぞ聞へける吉三郎此處に乗じてお七を進めて付火させ其火事に紛れ八百屋の家内案内はよく知りたり金銀衣服を奪取我爲にせんと思ひ立大悪心を重々不届千萬也頼てお七を密に招き兎角左兵衛に逢度ば手前の家へ付火して焼拂ひ圓乗寺へ趣くべし某し能き仕方を教ゆべしとて付火の仕方能々指南し八百屋計り焼捨れば外の家をもみ消べししかればつみにもなるまじ戀の悪事は諸佛もゆるし給ふべしなど申ければお七はせつなる心のやみたとへ未來はせうねつ大焦熱の地獄へ落るとも何かいとはん夫の爲にかにも其通にして圓乗寺へ行んと吉三郎に習ひて頼て或時風はげしき日手前の家の物干へ揚り屋根裏へ火をはさみけるが折節風つよくして燃へ上り忽ち火事と成にけりその騒動不斜吉三郎ひとりゑみして煙の中をかけ付て八百屋の見世へ來り見れば

太郎兵衛夫婦はうろたへてお七が手を引何方へやらのがれ出たり吉三郎あら嬉しと掛硯筆筒の中より衣服金銀取出し盗取て出ける所へ天命のかれず火事場見廻りとして其頃の盜賊改役中山勘解由馬上にて與力同心召連來り給ふ所へ吉三郎怪しき體にて出ける所を忽引とらへ繩をかけこいつこそ詮議あれと召連役所へ歸り給ひけり

松竹梅天和政要
はせを翁の發句に
蛇喰ふとききは恐し雉子の聲
燒野のきす妻乞聲やさしき鳥のすがたもまた美しく千代のふる道引たえすと讀るも内證きけば蛇くふとやあらおそろしと翁も外面似菩薩内心如夜叉のごころにていはれしがいかにも容は西施か楊貴妃のごとくにて心底には惡敷よこしまなるもあるぞかし戀なればとて天下の大法を犯したるお七さらくのがるべき譯もなしさるにても駒込邊の火事のせつ吉三郎は盜賊改の中山勘解由手へ召捕られ其後拷問せられけるに今度の火事は汝なるべしと例の通り銅馬に乗せて拷問強ければ吉三郎白狀申けるは全く拙者は付火不仕候駒込の火付は八百屋太郎兵衛と申者の娘お七と申者の所爲にてこそ候へと言上しけるに依て純明に不及頓でお七を召出されて御詮議有べしとて八百屋一家の者共并町所の長共不殘呼出し詮議有

近世江都著聞集卷二

を付たる大罪を開かず此者大法をおかしぬればいかにも火あぶりたるべしされども此事世界にてさぞかし君の御不徳とさみすべき事也我朝のそしりはなげかはしくも忍ぶべし隣國朝鮮大明へも聞つたへなば日本神國といふ人の心もさぐらんと思ひしに男ならず小女の身としてかゝるごときの大罪人出る事おそろしき國也と笑はんは口惜しき事なるべしと誠に大炊頭篤實の君子にして一旦の理にかへはらず始終日本の瓊瑾をかなしみ給ふこそとわりすぐれてありがたけれ或時大炊頭中山勘解由を呼び給ひて今度お七が罪のがれがたし某かれをかばひいとふ心底にはさらくなれども天下の御耻辱なり何とぞ一通り遠流などいふ様にいたし方は有まじくや去ながら最早御詮議濟し上は是非もなき事なれども渠は歳十六歳と被申しかども能く此段を今一度吟味可被致萬二十五以下に候へば國禁をおかし候とても子供供の事は其罪を一段引下げ宥め申付らるゝ事も有之なり先渠が罪のやうす只おのれが家へ火を付て圓乗寺とやらんへ行度といふ所是疑ひもなき無心の子供の情也能く穿鑿あるべきことぞと被申けり中山

て吉三郎お七對決を仰付らる處に一言の申譯に不及してたまたま白狀に及びいかにも火を付候子細はケ様と申上る因て公法のがるべきやうもなくお七は入牢被仰付ける八百屋太郎兵衛夫婦の歎きやる方なく誠におろかなる女ころの一筋によくなき事を仕出して親のかなしみ世のそしり何と成なんと天にかこち地によして涙淵を成すとはかゝる事をや申べし斯て中山勘解由殿は詮議落着に付近日御定法の通りに火あぶりに被仰付候はん御親書差出さる尤御定法なればあらそふ所もなく火罪に可申付旨御老中方思召也然るに其頃土井大炊頭利勝といふ賢人あつて申されけるは誠に情なき哉かなしき哉件の女は不便といふに不足といへども我朝治世打續民は君の徳に化して戸ざしをわすれ道を譲り畔を譲り刑鞭はぐちて蒲螢となり諫鼓苦深うして鶏おどろかぬ御代なり惣じて天下に罪人多くなるは公の政事不徳成ゆへと唐山堯舜といふ聖人は被仰しとかや我朝は天智天皇の寒夜に御衣をぬかせ給ふ事を承れば誠に左も有るべし我當時の執權職として天下の政事を司る將軍家を補佐する身也古より今にいたる迄かゝる女の火

委細畏り候とて引退き扱其後にお七が兩親所の名主家主等と呼出し給ひ御尋有けるは昨日土井大炊頭殿忝も被仰聞はお七が此度の仕方誠に大人の心にあらず大方は子供心にて前後も辨へず致せしものなるべし最前十六歳と申上しが能く有體に申上べし大切の事也公邊へ對し間違ひ偽を申上る事あらば急度曲事ならんと厳しく申聞せ給へば兩親町所の者中山殿詞のはしを聞取て大さによろこびいかにも御意のごとく此女は漸く當年十四歳に御座候得とも輕き者の儀何方へも御奉公にも出し申度年すくなく申ては有付かね可申と兩親も其身も外に御やしきへも御目見に出し候節十六歳に相成り申候段申立候に付今度も右の通に申上可然と其通り申上候人別帳にも十四歳と認有之候由名主御請合申上候と言上しける何卒助け度と思ひ口を揃て偽りけるも外の虚言を言上するには異にして父は子の爲にかくし子は父の爲にかくす直き事其中にありと論語に聖人の説しめ給ふにも叶ふべし是より中山殿お七を出牢させて家來中山獨といふ者へ預け給ひはなし囚人同前に致しおかれぬ獨はかれをいたはり撫育しけり是ひと

へに土井利勝の寛仁よりして公儀の汚名を思ひ忠貞のいたし方といふべし然るに最初訴人致せし彼吉三郎大悪無道の曲者なればお七が罪を寛めらるゝをねたみそねみて己が刑せらるゝことを残念におもひ中山殿へ訴へけるはお七年十四歳にて其罪をゆるし給ふのよし承り候是いかなる公儀の御沙汰にて候ぞや凡最負依怙の無きを以て奉行とは申せかれは美しき女なるによつて中山殿其色香にめでしの沙汰か其意を得ざる義なりかゝる大罪を助け給はし我々が罪は何とて糺さるゝに及んやと大さのしりけるゆへ中山殿大さにかりて己れにくき大罪人め幼少にて前後もわきまへぬ女にいろくすかしだまして火を付させ己が盜賊せん爲に我が手を出して火を付すといへ共正敷其罪己にあり言語同斷の悪人かなと申給へば吉三郎大さにあざけり笑ひ左様に欺き宣ふこそ奉行の心暗きと申物也子供心のおろかなるをそのかしてと被仰候へ共渠は何から火を付んとは致せしぞ戀ゆへにさむらはすや男女色欲の情をおもふを何ぞ子ども心と申されんや年たけし事は色情の深きを以てあらそふべからずと申けるこそ道

理に留りて聞へける勘解由殿もこの返答にこまられしかいやとよ汝に其事の詮議を習ふべきかふりわけ髪のみかしより井筒にかけしまろがたけ君ならずして誰かあく可とよみしは戀路の情をおさなきより知る事我朝昔より言傳ふる所何ぞ夫を以て證とすべき渠は町所の名主家主扱又渠が父母の申所實正也子の年は父母ならずして誰か知る者のあらんやと申給へば吉三郎猶も言つのりいやと夫れは僻事なりかゝる所にて父母町所の申分はいかなく誠に成がたし夫こそ俗に縁者の證據助けたしとおもふもの白きを黒きと申さるべきや父母よりも何よりも渠が年十六歳に違ひなき第一の證據こそ候へと申ける中山殿大さに腹にすへかね其證據見るべし早く出せと宣へばいかにも申上べしと彼お七が十一歳の時に谷中感應寺といへる日蓮宗の祖師堂に
此節感應寺はいまだ日蓮宗也此後に故あつて改宗して天台となる感應寺の祖師は今同所の瑞林寺の飯がいの祖師是なり
一の額を上たり額の文字は常在靈鷲山法華最第一と云額なり其下に本郷お七十一歳筆と右の通りの額あり

りそれに延寶四年春四月と書て有之候よもや神佛へ虚言は書て上げまじ虚を書ても今更偽とはいはずべきや是にまじたる證據あらじ延寶四より五六七和元二と六年に成申候十一歳より六年てうど十六歳に候はずや何とて見ぐるしくも左様にかばひ給ふぞと以て開いた吉三郎が悪口まじりの道理詰に中山殿も心いかれど理の當然に行つまりしからば感應寺の額を取寄せよと命せられて頓て持参しける處に案に違はず吉三郎が申せしに相違なし
今狂言綺語に湯島にかけし松竹梅といふは此事也中山殿爰において大さにあぐみ果てせんかたなく天下の大法もだしがたく今はかゝる證據世上一統知る處なれば是を用捨せば天下の仕置といふべからずと御老中へ被申上御詮議の上お七は火あぶりに究り鈴が森にて天和二年春二月御仕置に成りにける吉三郎も同罪にてお七と一所に火あぶりに行はれけるとなり是中山殿文庫の日記にして聊も違ひなき實説也予先年公の御文庫に眼をさらしたる勤の節胸に覺へ心にこたへしが今吾講の師たるゆへ憚りを顧す爰に筆記する物也

近世江都著聞集卷三

新材木町白子屋お熊仇名の辨

近年水國と云俳諧師の發句に

美しひ雪は心のむごひもの

此句は雪のいと深ふ降り夜に他より歸り宿の扉をた
たきけれども能ねいりて起出る者なしやるせなく打
起しける後女房やうく起出て腹立顔にて戸を明け
て入り我身は是程の寒氣に難義し道すがら歸りし
に打腹たちて情なや貌美しくても左程心なくてはと
雪にくらべてつらねし發句面白し外面似菩薩内心
如夜叉也お七傳にもあらはずごとく戀には暗き倉橋
山直ぐにはたぬ新材木町に年久しく富有に世を送
りける白子屋正三郎とて家持角屋敷の主にて世に知
る者多かりき

今和國餅と云あり右の場所は白子屋が住居せし所
也今はその地に加賀屋長兵衛とて公儀松傍の御
規式御用相勤る者の家と成一年加賀屋長兵衛傳記
と云書林大學頭信亮しるして渠が篤實を稱る此も

の、忠義傳にあり

右白子屋の正三郎に一人の娘ありお熊とて容顏甚美
くし傾國の粧ひありて多く心を通はす者あり二八の
春秋も過てや、年比にもなりければ戀路の道の山を
なし引手あまたの身なれ共世に逢坂の關よりも我
下ひもの關はゆるさじと彼清少納言がをしへをいつ
しか今はわすれ艸誠に勸學院のすいめは蒙求をさへ
づり智者のほとりの童べは習らはぬ經をよみ來にま
じる者赤しとかや歌舞妓狂言座の隣町にして朝夕
見ゆる芝居の矢ぐらは八百屋お七油やお染がいたづ
らなる仕組狂言大經師のおさんが道ならぬ戀路に浮
名あだ口のむかし語を己が身におしあて、誠に伊達
なる心の浮氣より平生身持はずはに育しはその父母
をしへかたよろしからざる所なり取わけ母親のお常
といへるは其心持至てかたましく慾心の私情いふ
計りなく夫正三郎は生得うつけ者にて商賣の道は少
し計しりて材木の買出し等人並にするといへども世
間向世事の事にうとく世帯向は女房おつねにまか
せ置けり女房夫のうつけを尻にしき我儘をはたらき
身上向をおのがまゝに仕こなし内證にて密夫をこし

らへ物見遊山についえをいとはす伊達衣服を著かざ
り娘お熊に下女召仕もいとけつかうに衣服をかざり
今日は上野のはな明日は角田川の舟遊び芝居の見物
浮氣の借上奢の山をつき高慢の海をなす是必失家の
災遠きにあらすと爪はじきして笑ふ者多かりき此女
房お常をば江戸中にて知らぬものもなく其仇名を二
つ印籠のおつねと申けるとかや去れば娘の子は父親
の教へよりは母親の教誡にてこそ志もたゞしかるべ
きにかゝる母親の身持なればお熊が幼少よりの育に
衣裳の拵髪形もの風俗も芝居役者を見るごとくに仕
立淨瑠璃三味線の外正しき事を一つもしらざれば自
然と惡道へ心をかたぶけり是ぞ姑息の愛とて禮記
に聖人のいましめ給ふとかや白子屋の手代忠七とて
器量風俗相應にして發明なる者あり商賣の道にうと
からず正三郎が名代を勤て町内にも人々渠をば此
家の番頭ともてはやしけるいつの程よりかお熊と人
しれぬちぎりにすだく松虫の露ばかりなるかりの枕
も重る程に藻に住むしの我からと忍び逢ふ中とぞな
りけらし後々は下女のひさといふ者の取持にてわり
なくも終には夫婦の契約して神々をおどろかす起請

の數く取かはしけり此事父母はしらぬ火のつくし
の海の淺からぬ仲人ありて白子屋正三郎方へ申入け
るはお熊殿も年頃に相成り被申外に男子も持給は
ねば似合の養子をして家に根繼の石すへして富貴
繁昌に子孫のさかゆるすを見給へと白子屋夫婦に
すゝめければ此せつ白子屋も女房のおごりはつよく
家内みだりがちにて身上も少し不廻りに成り間屋向
にも不埒多く居屋舖も書入て借金等も出来ければ金
子持參すべき聲も有ならば相談すべしと申に付仲
人此段を聞届け大傳馬町一丁目地主彌太郎手代を五
百兩の持參にて養子として其名を又四郎と呼けり
やがて相談相きわめ又四郎を引取お熊と婚姻を取結
びけり娘はかねて夫婦の契約せし忠七へわけ立すと
泪ながら此事下女ひさより外に我心を知る人もな
しいかいはせんとあんどわづらひいかに二親の仰な
りとても今更婚姻をとくのへ新枕かはして忠七へ義
理たすいづを命をおとし仕廻んかさすれば二親へ
不孝のつみのがるべき道もなし所詮忠七と伴ひて
爰を欠落せんと例の狂言芝居を好きこのんで見置け
れば心中事の芝居風の不了簡計りにて本情に叶ふ思

案もなかりけるされば忠七とも相談して一度は親々の心をやすんずる爲なればと漸々思案を仕直し又四郎と盃して後はしらすまづ婚姻もとのへ千代萬歳のむつごとを父母も悦び町内のひろめも取仕廻ひ是よりして白子屋の見世商賣も相應に繁昌して月日を過ぎしけりされども家内取れもなく亭主の正三郎おろかにして家内取始末行と、かす聳又四郎は昨今の部屋住也母のお常はいつもかたましく奢の心止す娘お熊はひそかに手代忠七と不義の密通亂法にて下女下男もともく、に姦姪にして更に人間のまじはりにあらず其上手代ども、引負金をして欠落取逃するもあり賣物懸け先の間違番頭の忠七も聳來て後は遊女狂ひ悪所通ひなどして親方の金銀を多くつひやし白子屋の身上間もなくさんくにはなりたり爰におゐて白子屋の代々持傳へたる角やしきを賣拂ひ可申相談に相究りける此時も正三郎は平生が魯鈍にて女房と手代忠七兩人の作略也同町に加賀屋長兵衛と云者あり是は新材木町加賀屋彌兵衛と云者の方に年久敷奉公して其後町内へ店を持って段々榮へ富貴の者にして子孫今にさかへ軒端高く千歳の松かざり御規

式の御用遣仰付られし人也此加賀屋長兵衛日比懸意にて白子屋と申かはせし律義人にて有ければ或時長兵衛をよんで白子屋の手代忠七お常と相談して長兵衛へ何卒屋敷を賣たしと頼ければ段々と不如意の譯を聞て長兵衛二人に向ひ申けるはさてく、氣の毒千萬なる事かさなりながら持つたへたる家屋敷を賣はらひ給ふ事さぞ残念に思はるべし殊に聳又四郎殿近年持參金も多く有て候に何とて左様には有之候ぞやその聳殿の親もとへ聞へてはいかやなり必竟家持といふ者ゆへにこそ又四郎も五百兩と申大金を持參して養子に來りしと思はる夫に右の企は以の外の事也凡不如意といふは分限より不相應に奢り有るゆへ也只此上御内儀始めお熊どの質素を第一におもはれて急度物ごと内場に致され忠七も随分と精出して主人を大切に致し商賣にのみこゝろを付碎きなば何ぞ白子屋の身上不如意のあるべきや此段を能々了簡致さるべし今迄問屋前の借金其外世間の不足取賄ひ當用の助けとして日比の念頭なれば某貸して參らすべし先屋敷賣拂の相談は同じくは止り給へと長兵衛方より金三百兩を白子屋へ貸して正三郎方より證

近世江都著聞集卷四

白子屋一族亡失の辨

文取て家屋敷を賣せずして渠を合方せしこそ誠に實氣なる男かなと近里においても是を賞美せざる者はなし此上にも度々白子屋家内の事に付始終此者異見いろく、申せしが用ひずして終には其家を失ひ永く仇名立けるこそ本意なけれ友とするに能き友ありとはかゝる事をや申べき其心おろかにしてかゝる信友の言を不用して終に失家となりぬと云々

去る比俳諧の發句に
きりく、す手足に聲をしほりけり
此句の心は秋の枯野に住虫の我が聲をしほり泣き手足もやせてきりく、すの霜夜の床の浮思ひ誠に天のなせる災はさくべしみづからなせる災はさくべからずと聖人の御ことは難有かな人は己れが爲にする慾心には何ぞ天の荷擔して是をゆるす所有るべけんや白子屋家内にて養子又四郎をばいつしかうとみにくみ妻のお熊繼母お常いろく、と是を不縁し追出さんとはいかれども表向より離縁する時は持參五百兩の金子戻さねばならず何卒して退けんといろく、工風をめぐらしける誠に女のさる智慧に手代の忠七が姦計の工みより思ひもふけて所詮又四郎をひそかに殺して仕舞病死と世間をいつはりかれが親元をも欺きて其跡を忠七とお熊夫婦となつて榮んと工みけるこそおそろしけれ母親のお常も娘不便といやましに

心まよひ又己が身持のあしきまゝに娘の不義を政道
 する事もならざりけり養子鐸の又四郎とお熊が中に
 一男子出生しけれども此子もひとへに手代の忠七が
 たね也と母も合點して愛しけるこそ白子屋の家内皆
 人面獸心といふべけれ扱かれは兼々工みて或時又四
 郎が朝飯の膳部の中へ大毒を才覺して是をそゝぎか
 けて一と口喰ふとすぐに死する處の大秘法をぞ行ひ
 けり又四郎は夢にもしらす只今のかれが命は朝がほ
 の日影待間のごとく也爰に白子屋の下人の長介とい
 ふもの此毒殺の事を少し耳に入たりけん大きにおど
 ろきこはいかに勿躰なき人々の所存かな人は兎も角
 も我朝夕の賄ひ食事の義を司れば後難われにもかゝ
 るべしと思ひければ又四郎湯へ行し時跡より引續て
 湯屋へ來りて申けるは必々御宿にては何にも食事被
 成まじく候とひそかに申ける又四郎申やう何連其方
 は左様には申候ぞや近比心得がたきと申に長介有の
 まゝに物がたりするに又四郎は用心して夫より日比
 懇意なる加賀屋長兵衛方へ行右の趣を物語りしけれ
 ば長兵衛は穩便なる人故又四郎を宥めて其後白子屋
 の妻お熊にも餘所ながら異見をくはへ亭主正三郎へ

向ひ申けるは所詮智又四郎母御の心に不叶事あらば
 是非に不及候まゝ離縁いたさるべし持參金の返済に
 せまり給はゞ爰こそ詮方もなき所なり持屋敷を賣拂
 ひなりと致さるべしと進めけり是は又四郎を其まゝ
 に差置けば必ず災ひ出來んと思ふ長兵衛が厚志の程
 こそ尤也正三郎いかにも貴殿の異見こそ忝しとて
 内證にてやしきを長兵衛に賣金子を請取是を付けて
 離縁するより外有べからずとぞ思ひ此節屋しきは加
 賀屋長兵衛へ相渡しけり今新材木町の長兵衛持つ
 たふる屋敷也其長兵衛子は百太とて世間にて知る男
 也(風流の作者也)其子今幼年の長兵衛也予渠が屋敷
 の内に一とせ借りすまひしければ此邊の事は詳なり
 扱右金子にて又四郎を返しなばわざはひも除くべき
 に悪事は破れやすきこそ天のにくむ所なるゆへか其
 金子を請取し後正三郎妻つね手代忠七もろとも何
 卒して又四郎へ金子差添へずに離縁し其金をば此方
 の要用に致度也とて又ひそかにはかり事を廻らし下
 女のひさといふ者と申合せ下女のきくといへる女
 ありけるに申ふくめ其方主人又四郎寢間へ忍び入又
 四郎へ少し計りにても剃刀にて疵付くれよさやうに

致せし跡にては金銀衣服を取らすべしとてお常お熊
 もろともいろくすかし頼みければ悪因のなす處
 なるかな菊といふ女衣服金銀呉んと云けるに心まよ
 ひいかにも少々疵を付る程の事は致すべしと請合け
 るこそ不届きの事どもなり扱右のたくみは菊に少
 し疵付させて又四郎と菊と心中なりといひふらして
 又四郎に浮名を立させ世間のならぬやうに拵へ離縁
 して持參の金子不返して仕廻ふべき手段也さて是迄
 の趣向にて及にて又四郎を殺す程の悪事迄には及ば
 ずといへども菊が殺んと忍び入しに御詮議落著し世
 間も右のごとくに語りけり斯て下女の菊は或夜又
 四郎寢入し所へ忍び入剃刀にてのんどのあたりを少
 し疵を付ければ又四郎起上り菊をたちまち取ておさ
 へ動かさず其音に人々かけ付菊にも疵付け心中とい
 ひ立る企成しが天の罪なにかはのがるへき其手廻し
 不調又四郎其儘菊をおさへ下人長介を呼び早く町
 内組合家主等を呼集て如此の仕合是にこそさまぐ
 子細あり某渠等が念悪事の段具に存じ罷在る所也委
 細は公儀にて可申上と奉行所へ又四郎并に一家の者
 ども罷出かねての工を委細に申上けるこそ心地よき

時の奉行は大岡越前守忠相にて此事を聞給ふて是は
 誠に大そう成る詮議者也八逆の人多く出べしと流石
 の越前守殿眉に皺を寄せ給ふとかや同町加賀屋長兵
 衛いろく内證扱ひ見れども又四郎親類かつて堪忍
 致さねば終に御吟味と相成る是享保十二年十二月七
 日に落著いたしけり養子又四郎三十九歳繼母常は四
 十九歳お熊は二十三歳下女菊は十八歳誠に古今の悪
 逆なりと公の日記に有る所を拾ひて爰にあらはしぬ

御仕置書左之通

又四郎 妻

くま

此者義手代忠七と致密通不届至極に付町中引廻し
 於淺草獄門に行ふ者也

正三郎手代

忠七

此者義主人正三郎養子又四郎妻と致密通不届至極
 に付町中引廻し於淺草獄門に行ふ者也

正三郎下女

ひさ

此者儀正三郎養子又四郎へ疵付候様にと菊に申進

め其上又四郎妻熊手代忠七密通の儀取次致し旁不届に付町中引廻之上死罪に申付

正三郎下女

きく

此者儀主人正三郎妻つね何程申付候とも主人の事に候へば致方も可有之處又四郎に疵付候段不届至極に付死罪に申付

但し引廻しには不及候

正三郎妻

つね

右常儀養子又四郎へ菊疵付候儀に付常事母子之儀に候へは悪事巧候事露顯依之遠流申付但事濟候迄牢舎たり

又四郎養父

正三郎

養子又四郎へ菊疵付候節早速に様子をも不見届其上妻娘并手代忠七儀一所に乍罷在不存段重々不届成儀に付江戸追放申付

正三郎養子

又四郎

同人 手代

清兵衛

同人 下人

彦八

同人

長介

同人

權介

同人

伊介

此者共御構無之候

右御書付御月番御老中松平左近將監殿大岡越前守殿へ御渡し被成候と也

其比の狂句に

まことに名も畜生の熊なれや

不義はくもりし胸の月の輪

白子やを下からよめば親ころし

聲を殺さんたくみなりけり

身も婦人ころも不仁母の常

げに理不盡の巧みなりけり

近世江都著聞集卷五

三浦遊女薄雲が傳

晋其角句に

京町の猫通ひけり揚屋町

此時お熊は引廻しに出るに衣裳きよらかに出立白無垢の中著うるはしく上へ黄八丈の小袖を著し繩にくくられて馬に乗り襟に水晶の珠数をかけ口に法花經の普門品をとなへ高らかに能滅諸有苦假使與害意推落大火坑念彼觀音力と唱て引渡されけるとかやかゝる時に觀音何としてか救ひ給ふべきや唯頼めしめむか原と宣ひしは平生人々誠を盡して祈れとの事也此已來人の妻子黄八丈の小袖はお熊が引廻しの時きたりとして忌み嫌ひて當世著る人なしは大成るひが事なり八丈はめで度織物なり何んぞかれに因て是を捨べけんや惜ひかなされども不義の女著ける服なればとてきざる心は善にもとづく處か猶々後をよく慎むべき事也

此句は春の句にて猫通ふとは申也(猫サカル猫コカ、)おた巻の初春の季に入て部す也京町の猫とは遊女を猫に見立たる姿也といふ斯有と聞へけれども今其角流の俳諧にては人を畜類鳥類にくらぶるは正風にあらずとて致さず此句は元祿の比太夫格子の京町三浦の傾城揚屋入の時は禿に猫を抱させて思ひおもひに首玉を付て猫を寵愛しけりすべての遊女猫をもて遊び道中に持たせ揚屋入をする事其頃のすがたにて京町の猫揚屋へ通ふと風雅に云かなへたりし心なるべし其比太夫格子の猫をいだかせ道中せし根元は四郎左衛門抱に薄雲といふ遊女あり此道の松の位と經上りて能く人の知る所也高尾薄雲といふは代々有し名也是は元祿七八の頃より十二年へ渡る三代薄雲と呼し女也(近年板本に北州傳女をかける甚非

也但し板本故誠をあらはさるるか此薄雲平生に三毛の小猫のかはゆらしきに緋縮緬の首玉を入金の鈴を付け是を寵愛しければ其頃人々の口ずさみけると也夫が中に薄雲に能なつきし猫一疋有て朝夕側を離れず夜も寢間迄入て片時も外へ動かす春の夜の野ら猫の妻乞ふ聲にもうかれいでず手元をはなれぬは神妙にもいとほらしと薄雲は悦び猶々寵愛し大小用のためかわや雪隠へ行にも此猫猶々側をはなれずひとつかわやの内へ不入してはなきこがれてかしましければ無是非其通りにしてかわや迄もつれ行人々其頃云はやし浮名を立ていひけるはいにしへより猫は陰獸にして甚魔をなす物也薄雲が容色うるはしきゆへ猫の見入しならんと一人いひ出すと其まゝ大勢の口へわたり薄雲は猫に見入れられしといひはやす三浦の親方耳に入て薄雲に異見して古より嘶し傳ふ譯もあり餘り猫を愛し給ふ事なかれと云薄雲も人々の物語の恐ろしく思ひ寵愛怠りけれども猫はただ薄雲をしたひ放れず人々是を追放しければ只悲しげに泣きけり打杖の下よりも薄雲が膝もととはなる、事を悲みけり殊にかわやへの用たし毎に猶も付行け

る故人々度々追ちらしけれ共したひ來るゆゑいよ此猫見込しならんと家内の者寄合相談して所詮此猫を打殺し仕廻んとて手組居る處に薄雲ある日用達しにかわやへゆきしに何方よりか猫來りて同じくかわやへ入らんとするを見付家内の男女追かけ追ちらさんとす亭主脇差をぬき切かけしに猫の首水もたまらず打落す其首とんで廁より下へくゞり猫のどうは戸口に残り首は見へず方々と尋ねければ廁の下の角の方に大きな蛇の住居して居たりし其所へ件の猫の頭喰付て蛇をくひ殺していたり人々もつぶし手を打て感じけるは是は此蛇の廁に住で薄雲を見込しを不知とがなき猫に心を付斯く心ある猫を殺しけるこそ卒忽なれ日比寵愛せしゆゑ猫は厚恩をおもひて如斯やさしき心ねなるをしらず殺せし事の残念さよといづれも感を催しけり薄雲は猶も不便のまり是よりして揚屋通ひの遊女多くは猫を飼ひ禿にもたせねばならぬやうに風俗となりしとなり

山本勝山が傳

京町二丁目山本助右衛門抱にかつ山といふ遊女あり

是はさん茶女郎なれども心いとやさしく敷島の道にかしこくまことになさけふかしかや其頃の俳師風雪が句に

石女の雛かしづくぞ哀れなり

此句は元祿二年三月上巳の折から山本の抱勝山が座舖を見れば雛祭りの調度とり並べたる有夫雛祭は女に生れ出ては人に嫁し子をもふけて其子孫の永く傳はるをもつて要とす故に子なきを去ると云本文あり女として子をもふけざるは浮世の耻の第一とす雛はひな鳥にてたまごより初て小鳥と成しを云也傾城は子なしといふなれば此もの、雛かしづくをあらはれみし嵐雪が風雅尤むべなり此勝山は遊女ながらもこゝろざし實にして物ごと浮氣なる事なし佛を信じ見せ女郎なれば晝夜にかぎらず役所に居る時は夏花をつみ夏書をしてしとやかなりし女也とかやされば髪と結様を一流工夫して世上多く時花りて勝山むすびと名付け其風至極寛にして伊達ならず後は諸侯太夫の室も是をまなび今専ら士農工商の女房娘勝山と云髪を用る事也其比官廳の奉行に甲斐庄何某といふ人此勝山に馴初て多く金銀を費し綾羅の山を築き金銀の

階をかざる其みぎりは朝鮮國の島ひよ鳥甚た拂底なりし名鳥を二羽金の横わたし銀の細はごにて結構にこしらへたる鳥籠の中へ入れて是は珍ら敷鳥にて大名高家の手にも入る事難し子細ありて奉行の勢ひにまかせ得たるが其方へ遣すとて甲斐庄某より給りけり勝山これを恭くおもひ悦びて家内の入へごとくと見せて其後に我座敷へ持來り鳥に向ひ申けるはひよ鳥ヨ、汝はかくのごとき金銀の籠に入て人の寵愛不淺天晴仕合もの也果報めでたしなどいふ人あれども我ひとり汝が心をしり此勝山が身をつみてげにもあはれを知るぞかし廓に年をおくる身は籠中の鳥のごとく身綾羅をまとひよろづにきらを盡すとも愛川竹のとははれ同前にしてかれも王昭君のごとくに胡國の質となり七珍萬寶くからずとも心に任せぬ住居なればたとへ花の都くらべて此鳥も金銀の籠何とて嬉しかるべき汝が心を察せりさぞや大そらの戀しかるらん我がふるさとのゆかしきに思くらべて

とて籠の内より彼鳥を取出しはるか空へ逃しやり